

目次

▼開始前	1
▼PC 紹介	2
▼NPC 紹介 1	4
▼導入 ——始まり	5
▼1日目 朝 ——出発当日	14
▼1日目 昼 ——海古島	19
▼1日目 夕方 ——晩餐会	47
▼1日目 深夜 ——異変	65
▼2日目 朝 ——伝承	67
▼2日目 昼 ——真相	79
▼2日目 夕方 ——秘密	87
▼2日目 深夜 ——急転	100
▼2日目 深夜 ——相對	108
▼帰船 ——約束	124
▼NPC 紹介 2	128
▼怪異	131
▼シナリオ背景	132
▼おまけ ——茶番	133

▼開始前

DL (pokoya) : っと、ではお時間となりましたのでぼちぼち開始していきたいと思います！

熊埜御堂 亜聡 (PL:Lily) : はーい、よろしくお願いします！

小波 絵本 (PL:ごまゆきみ) : はーい、よろしくお願い致します！

DL : エモクロア TRPG「双命」——開始していきます。

よろしくお願い致します。

DL : すくいはそこに。

▼PC 紹介

くまのみどう あさと
熊埜御堂 亜聡

【年齢】：16 【性別】：男 【職業】：高校生

HP:13 MP:11

身体 3 器用 3 精神 5 五感 4
知力 6 魅力 3 社会 1 運勢 3

共鳴感情

表 怠惰(欲望)

裏 劣等感(傷)

ルーツ 庇護(関係)



【外見的特徴】

クセ毛、ぼさぼさ頭(他人が何かしない場合)、無気力そうな表情

【性格】

気だるげ、めんどくさがり、思慮深い、隠れ(?)シスコン

【経歴】

両親を失い、紆余曲折あって、双子揃って養子として幸せな家庭に引き取られた

【好きなもの・嫌いなもの】

好き：一人でぼんやりすること（、家族） 嫌い：カリフラワー、強要されること

【メモ】

めんどくさがりで無気力気味な高校生。現在は学校から徒歩圏内に一人暮らししている。

好奇心が薄くて周りにそれほど興味がなく、興味があるもの以外だとあまり会話が成り立たない。最近は推理小説を読んだり謎解きアプリで遊ぶのが好き。

その反面、直感に優れ、小説上の登場人物の気持ちにも聡く、周囲の変化に気付くこともできる。（が、だからと言って何かをするための人間性がない）

甘えん坊な妹を鬱陶しがに扱う時もあるが、心の底の底では非常に大切にしている。ただ、他人の好意に鈍感なのは早めに何とかしてほしい。

さざなみ えほん
小波 絵本

【年齢】：18 【性別】：男 【職業】：高校生

HP:15 MP:7

身体 5 器用 4 精神 2 五感 5

知力 5 魅力 2 社会 2 運勢 4

共鳴感情

表 哀しみ(情念)

裏 依存(関係)

ルーツ 恋(関係)



【外見的特徴】

金髪ツーブロック、黒のインナーカラー

【性格】

物静か、皮肉っぽい、一途、好きな人には割と尽くすタイプ

【経歴】

想い人を喪い傷心中

【好きなもの・嫌いなもの】

好きなもの：オカルト、御伽雀

【メモ】

(「オトギバラシ」シナリオのネタバレ防止の為 詳しく情報を書き入れない事をご了承ください。)

▼NPC 紹介 1

くまのみどう めいか
熊埜御堂 明香

【年齢】：16 【性別】：女 【職業】：高校生

HP:12 MP:8

身体 2 器用 2 精神 3 五感 2

知力 5 魅力 6 社会 5 運勢 2

共鳴感情

表 甘え(関係)

裏 奉仕(関係)

ルーツ 不安(情念)



【外見的特徴】

よく手入れされたふわふわロングヘア、いつも笑顔

【性格】

明るく社交的、甘えん坊で寂しがり、身内には世話焼き、家族大好き若干依存気味

【経歴】

両親を失い、紆余曲折あって、双子揃って養子として幸せな家庭に引き取られた

【好きなもの・嫌いなもの】

好き：家族 嫌い：ブロッコリー、ひとりぼっち

【メモ】

明るく社交的な性格の女子高生、ちょっと甘えん坊。家族が好き…というよりやや依存気味。特に双子の兄に対しては遠慮がない分依存も強め。

好奇心が強く何にでも興味を持ち、広く浅く知識を持つ。最近は暗号ものの推理小説や、クロスワードやナンプレにハマっている。

反面、少し鈍感で自分に向く他人の好意や悪意には気づきにくい。

周囲からは好意を持たれやすく友人も多いが、一部の人間からは「八方美人」と見られ嫌われている。

▼導入 —— 始まり

DL : さて、まずは亜聡くんの導入から。

DL : それは夏休みまであと一週間ほど、といったある日の放課後。

あなたがいつも通り双子の妹と一緒に帰路へとついていた時の事。

DL : 妹……明香が、少し何か言いたげな表情をしていました。

熊埜御堂 亜聡 : 「あー……。…帰るのめんどくせえっていうか歩くのめんどくせー」

アリス : 「相変わらず怠惰ねえ…」

ドロシー : 『歩かなきゃ帰れないんだから、がんばれ…』

熊埜御堂 亜聡 : 「うるせーうるせー、今日 1 日頑張ったんだからいいだろ。おい明香、お前んとこの助手が相変わらずうるせーぞ……。…？」

熊埜御堂 明香 : 「……………」 はあ、と深いため息

熊埜御堂 明香 : 「……えっ、あ、…なあに？ どうしたの、お兄ちゃん」

熊埜御堂 亜聡 : 「あ？ …いや、別に。…お前こそどうした。ぼーっとして」

アリス : 「明香、具合でも悪いの？ 大丈夫？」

熊埜御堂 明香 : 「あ、う、うん。具合は大丈夫だよ、全然元気！」

DL : 明香は慌てた顔で否定すると、…意を決したような表情であなたに問いかける。

熊埜御堂 明香 : 「……あのね、お兄ちゃん」

熊埜御堂 亜聡 : 「、あ？」

熊埜御堂 明香 : 「今日、家の方帰って来れない…かな？」

熊埜御堂 亜聡 : 「家？ …実家の方か。何かあったのか？」

熊埜御堂 明香 : 「うん、……ちょっとね。……だめ？」

DL : 普段よりも弱々しい「お願い」にあなたは疑問か、もしくは庇護欲を抱くかもしれない。

熊埜御堂 亜聡 : 「…。ま、帰ってもどうせ暇だしな、別にいいけどよ。」

熊埜御堂 明香 : 「、ほんと？」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ」

熊埜御堂 明香 : 「よ、よかった……じゃあ、早く帰ろう！ 待たせちゃうし！」

熊埜御堂 亜聡 : 「あ？ お、おう。ほんとにどーしたんだよ、何かあるなら先に聞けど」

熊埜御堂 亜聡 : 「つつーか、待たせる？」

ドロシー : 『…？ 今日、何かあるの…？』（こてん）

熊埜御堂 明香 : 「ううん、これは……一緒に聞いた方がいいと思うから」

熊埜御堂 明香 : 「ほら、早く帰ろ！ お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「わ、わかったわかった。……？」 訝しげな顔をしながらも深くは問いたさず

アリス : 「あらあら、これは何があるのか楽しみねえ〜」(にこにこ)

DL : 珍しい様子の妹に押され、何事もないければあなたはそのまま実家まで連行されてしまうだろう。

DL : では、妹に引っ張られて実家に着いた時にはもう日が暮れていた。

明香が「ただいまー」と声を掛けながら玄関を開けると、あなた達の母親が笑顔で出迎えてくれる。

母 : 「おかえりなさい、明香さん。亜聡さん。もう居間にいらっしゃってるわよ」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ただいま。「いらっしゃってる」？」

熊埜御堂 明香 : 「あつ、もう？ うんわかった、すぐ行くね！ …お兄ちゃん」

と、明香は控えめにあなたの袖を引くだろう。

熊埜御堂 亜聡 : 「…」

誰がいるんだよ、って顔で隣の明香ちゃんをちらり。してから、のっそり居間へ向かいます

DL : ではあなた達が居間へ向かうと、そこにいたのはあなた達の父と中年の男性が向かい合って座っていました。

中年の男性に、あなたは見覚えがありません。

熊埜御堂 亜聡 : 「??」 いや誰?? の顔

熊埜御堂 久永 : 「おお、おかえり亜聡！ 久しぶり…うん、久しぶりだな！ 元気してたか！」

熊埜御堂 亜聡 : 「ただいま親父。相変わらずだな」

熊埜御堂 久永 : 「お、そうか？ ならまだまだ俺も若いってことだな！」

熊埜御堂 亜聡 : 「褒めるつもりで言ってねーよ。…そっちは？」

熊埜御堂 亜聡 : 見慣れぬ人にも不躰な態度でちらり視線を。

DL : ではあなたがちらりと視線を移すと、中年の男性はびくりと身を震わせます。

白戸 : 「あ、ああ……ええと、は、はじめまして…。白戸(しらと)、と申します、はい…」

熊埜御堂 明香 : 「お久しぶりです、白戸先生。元気でしたか？」

白戸 : 「あ、ああ、明香ちゃん。まあ、ぼちぼちかな…はは。君は元気そうで…よかったよ」

DL : 白戸、と名乗った男は明香の存在を認めるとあからさまにほっとした様子となる。

DL : ……聞けば、彼はかつて明香が世話になっていた児童養護施設の所長らしい。

DL : であれば、一年ほど別々の施設で暮らしていたあなたが知らないのも無理はない。

熊埜御堂 亜聡 : 「…。明香、この人知ってんのか？」

熊埜御堂 明香 : 「うん、昔お世話になった先生！ 会うのはすごく久しぶりだけだね」

熊埜御堂 亜聡 : 「ふうん……」 とりあえず謎は解けたので、視線は白戸さんから外さないまま、近くにあるだろう座布団を引き寄せて適当に座ります

熊埜御堂 久永：「おう、なんだなんだ亜聡。そんな警戒せんでも明香が世話になった人だぞ？ 大丈夫だよ大丈夫！」

熊埜御堂 亜聡：「っげっほ！！！」

DL：久永が景気のいい声でいいながらあなたの背中をバンバンと叩く。

…が、すぐに真面目な顔をして白戸へと向き直った。

熊埜御堂 久永：「さて、役者は揃いましたな。じゃあ改めて白戸先生、さっきの話をもう一度」

熊埜御堂 亜聡：「てめ、親父覚えとけよ…！ …話？」

DL：久永が促すと白戸は頷き、話し始める。

白戸：「は、はい……実はですね、……その、明香ちゃんと亜聡くんの…血縁にあたる方が見つかりまして」

熊埜御堂 亜聡：「…！ ……、…はあ？」

熊埜御堂 明香：「……………」

白戸：「その方、というのがどうもお二人の祖母にあたる方ようで…その、今までお孫さん達がいっしょのことを知らなかったらしく」

熊埜御堂 亜聡：「は？ 祖母？？」

熊埜御堂 亜聡：「俺らも知らねーぞ、そんな話。」

白戸：「の、ようですね……はい」

白戸：「それで、あの勝手な事かとは思ったのですが……お二人の事を向こうに伝えたところ、是非お会いしたいと……」

熊埜御堂 亜聡：「……………はああ？？ 今さらかよ」

熊埜御堂 久永：「まあ待て、亜聡。知らなかったのはお互い様なんだ、誰が悪いってわけでもない」

熊埜御堂 久永：「ただまあ急な話だからな、ちゃんとお前達の考えを聞いてからこっちも答えを出したいって事だ」

熊埜御堂 久永：「なんせ、今のお前達の父ちゃんは俺だからな！ お前らが嫌って言うなら OK は出せん！」

熊埜御堂 亜聡：「っ、……。」

白戸：「……との事でして…今日は、無理を言ってあなたをこの場に呼んだ次第です。はい…」

熊埜御堂 明香：「……ごめんね、お兄ちゃん」

熊埜御堂 亜聡：「……。明香はこの話、知ってたのか」

熊埜御堂 明香：「うん、ちよっと前に聞いた。ただ、やっぱり私だけじゃ答え出せなくて…」

熊埜御堂 亜聡：「…そーか。……………」

熊埜御堂 亜聡：「…お前はこの話聞いて、どう思ったんだ？」

熊埜御堂 明香：「えっと、まずはびっくりしたかな。おばあちゃんがいるなんて全然知らなかったし……」

熊埜御堂 亜聡：「おう。…で？」

熊埜御堂 明香：「それから……会いたい、って聞いてちよっと嬉しかった、かも」

熊埜御堂 明香：「そりゃちよっとは「どうして？」って思ったけど、よく聞けば向こうも知らなかったみたいだし…じゃあ仕方ないのかな、って」

熊埜御堂 亜聡：「……………」 複雑そうな顔

熊埜御堂 亜聡：「……まあ、少なくともあいつ(父親)は、何考えてるかわかんなかったからな。…俺らのことを言
ってねーってのも、変な話だが…」

熊埜御堂 亜聡：「…。メイが会いたいなら、俺も行く」

熊埜御堂 明香：「！ お兄ちゃん…」

熊埜御堂 亜聡：「一人で行かせたって、行った先でテンパってやらかして帰ってこねーか心配だしな」

熊埜御堂 亜聡：「それだけだそれだけ。」

熊埜御堂 明香：「そ、そんなことないよ！ 大丈夫だもん！」

熊埜御堂 亜聡：「嘘つけ。今日の話する時点でやばそうだったぞ」

熊埜御堂 明香：「あ、あれはどう話を切り出そうか迷ってただけで…！」

熊埜御堂 亜聡：「らしくねー。…ま、そういうことだ。これでいいかよ親父。」

熊埜御堂 久永：「おう、話がまとまったようなら何よりだ。んじゃ白戸先生、そういう事で話を進めていきましょう
や」

白戸：「は、はい…よ、よろしくお願いします…」と白戸はあからさまにホッとしたような顔をした。

熊埜御堂 久永：「んじゃあ日程はこの子らが夏休み入ってから、……んで俺もついていきますんで。そこんこよ
ろしくお願いしますよ」

熊埜御堂 亜聡：「……親父も来んのか」

熊埜御堂 久永：「当たり前だろう、今のお前達のパパは俺だぞ！」

熊埜御堂 亜聡：「自分でパパとか言うなきめえ。…」…ちょっとホッ

熊埜御堂 明香：「……ふふっ、そうだね。今はパパがパパだもん」

熊埜御堂 久永：「そうそう！」

熊埜御堂 久永：「んじゃ亜聡、今日はもう泊まってくだろ？ 晩酌に付き合わんか？ まあお前はジュースだが
な！ 白戸先生もうどうです、一杯！」

熊埜御堂 亜聡：「代わりにドロシー置いていくから俺はパス」

ドロシー：『えっ』

白戸：「い、いえいえ私は…先方にこの事を連絡せねばなりませんので。お気持ちだけ…」

熊埜御堂 亜聡：「迷惑がられてんじゃねーか親父」

熊埜御堂 久永：「なーんじゃ、つれんのう。明香とアリスちゃんはいいつも付き合ってくれるっていうのに」

ドロシー：『い、嫌じゃない…！ 私、お父さんと喋りたい！』（あわあわ）

熊埜御堂 久永：「おっ、そうかそうか！ いやぁ嬉しいなあ！」

熊埜御堂 亜聡：「よし。じゃあ任せたドロシー。」（スマホぼん）

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」

アリス：「流石 亜聡。ドロシーをスケープゴートにする事もためらわない」

DL：ではそんな賑やかな様子を背に、白戸は少し焦った様子でそそくさと帰り支度をはじめた。

そしてそのまま居間を後にしようとしたところで、「あ、」と立ち止まる。

白戸：「そ、そうそう。その血縁の方……母方のお祖母さんなのですが」

白戸：「苗字を「巨海(おおみ)」とおっしゃいまして、今現在は……「海古島(みこじま)」という離島に在住して
おられまして。はい」

熊埜御堂 亜聡：「聞いたこともねーな」

白戸 : 「ええ、小さい島だそうですから……なので、行かれるとするならしっかりご準備してからの方が良いかと
…はい。…では、私はこれで。また追って連絡させていただきます、はい」

DL : そう言うと、白戸は今度こそ本当に居間を出ていく。

「またのお越しを」、という母のお見送りの声が聞こえた。…帰ったようだ。

熊埜御堂 亜聡 : 「…、…はー。夏休み前に特大の爆弾持ち込まれた気分」

熊埜御堂 明香 : 「ね、……」

熊埜御堂 明香 : 「……やっぱり、嫌？」

熊埜御堂 亜聡 : 「……別に」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺は何とも思っていない。お前が行くなら行くってだけだ、いつもと同じだろ」

熊埜御堂 明香 : 「……うん」

熊埜御堂 亜聡 : 「はー……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……あとでネットで調べるか」 海古島。

熊埜御堂 久永 : 「お、なんだ。まだ不安なら寿限無も呼ぶか？」

熊埜御堂 久永 : 「いや呼ぶか。あいつもちょうど夏休み入る頃だろうしな、来るだろう」

熊埜御堂 亜聡 : 「親父が来るなら呼んでも来ねーよ」

熊埜御堂 明香 : 「怒られそう…」

熊埜御堂 久永 : 「えー」

アリス : 「まあまあ、行く前からそんな暗い顔しないの 2 人とも！ ばあーと離島観光だと思って行きましょ
よ！」 (にこにこ)

熊埜御堂 明香 : 「アリスちゃん……うん、ありがと！」

熊埜御堂 亜聡 : 「だな。何かうまいものとかねーのかその島。」

熊埜御堂 久永 : 「俺も初めて聞いたとこだからなあ、こればかりは調べんとなんとも」

ドロシー : 『私、島って行くの初めて…。どんなところかな…？』

DL : (つと、では他にやりたいことなければ一旦導入はここで切りますね)(調査パートはまた後々入りますので)

熊埜御堂 亜聡 : (はーい、了解です！) (わくわくしてるドロシーちゃんを人差し指で撫でつつ、その日は終了)

DL : (はーい、ではおまたせしました小波先輩！ メインタブの方へどうぞ！)

小波 絵本 : (はーい！)

DL : ………

DL : それは夏休みに入る数日前のこと。

家で過ごすあなたの携帯に、とある人物から連絡が入ります。

小波 絵本 : 「………」 (すっ) スマホを手に取り確認してみます

DL : その人物とは、かつてのオカ研の先輩……である「熊埜御堂 寿限無」からでした。

小波 絵本 : 「……………もしもし」

DL : 『もしもし、久しぶりですね。元気してましたか？』と、飄々としたかつて聞きなれた声がある。

小波 絵本 : 「……………お久しぶりです。……………元気、とは言い難いかもしれませんが…」

DL : 『そうですか。まあ電話に出てくれるようになっただけ進歩かもしれないですね』

DL : 『そういった君にこういう事を言うのは少し気が引けるんですけど、少し話聞いてもらえませんか？』

小波 絵本 : 「……………そう、かもしれませんね…。……………何でしょうか…？」

DL : 『ええ、実はちょっと行ってほしいところがあるんです』

DL : と、寿限無が切り出した内容はこうだ。

身内が「海古島」という島に小旅行に行くらしく、それに自分の代わりに同行してほしいとの事。

どうやらついていきたい気持ちはあるが、予定が詰まっているのと苦手な人物が同行するから…という話だ。

DL : 『……………難しそうなら無理は言いませんけど、どうです？ 気分転換にもなるかもしれない』

DL : 『それにこの「海古島」ってところにはオカルト的な伝承や因習もあるって話ですよ』

小波 絵本 : 「……………そう、ですね…。夏休みはどうせ予定もないので…。いい加減、オカ研部長らしい事もするべきですね…。……………行きます」

DL : 『……………ん、ありがとうございます。まあ身内が迷惑かけるかもしれませんがそこはよろしくお願いしますね、お礼もするんで』

小波 絵本 : 「はい。……………こちらこそ、お気遣いありがとうございます」

DL : 『じゃあ諸々決まったらまた連絡入れるんで、何か聞きたいこととかなければ』

小波 絵本 : 「はい、ではまた連絡待ってます」

DL : では何事もなく電話は切られますね

小波 絵本 : 「……………あの双子、僕が来ると知って気まずい思いしないだろうか…？」

DL : (あ、事前に連絡入れたりします…？)(それとも当日サプライズする…？)

小波 絵本 : (先輩なら事前に伝えるだろうと考えると思うので、小波からは特に何もしませんね)

DL : はーい、では他に何事もなければ亜聡くんも一緒に「海古島」に関する事前調査ができます。

〈＊調査〉、もしくは代行判定等ありましたらどうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : 洞察での代行は可ですか…？

DL : そうですね洞察も OK です！

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！では洞察で！

小波 絵本 : ではスマホを使って〈検索〉で調べたいです！

DL : 検索も OK ですよ、どうぞ！

小波 絵本 : はーい！

小波 絵本 : 1DM<=6〈検索〉(1DM<=6) > [7] > 0 > 成功数 0 失敗！

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=8〈洞察〉(2DM<=8) > [3, 8] > 2 > 成功数 2 ダブル！

system : [熊埜御堂 亜聡] クリケ : 0 → 1

DL : では小波先輩は「海古島」に関して検索してみますが、あまり有名ではないのか中々情報が出て来ませんね。

対して亜聡くんは白井から聞いていたいくつかの情報も含めて調べてみることで、めばしい情報を見つけることができました。

[情報] DL :

- ・「海古島」とは離島の一つであり、人口は 500 人程度の非常に小さな島。
- かつては鉱石が発掘される鉱山があり非常に栄えていたが、現在鉱山は閉鎖されている。
- ・島民たちは【海之石神(ミノイシカミ)】という土着神を強く信仰しており、その方面の伝承もとても多い土地。

DL : 更にダブルも出ているのでこちらの情報も。

- ・「巨海家」とは、海古島の土地の大多数を所有する富豪。
 - 現在の当主は老舗の宝石メーカー「OMI」を経営している巨海 真名子(おおみ まなこ)。
-

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！ふーんと思いながらぼちぼち調べて頭に留めつつ、さすがに最後の情報には手を止めて一瞬ぼかんとする感じで。

熊埜御堂 明香 : 「？」 どうしたのって顔

熊埜御堂 亜聡 : 「明香。…母さんの実家が実は大金持ちだったらどうする？」

熊埜御堂 明香 : 「……そうなの！？」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうかもしれねー」 調べていたスマホぽいと寄越し

アリス : 「え、何その漫画みたいな展開」

ドロシー : 『……本当みたいなんだよね、その話……』(ひょこつとスマホから顔出しながら)

熊埜御堂 明香 : 「……わひゃあ！？」 びっくり

熊埜御堂 亜聡 : 「ま、少なくとも当日はうまいもん食える可能性が出てきたな」

熊埜御堂 明香 : 「そ、そんなお気楽な事言っているの！？」

熊埜御堂 亜聡 : 「仕方ねーだろ、今そんな事知ったところでお上品な振る舞いなんざできねーよ」

熊埜御堂 明香 : 「うう…なんか怖くなってきちゃった…」

ドロシー : 『………大丈夫だよ、きっと。おばあさんが亜聡と明香の事、愛してくれてるなら、きっと大丈夫。』

熊埜御堂 亜聡 : 「どうだろうな…。…親父、さっきの白戸って人から、向こうで待ってる祖母？の名前聞いてねーのか？」 念のため

熊埜御堂 久永 : 「ん？ 確か真名子さんっていったかなあ」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

熊埜御堂 亜聡 : 「当日はうまいもの食えるな」

アリス : 「ついでに可愛い服とかも買って貰っちゃいましょ！」

熊埜御堂 久永 : 「まあ、お前らはあんときいっぱいいっぱいだったからな！ 向こうも気イ使ってくれたんだろ！」

熊埜御堂 久永：「そうそう、さっき連絡があったんだが当日の集合場所は「名無井市港」だ。ちゃんと荷物準備しとくんだぞ〜」

熊埜御堂 亜聡：「はいはい」

DL：（ちなみに、何を持って行くか各自決まっておりますでしょうか？）（同じ情報が寿限無経由で小波先輩にも送られているものとします）

小波 絵本：（了解です！）（何もってこうかな…）

熊埜御堂 亜聡：そうですね…。大したものはいつきませんが、スマホ、サイフ、着替え、タオル、あとは内緒でポテチ…とかぐらいかな…荷造り楽そう

小波 絵本：とりあえず財布、スマホ、学生証、着替え、タオル、暇つぶし用に文庫本と、オカ研の記録用に筆記用具とノート、デジカメくらいは持って行こうか…

DL：はい、了解致しました！他に何もなければ小旅行当日まで飛ばします

小波 絵本：あ、じゃあ一つよろしいでしょうか？

DL：はい、なんですよ？

小波 絵本：海古島の因習、風習について＜オカルト＞で可能な限り調べる事は出来ますか？

DL：ふむ、そうですね。可能ですよ、どうぞ！

小波 絵本：ありがとうございます！

小波 絵本：2DM≤7〈専門知識（オカルト）〉(2DM≤7)＞[8, 10]＞-1＞成功数-1 ファンブル！

DL：oh

小波 絵本：お前という奴は…

DL：え、ファンブル…ファンブル何をすればいいんだ…

DL：じゃあ…調べてる最中に本を足の小指に落として1ダメージ受けといてください…

小波 絵本：了解です！w

DL：ゴッ！！

小波 絵本：「っ……………」（その場に蹲る） system：[小波 絵本] HP：15 → 14

小波 絵本：「……………幸先が悪すぎる…」

熊埜御堂 亜聡：うーん、ちなみに小波先輩が探していたものと同じ情報を、＜洞察＞でいろいろ調べる中で見つけることは出来ますでしょうか…？（再判定できれば…）

DL：お、そうですね。では＜洞察＞でもどうぞ！

熊埜御堂 亜聡：おお、ありがとうございます！では振ります！

熊埜御堂 亜聡：2DM≤8〈洞察〉(2DM≤8)＞[10, 9]＞-1＞成功数-1 ファンブル！

熊埜御堂 亜聡：ハハ

DL：では本が足の小指にガッ!!!!!!!

熊埜御堂 亜聡：「っ〜〜〜！！」（その場に蹲る）

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！？」

熊埜御堂 亜聡：「…………さ」

熊埜御堂 亜聡：「辛先が悪すぎる……」

熊埜御堂 明香：「だ、だいじょうぶ…？ くすりぬる…？」

熊埜御堂 亜聡：「いい……」

ドロシー：『だ、大丈夫…？』

熊埜御堂 明香：「いたいのとんでける…？」

ドロシー：『…！そうしよう…！』

熊埜御堂 亜聡：「そうなくていい…」

熊埜御堂 明香：「い、いたいのに、むこうにとんでけーっ！」

ドロシー：『いたいのに、向こうに飛んでけ…！』

熊埜御堂 久永：「ぐわーっ！！ 亜聡の痛いのが俺に飛んで来たーっ！！！」

熊埜御堂 亜聡：「親父」

熊埜御堂 久永：「なんだよ、ノってやったのに」

熊埜御堂 亜聡：「そーいうとこだぞ。……ったく」

アリス：「亜聡、相変わらずアリわる〜い」

熊埜御堂 久永：「ね〜」

アリス：「ね〜」

熊埜御堂 亜聡：「うるせえお前にも痛い飛んでけ」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡：（明香ちゃんに怒られつつふてくされる感じで…）（…以上です！）

DL：はーい、では小旅行当日まで！

DL：…………

▼ 1 日目 朝 —— 出発当日

DL : 小旅行当日、あなた達は名無井市の港に集まっていた。
指定された港へ向かうとそこには小型の船と、スーツを着た男性が待っている。

熊埜御堂 亜聡 : 「ふわあ……ねっむ……。……。ん？」

熊埜御堂 明香 : 「……え、……。あつ」

小波 絵本 : 「……。」（すたすた） 荷物を持って待ち合わせ場所に向かいます

熊埜御堂 明香 : 「小波…先輩？」

熊埜御堂 亜聡 : 「マジだな…なんでだ。……はよっす。なんで小波先輩がここに？」

小波 絵本 : 「……。おはよう。…寿限無先輩に連絡を貰って来る事にしたんだが…、聞いてないのか…？」

熊埜御堂 明香 : 「え、お姉ちゃんに？」

熊埜御堂 亜聡 : 「何一つ聞いてねー」

熊埜御堂 亜聡 : 「アニキが？…いや、さすがに誰にも言わずにっのてのはありえねーだろアニキの性格的に」

小波 絵本 : 「……。てっきり伝えていると思っていたんだが…」

熊埜御堂 明香 : 「そういえば、結局お姉ちゃん来るんだっけ…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「来ないと思ってたし現に来てねーな」

小波 絵本 : 「いや、来れないから代わりに僕に行くように連絡してくれたんだが…」

熊埜御堂 明香 : 「……。パパ？」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。親父」

熊埜御堂 久永 : 「ああ、そういえばすっかり言い忘れてたわ。寿限無来れないんだと」

熊埜御堂 久永 : 「代わりに後輩寄越した、とか言ってたがなるほどそれが君か！ よろしくなあ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「それ今言うことじゃねえよ親父」

熊埜御堂 明香 : 「もうちょつと早めに言ってほしかったかな…」

小波 絵本 : 「はい、よろしくお願いします。」（頭を下げる）

熊埜御堂 久永 : 「えーと、名前なんだっけ。こなみくん？ 俺は久永だ、気軽に久永くんって呼んでいいぞ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「おい」

小波 絵本 : 「小波 絵本と言います。よろしくお願いします、久永さん」

熊埜御堂 久永 : 「おう、よろしく！ まあなんだ、気軽に行こうや！」 わっはっは、ばしばし

小波 絵本 : 「うっ、げほっ…、は、はい…」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。…いや、先輩が気にしてねーならいいけどよ。一応言っとくと『さざなみ』だからな親父。」

熊埜御堂 明香 : 「…ご、ごめんなさい先輩。パパが…」

小波 絵本 : 「い、いや…。こちらは誘って頂いた立場だから、大丈夫だ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「律儀かよ」

DL : では、そんな会話をしているあなた達の耳に咳払いの音が聞こえてくる。

…目をやれば、鋭い目つきをしたスーツの男性があなた達を見ていた。

熊埜御堂 亜聡：「…あ？」 やっと気づいた顔

草間：「……本日海古島へと向かわれる熊埜御堂様一行、でよろしいでしょうか」

熊埜御堂 亜聡：「ああ…まあ。」 誰？って顔

白戸：「あ、ああ草間(くさま)さん。よかった、お会いできて……そうです、はい」

熊埜御堂 久永：「ああ、アンタが白戸先生が言っていた迎えの人か。すまん、騒がしくしてしまって」

草間：「いえ、まだ出発まで時間に余裕はありますので」

草間：「改めまして皆様、はじめまして。本日皆様の案内人を勤めさせていただきます、草間と申します。
……平時は「OMI」の社長秘書をしております」

DL：そう言って男…草間はあなた達に向かって深々と頭を下げた。

熊埜御堂 亜聡：「OMI……ああ…。昨日調べた、今日会う婆さんとこの会社ってやつか」

草間：「はい、本日は社長よりあなた方を島までご案内するよう仰せつかっております。何かありましたら遠慮なく申し出くださいませ」

熊埜御堂 亜聡：「そうすか…。…どうも」

熊埜御堂 明香：「よ、よろしく願います！ 草間さん！」

小波 絵本：「……よろしく願います」（ぺこり）

DL：では草間は全く表情を変えないまま、再びぺこりと頭を下げる。

草間：「では船の方へご案内…させていただく前に、いくつか注意事項をさせていただきます」

草間：「一つ、海古島島内は少々電波が届き辛い土地でございます。それ故、携帯電話等の電子機器が使えない場合がございます」

草間：「二つ、船は定期便が一週間に一回ほどございます。緊急を要する、ということでしたら船を呼ぶことも可能です」

草間：「三つ、島内には立ち入り禁止の区域が御座います。こちらは到着した後に詳しい説明をさせていただきますが、不用意に立ち入らないようお気を付けください」

草間：「以上となります。ご質問等御座いますでしょうか？」

熊埜御堂 亜聡：「いや…特には。」

熊埜御堂 亜聡：「いや、一つ聞くの忘れてたな。そもそも俺ら、向こうで何泊する予定なんだ？」

熊埜御堂 明香：「一週間、だよお兄ちゃん」(ひそひそ)

熊埜御堂 亜聡：「そうだったのか」(説明されてたのに聞いてなかった顔)

小波 絵本：「そうですね…。僕は海古島の伝承や因習に興味があって来る事にしたのですが…、そういったものを調べるのに適した場所がありますか？」

草間：「はい、島内には海古島の郷土資料館が御座います。そちらであれば資料が揃っているかと」

小波 絵本：「わかりました、ありがとうございます」

熊埜御堂 明香：「……あの、おばあちゃんってどんな人ですか？」

草間：「…それは直接お会いした方が良いかと。ですが、お二人のことを今か今かと楽しみに待っておいでです」

熊埜御堂 明香：「そ、そうですか…」

熊埜御堂 亜聡：「…」

熊埜御堂 亜聡：…〈心理〉で、本当のことを言っていそうかどうか見極められます…？

DL：いいですよ、どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！では！

熊埜御堂 亜聡：2DM≤8〈心理〉(2DM≤8) > [10, 4] > 0 > 成功数 0 失敗！

熊埜御堂 亜聡：今日やべえや

DL：あまりにも顔が能面すぎて感情が読み取れませんでした…

小波 絵本：あ、では小波も便乗していいですか？

DL：どうぞ！

小波 絵本：1DM≤6〈心理〉(1DM≤6) > [6] > 1 > 成功数 1 成功！

DL：おおお…

小波 絵本：よしよし

DL：では、小波先輩は草間が少し言い淀んだように感じました。…が、亜聡くんと同じく能面のような表情のせいで深く読み取ることはできませんでしたね。

小波 絵本：「……………」

熊埜御堂 亜聡：「…（…表情筋仕事してねーなこの人）」

熊埜御堂 明香：「？ お兄ちゃん？」

熊埜御堂 亜聡：「なんでもねー」 本当に何でもない

熊埜御堂 明香：「そっか」

DL：ではこれ以上質問がないようなら、草間が船の方へと皆さんを促しますね。乗り込みますか？

熊埜御堂 亜聡：亜聡は大丈夫です！

小波 絵本：こちらも大丈夫です。草間さんの事を気にしつつ乗り込みます

DL：では皆さんは船に乗り込み、少しすると何事もなく船は動き出し出港するだろう。

少しの不安、期待、様々な思惑を乗せて船は海古島へと向かう。

DL：（あ、船内とかでやりたい RP とか共有したいものがありましたら今のうちに…）

熊埜御堂 亜聡：（あ、ではせっかくなので小波先輩に絡みに行っていいでしょうか…？）

DL：（はーい、どうぞ！）

熊埜御堂 亜聡：（ありがとうございます！）（では船内で、たぶん少し離れたところにいる小波先輩の方へ）

小波 絵本：（一人でぼーっと海でも眺めてるかな…）

熊埜御堂 亜聡：「先輩。……アニキが誘ったとはいえ、こんな拗らせた身内事に巻き込んで申し訳なかったっすね」

小波 絵本：「いや…、先輩も僕の事を心配して誘ってくれた訳だから気にしてない」

熊埜御堂 亜聡：「心配？……ああ。」

熊埜御堂 亜聡：「どうせ、「気分転換にもなるし」って感じで誘ったんでしょ」

小波 絵本：「……正解だ。兄弟の考える事がわかっているのは流石だな」

熊埜御堂 亜聡：「世話焼きだからな。うちのアニキは」

熊埜御堂 亜聡：「まあ、だからといってうちの…いや。うちのっていうか、俺らの問題がついでに付いてくる旅行ってのも気まずいでしょうに。…先輩、どこまで聞かされてんです？」

小波 絵本：「……お前たちの肉親が見つかって、会いに行くというのは聞いた。過去の事については詳しくは聞いてない」

熊埜御堂 亜聡：「ああ、じゃあ、一番肝のところは伝わってんのか。じゃあいいか」

熊埜御堂 亜聡：「まさか実の両親が実の祖父母方に、俺らの存在すら伝えてなかったらしいってのは呆れてるっすけどね。そんなこんなで、あちらに住んでるらしい祖母のこと、明香はさっき気にしてたってわけで」

小波 絵本：「………亜聡」

熊埜御堂 亜聡：「ん？」

小波 絵本：「……さっきの草間さんの様子、お前はどう思った？」

熊埜御堂 亜聡：「様子？…あー、顔面鉄仮面みたいで何も伝わらなかったな」

小波 絵本：「………気のせいかもしれないが、明香が祖母の事について尋ねた時…僕にはあの人少し言いついてるのを感じた」

熊埜御堂 亜聡：「、…言いついてる？」

小波 絵本：「……何か、都合の悪い事を隠しているのかもしれない。杞憂だと良いんだが…」

熊埜御堂 亜聡：「…。…そうか…」 今度はこちらが海に視線を移す

熊埜御堂 亜聡：「……。さっきもちらつとは言ったが、今回俺らの肉親が見つかったって話。…その話が出るまで、俺らもあちらも、本当にお互いがお互いの存在を知らなかった。」

熊埜御堂 亜聡：「普通、自分の娘が子供産んだなんて話、親が知らないわけねーだろ。…だからさ、たぶん、何かめんどくせー事情があったんだろうなと思ってた。島に着いたら本人に聞こうとは思ってたけど。」

熊埜御堂 亜聡：「……。そういうことも含めてだ。先輩が今回気づいたことも、明香には少し黙っといてくれねーか。」

熊埜御堂 亜聡：「余計な心配させたくねー」

小波 絵本：「……そのつもりでお前だけに話したんだ。察しろ」

熊埜御堂 亜聡：「そりゃあよかった。空気読めるんだな先輩って」

小波 絵本：「どの口で言っているんだ。お前にだけは言われたくない」

熊埜御堂 亜聡：「俺はその役割を明香に任せてるだけだから」

小波 絵本：「怠慢にも程がある」

熊埜御堂 亜聡：「……。……はは。」

小波 絵本：「………何が可笑しい」

熊埜御堂 亜聡：「いや、おかしかったわけじゃなくて。…先輩、今でも俺と話すの嫌がるかと思ってたけど、そんなことなさそうだな。1週間の長旅でも平気そうだ」

小波 絵本 : 「別に……。あの時は目的が違っていただけの敵対する事になったというだけの話だ。……今の僕には、そうする理由がないだけだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ま、よろしくな、先輩。気分転換に明香や俺がついてきても文句言うなよ」

小波 絵本 : 「……文句言われるような事をするんじゃない」

熊埜御堂 亜聡 : 「、……はは。そりゃそうだ」 脱力めで薄く笑う

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあ俺に文句があったら明香に言っておいてくれ」

熊埜御堂 明香 : 「……お兄ちゃん、小波先輩！ 喉渇いてない？ お茶あるよ！」

小波 絵本 : 「それは直接お前に言うから安心しろ」

熊埜御堂 明香 : 「？ ……なにを？」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香になって言っただけだ。…あ？ ああ、明香か」

熊埜御堂 亜聡 : 「お茶いる。くれ。」

熊埜御堂 明香 : 「はい！ ……小波先輩もどうぞ？」

小波 絵本 : 「別に。亜聡に文句があるなら仲介なしで言うと言っただけだ。…ああ、ありがとう」

熊埜御堂 明香 : 「…ええと、よくわかんないけど…お兄ちゃんが失礼な事言ったら教えてくださいね？」

小波 絵本 : 「大丈夫だ。直接 本人に言う」

熊埜御堂 亜聡 : 「意思が固えな。…ま、いいか」

熊埜御堂 明香 : 「だめです、教えてください！」

熊埜御堂 亜聡 : 「そこでお前が粘るのかよ」

熊埜御堂 明香 : 「だってえ」

小波 絵本 : 「……分かった。目に余るようなら明香にも伝えよう」

熊埜御堂 亜聡 : 「（折れた）」

熊埜御堂 明香 : 「はい、ありがとうございます！ おせんべいもどうぞ！」

小波 絵本 : 「ああ、ありがとう」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香、俺にも」

熊埜御堂 明香 : 「えへへ、はいお兄ちゃんにも」

熊埜御堂 亜聡 : 「おー」 ぱりっ

DL : では、そんな風にわいわいしつつ船は進む…

▼ 1 日目 昼 ——海古島

DL : あなた達は船に揺られ、道中込み入った話もしつつ、のんびりと船旅を満喫し——数時間。

DL : 船はついに海古島へと到着しました。

あなた達は草間の案内に従い、各々船を下りてでしょう。

DL : 船を下りて、まずあなた達を感じたのは爽やかな潮風。その次に耳に届く明るい声。

声のする方向へ目を向ければ、遠くから幼い少女が駆け寄ってくるのが見えます。

あかり : 「こーんにちはー！ 巨海家にいらっしゃるお客様ですよー！ いらっしゃいませー！」

熊埜御堂 亜聡 : 「やっと着いた…、…あ？」 声の方へ振り向く感じで！

小波 絵本 : 「……誰だ…？」

熊埜御堂 明香 : 「かわいい！」

DL : 少女はぱたぱたと慌ただしく駆け寄ってきて、あなた達の前で静止する。

…更にもう一人、少女の背後から似たような顔をした少年も駆け寄ってくるのが見えた。

爽太 : 「お、お姉ちゃんっ！ はやすぎるよ、お客様逃げないって！」

熊埜御堂 亜聡 : 「もう一人来たぞ。…出迎え役、ってどこか？」

あかり : 「でも早くお出迎えしなきゃじゃん！ あっ、いらっしゃいませお客様！ お荷物お預かりしますよ！ 小さいのだったらけど！」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ、いや…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…何歳くらいに見えます？」

DL : そうですね、とても幼く見えます。大体小学一年、二年？

熊埜御堂 亜聡 : 「…あー。おう、ありがとな。荷物は自分で持てる」

小波 絵本 : 「……君達は…、宿の関係者か？」

DL : っと、では小波先輩が少年少女にそう尋ねると、背後から草間がぬっと姿を現しますね。

草間 : 「その子供達は巨海家の使用人見習いで御座います」

小波 絵本 : 「こんなに小さい子ども達が…？」

草間 : 「とある事情により当主様がお預かりになっていらっしゃるのですが、自分達から働きたいとの申し出がありましたので簡単な仕事を任されているのです」

草間 : 「主に簡単な給仕、こういったお客様の出迎えや屋敷への案内人などですね」

小波 絵本 : 「そうなんですか…。……………（少し考えて）……………なら、これを頼む」 直前まで読んでいたであろう文庫本を預けます

あかり：「(ぱあっ)はい！ じゃあわたし、あかりがお荷物をお預かりしました！ …ほら、爽太もなんか預けてもらいなさいよ！」

爽太：「えっ、ええっ！？ …えっと、あの、あ、あればだいじょうぶですから…！」

熊埜御堂 亜聡：「(ねーんだよな…) あー………。……、じゃあ…これ。」 バックの中から内緒のご当地ポテチを取り出して、はいどうぞ。

熊埜御堂 亜聡：「これ以外の荷物は、俺以外が持つと爆発するから」

爽太：「わ、……ひえっ！？」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡：「冗談だろ」

小波 絵本：「……子ども相手にタチの悪い冗談を言うんじゃない」

熊埜御堂 明香：「ほら、小波先輩もこう言ってる！」

熊埜御堂 亜聡：「はいはい、すみませんでしたア」

熊埜御堂 明香：「もー！」 ペチペチ

爽太：「き、気にしてないです！ …お、お荷物、お預かりますね。えへへ」

熊埜御堂 亜聡：「おう、よろしく」

あかり：「じゃあ、お荷物も預かったことだしお屋敷までご案内しますね！ はぐれないようについてきてください！」

DL：そう言うやいなや、少女……あかりはだっと駆け出し、あっという間にその姿が見えなくなる。

小波 絵本：「ああ、分かつ……、……！？」

熊埜御堂 亜聡：「速」

爽太：「お、お姉ちゃん！ お客様、置いていつちゃってるよー！」

熊埜御堂 亜聡：「はぐれるなって方が無理だろ」

草間：「……ご案内は私がしますので、お気になさらず」

熊埜御堂 亜聡：「…。そそっかしいな。お前の…姉貴？」 男の子へ。

爽太：「は、はい…お姉ちゃん、です」

爽太：「双子だから、どっちが上っていうものないかもだけど…なんとなくお姉ちゃんの方がお姉ちゃんっぽいから…」

熊埜御堂 亜聡：「双子」

熊埜御堂 明香：「わあ！」

小波 絵本：「………君もなかなか苦労しているようだな…」(誰かさんを思い浮かべながら)

熊埜御堂 亜聡：「先輩は今誰のこと考えてんすか。……でもなんか、俺等以外の双子初めて見たな」

爽太：「あ、あはは…」

熊埜御堂 明香：「ね、なかなかいないもん」

爽太：「…えっ、お客様も双子なんですか？」

熊埜御堂 亜聡：「おー。」

爽太：「わあ……僕も、自分達以外の双子なんて初めて見ました」

爽太：「って、そもそもこの島に僕達くらいの子供、いないんですけど…」

熊埜御堂 亜聡：「そうなのか。そりゃつまんねーな」

爽太 : 「でも、お姉ちゃんがいるので…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ…そりやそうか」 わかる。(心から)

小波 絵本 : 「…………やぶさかではないのなら何よりだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ま。双子同士よろしくな」

熊埜御堂 明香 : 「うん、仲良くしてね！」

爽太 : 「——はい、こちらこそ！」

DL : ではそんな風に爽太と親睦を深めていると、少し離れた場所から草間が呼ぶ声がする。
どうやらこのまま屋敷へと向かうようだ。

熊埜御堂 亜聡 : 爽太さんと自己紹介なんかしながら、素直についていきますね！

小波 絵本 : こちらも周りをきろきろ見わしつつ付いて行きます

DL : 屋敷までは一本道、かつそんなに遠くないらしくこのまま徒歩で向かうとの事。あなた達はのどかな風景を眺めながら、のんびりと屋敷へと向かうだろう。

DL : 周囲を見渡せば豊かな自然と——遠くの方にある、大きな山が目に入る。

熊埜御堂 久永 : 「随分と大きな山だな。草間さん、あれは？」

草間 : 「あちらは「海古鉾山」で御座います。かつては鉾石が出土していましたが、現在は閉鎖されています」

草間 : 「基本的に島内の出歩きは自由となっておりますが、あちらの山には危険ですのであまり近寄らないようお願い致します」

熊埜御堂 久永 : 「ふむふむ、…だそだそ。わかったなみんな！」

熊埜御堂 亜聡 : 「引率の教師かよ。そもそも山一つなにが危険なんだよ」

小波 絵本 : 「……採掘をしていたのなら、崩落の危険があるとか…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「なら俺はクマが出る方にポテチ賭ける」

小波 絵本 : 「勝手に賭けを始めるな」

草間 : 「はい。度重なる採掘で地盤が緩んだことで、地滑り等の危険性が御座います」

草間 : 「また長らく閉鎖されている山なので、野生生物の危険ももちろん御座います」

爽太 : 「だから地元の人でもあそこには行っちゃダメ、ってみんな言うんです」

熊埜御堂 明香 : 「はわわ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「どっちも正解の場合どうすりゃいいんだ？」

小波 絵本 : 「何もしなくて良いだろう。……わかりました、近づかないようにします」

熊埜御堂 久永 : 「なら俺が正解で賞として二人ともに飴ちゃんをやろう！」

熊埜御堂 亜聡 : 「おー。……って、どこから出したんだその飴」 もらいます

小波 絵本 : 「……ありがとうございます。」 素直に受け取り

熊埜御堂 久永 : 「ふっふっふ、俺の着物の袖は四次元ポケットになってるからな」

熊埜御堂 明香 : 「何でも全部そこに突っ込んでるっただけでしょ！ もう、パパったら」

熊埜御堂 亜聡 : 「また母さんに叱られんぞ」

白戸 : 「は、はは…皆さんお元気ですね…私なんか、もう、暑くてクタクタですよ…はは」

小波 絵本 : 「…………大丈夫ですか？」

白戸 : 「え、ええ何とか……すみません、大丈夫ですので…」

草間 : 「ご安心を、もうすぐ屋敷が見えて参りますので。もう一息です」

熊埜御堂 亜聡 : 「お、もうそろそろか」 山から視線を前に戻しつつ

DL : ではあなた達がそう言った草間に倣い目の前へと視線を移すと、そこには木々に囲まれた巨大な建物が存在していました。それも一棟だけでなく、同じくらいの大きさの建物が三棟並んでいるのが見えます。

DL : 洋風の造りのものが二つ、和風の造りのものが一つ。

そしてそのうちの一棟の玄関前に、先ほど走っていったあたりがあなた達に向かって手を振っているのが見えます。

あかり : 「本邸はこちらでーす！ お客様、どうぞこちらにー！」

熊埜御堂 亜聡 : 「でっか…」

小波 絵本 : 「………」 建物の大きさに感心しつつあかりちゃんに付いて行きます

草間 : 「現在彼女が立っている場所が本邸、残り二つはお客様用の宿泊邸となっております。荷物等は玄関にお置きください。あとで宿泊邸の方に運ばさせていただきますので」

熊埜御堂 明香 : 「はわあ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「宿泊邸すらでけえな。さすが、島の土地の大多数を所有する富豪」

熊埜御堂 明香 : 「…ね、すごいね。びっくりする、というか…気圧されちゃう」

熊埜御堂 亜聡 : 「今までの人生の中で見たことねー規模なのは確かだな。……飯が楽しみ」

熊埜御堂 明香 : 「……もー、お兄ちゃんは」 つんつん

熊埜御堂 亜聡 : 「それくらい期待してもいいだろ」 つんつんされつつ

小波 絵本 : 「………食事の事よりもっと大事な事があるんじゃないのか？」

熊埜御堂 亜聡 : あ、あかりちゃんの前についたら、素直に荷物は置いていきますね！

小波 絵本 : 同じくあかりちゃんの前に荷物を置きます

あかり : ではあかりはそれをここに眺めてますね！ お任せください！

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩の正論パンチやめろ。…おー、よろしく」

小波 絵本 : 「……よろしく頼む」

あかり : 「はーい！ ほら爽太も、手伝って！」

爽太 : 「ぼ、僕達だけじゃ運べないよお姉ちゃん…他の使用人さん呼んでこないと」

DL : では、双子のそんな会話を聞きつつ、あなた達は草間の先導で屋敷へと入り、まずは客間へと通されるだろう。

DL : 内装も外観に負けないくらいに豪華で、至る所に高級そうな調度品が置かれている。価値が分からなさすぎてうっかり触れないほどだ。

草間 : 「申し訳ありませんが、こちらの部屋で少々お待ちくださいませ。当主様に皆様のご到着を伝えて参ります」

DL : 草間はそう言って頭を下げると客間から出ていく。

……のと入れ違いで、今度は双子が飲み物を運んできた。

あかり：「荷物は私達じゃ運べないから、ってことでお茶持ってきました！ はい、どうぞ！」

熊埜御堂 明香：「わ、わわっ。…ありがとう、いただきます！」

爽太：「だ、だめだよお姉ちゃん。そんな強引に渡しちゃ…はい、どうぞ。冷たい麦茶です」

熊埜御堂 亜聡：「おー」 受け取ります

小波 絵本：「ああ、ありがとう」

DL：あかりが半ば強引に明香にお茶を押し付け、それを爽太が窘めつつあなた達によく冷えた麦茶を配ってくれる。

熊埜御堂 明香：「……ふー、美味しい」

あかり：「よかったあ！」

熊埜御堂 亜聡：「海辺とはいえ外暑かったからな」

小波 絵本：「ああ、ちょうど良い温度だ」

あかり：「私が用意したんだよ、私が！」

爽太：「お姉ちゃんっ！」

熊埜御堂 久永：「おお、偉いなあ！ まだこんなに小さいのにこんな美味しい茶をいれられるとは！ 将来有望だな！」

熊埜御堂 亜聡：「親父も適當言ってるじゃねーよ」

熊埜御堂 久永：「褒めてるのになあ」

あかり：「ねー」

熊埜御堂 亜聡：「調子のいい姉貴だな」（自分は棚上げ）

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんもこれくらい調子いいときある」

熊埜御堂 亜聡：「そんなことねーだろ」

小波 絵本：「……………確かにそうだな」＜明香ちゃん

熊埜御堂 亜聡：「先輩」

熊埜御堂 明香：「ですよ？」

熊埜御堂 亜聡：「明香」

熊埜御堂 久永：「お、珍しく亜聡がやられてるな！」

熊埜御堂 亜聡：「…親父もなんか言ってくれ」

熊埜御堂 久永：「ん？ んー……」

熊埜御堂 久永：「そーいや亜聡がまだこーんなちっさい頃、俺にお茶を運ぼうとして焦りのあまり湯呑を落として割ったことが…」

熊埜御堂 亜聡：「親父！！」

熊埜御堂 亜聡：「なんかってそういうことじゃねーよ！」

熊埜御堂 久永：「なんか言ったは言ってやっただろーが」

熊埜御堂 亜聡：「くそ、この親父を頼った俺が馬鹿だった…」

熊埜御堂 明香：「もう、ごめんってお兄ちゃん。からかいすぎちゃった」

熊埜御堂 亜聡：「…ったく」

DL : では、そんな風に和気あいあいと話していると席を外していた草間が戻ってきます。

草間 : 「申し訳ありません、ただいま戻りました。……亜聡様、明香様。少々よろしいでしょうか」

熊埜御堂 亜聡 : 「(つーん)(拗ね拗ね)……ん？」

熊埜御堂 明香 : 「？ はい、なんでしょう」

草間 : 「ご当主様に皆様の到着をお伝えしたところ、…すぐにでもお二人にお会いしたいと言われまして」

草間 : 「申し訳ないのですが、お二人だけ当主様にご面会いただけませんかでしょうか」

熊埜御堂 亜聡 : 「…マジか。すげー急だな。…」 明香ちゃんちらり

熊埜御堂 明香 : 「……え、えっと」

熊埜御堂 久永 : 「ん、そいつは俺らは付いてっっちゃ駄目なのか？」

小波 絵本 : 「……さすがに僕は完全な部外者なので付いて行く訳にはいきませんから…」

草間 : 「申し訳ありませんが、こちらでお待ちいただく事になります」

熊埜御堂 久永 : 「んー……そうかあ、しかしなあ」

熊埜御堂 明香 : 「わ、私はいいよ！ 大丈夫！」

熊埜御堂 亜聡 : 「……まあ、俺も別に。明香と2人で行くんだろ」

熊埜御堂 明香 : 「うん、お兄ちゃんと一緒だし。平気！」

熊埜御堂 久永 : 「……そうか。ならわかった、行ってこい」

熊埜御堂 亜聡 : 「おう。先輩、親父のこと頼んだ」

熊埜御堂 久永 : 「逆じゃね？」

小波 絵本 : 「……わざわざ僕が何かする必要もないと思うが…。わかったと言っておこう」

熊埜御堂 久永 : 「だから逆じゃね？」

DL : では亜聡さんと明香は草間に連れられて当主様の元へ…

DL : ………

DL : ……

DL : …

DL : あなた達は草間に連れられて大きな扉のある部屋の前まで連れてこられました。

草間はコン、コン、コンと扉を叩きます。

草間 : 「当主様、亜聡様と明香様がお見えになりました」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」さすがにちよつと緊張

熊埜御堂 明香 : 「………」(どきどき)

DL : 一拍遅れて「どうぞ」という物静かな声が聞こえます。

草間 : 「失礼致します」

DL : そう言うと草間はゆっくりと大きな扉を開き、あなた達を中に入るように促すでしょう。

熊埜御堂 明香：「お、お邪魔します…！」

熊埜御堂 亜聡：「…お邪魔します」 明香ちゃんと一緒に中へ

DL：ではあなた達は部屋へと足を踏み入れる。

…部屋に入ってまず目に飛び込んだのは穏やかな雰囲気のお婦人と、その背後に飾られた大きな額縁に入れられた写真。

水野 亜希：その写真に写っていたのは、あなた達の母親だ。

熊埜御堂 亜聡：「、…！」 それは…視線がそっちに行っちゃいますね…

熊埜御堂 明香：「、あ」

熊埜御堂 亜聡：「……。母さん」



DL：あなた達が写真に目を奪われていると、「どうぞ、こちらまでいらしてください」と促す声が聞こえる。

巨海 真名子：声の主であるお婦人はあなた達の姿を認めると穏やかに微笑んだ。

熊埜御堂 亜聡：「っ、……。…」 視線を戻して、明香ちゃんの背中をつきつつそちらへ歩いていきますね

熊埜御堂 明香：「っ、あ、は、はい…！」

熊埜御堂 明香：では明香もつつかれつつ、亜聡くんの後に続きます。

DL：ではどこかきこえないながらもお婦人に促され、あなた達は革張りの高級ソファに腰かけ、改めて目の前のお婦人へと目を向ける。

巨海 真名子：「……はじめまして、というもおかしな話だけれど……私は巨海 真名子と申します」

巨海 真名子：「そうね、そう……なんといったらいいのかしら。……あなた達のお母さんの、お母さん。…つまりは、お祖母ちゃんね。あなたたちの」

熊埜御堂 亜聡：「……。亜聡です。どうも。」 まだ落ち着かないながらも、小さく頭を下げる

熊埜御堂 明香：「め、明香…です。…はじめまして」

DL：では、そんなあなた達の様子を見て真名子はくすりと上品に微笑む。

巨海 真名子：「いやだわ、そんな緊張なさらなくても」

巨海 真名子：「いいのよ、ちゃんとわかったから。あなた達は、あの子の子供……私の、孫なのね」

熊埜御堂 亜聡：「………」 真名子さんをじっ

熊埜御堂 亜聡：「……俺等は…母さんから、旧姓の家のこと、何も聞いてねーから。まだぴんと来ないっすけど」

巨海 真名子：「そうなの、……そうでしょうね。あの子は、ほぼ駆け落ち同然で家を出てしまったから…」

巨海 真名子：「情けない話だけど、私もあなた達の存在を…この 16 年間、全然知らなかった」

熊埜御堂 亜聡：「駆け落ち？」

巨海 真名子：「ええ。ある日突然、何も残さずにとある人…あなた達のお父さんと一緒に家を、島を飛び出して行ってしまった」

巨海 真名子：「行ってしまった理由もわからないまま、私は娘を探したけれど遂に見つからないまま…」

熊埜御堂 明香：「そんな……そんな話、初めて聞きました」

熊埜御堂 亜聡：「どっちにも馴れ初めなんか聞いたこともなかったからな」

巨海 真名子：「……そうね、あまり表だって話すこともないし……話そうにも、あの子はもう…」

熊埜御堂 亜聡：「……」

巨海 真名子：「……だから、あなた達の存在を知った時……私はね、本当に嬉しかったの」

巨海 真名子：「あの子が遺してくれたものが、まだこの世にあるのだと」

巨海 真名子：「だから、どうしても会いたくなって……白戸さんに無理を言って、今回の場を設けてもらったの。
…ごめんなさいね、あなた達にもあなた達の生活があるのに」

熊埜御堂 明香：「そ、そんな！」

熊埜御堂 明香：「その、確かにびっくりはしたけど……会いたって言うてくれたのは、その、純粋に嬉しかったし
…」

熊埜御堂 亜聡：「……母さんが死んだのは、8年も前なのに。それぐらい母さんのこと、島から離れた後も大事に思ってたんだな。」

熊埜御堂 亜聡：「あんなでかい写真まで飾ってるし、俺達にも会いたがるなんて」

巨海 真名子：「……ええ、あの子は私にとって宝物だったから」

巨海 真名子：「とてもとても、大事だったの。……大事にしすぎて、最後は飛び出してしまったけど」

DL：真名子はそう言うと立ち上がり、背後にあった写真をじっと見つめる。

DL：そうしてまたあなた達に向き直り、今度はあなた達の顔をじっと見つめた。

巨海 真名子：「……やっぱり、目がとてもよく似ているわ。あの子の水色と、あなた達の水色。まるで宝石のよう。……ああ、あなた達は、あの子の子供なのね。…私の孫なのね」

DL：そう絞り出すように言うと、両手で顔を覆い肩を震わせ、小さく嗚咽を漏らす。

巨海 真名子：「……うつ、うつ」

熊埜御堂 亜聡：「……………」

熊埜御堂 亜聡：一応、ここまでの真名子さんの表情や様子に<心理>振れませんか…？

DL：もちろん振れますよ、どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！では

熊埜御堂 亜聡：2DM<=8〈心理〉(2DM<=8) > [2, 6] > 2 > 成功数2 ダブル！

system：[熊埜御堂 亜聡] クリチケ：1 → 2

巨海 真名子：「ごめんなさい、重ねてしまって……あの子がまた、ここにもどって来てくれたような気分に、勝手に
…」

DL : と、声を震わせるその様は心の底から「あなた達がこの場にいる」という事実に感極まっているように思えます。

熊埜御堂 亜聡 : おばあちゃーん！！！！

熊埜御堂 亜聡 : 「……………母さんがこの島を出ていった理由は、わからないのか」

熊埜御堂 亜聡 : 「こんな恵まれた環境があるのに、…なんであんなのと結婚したんだろうな」 最後は小声

巨海 真名子 : 「ええ…、手紙も何も残さずに出ていってしまったから…」

巨海 真名子 : 「でも、いいのよ。あの子はきっと、あの子が思うままに生きたの。…そう信じたいわ」

熊埜御堂 明香 : 「……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「…俺等の父親とは、面識は？」（実の父親の方）

巨海 真名子 : 「……一度だけ」

巨海 真名子 : 「だから、その人が娘とそんな深い仲だなんて知らなかった…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ふうん…。じゃあこの島で出会ったのかな、父さんと母さんは」

巨海 真名子 : 「ごめんなさい、そこら辺はよく分からなくて……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「別にいいす。聞いといて何だけど、あんま興味ないし」

熊埜御堂 明香 : 「お、お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「だって、別に俺等から語れる話もないだろ。どんな感じだったとか…」

熊埜御堂 明香 : 「それは、……そう、だけど」

熊埜御堂 亜聡 : 「少なくとも、俺の中での父さんは、何考えてるか分かんねーのも含めてよく分かんねー人だったから。…母さんの方がまだ語れる」

熊埜御堂 明香 : 「……………お兄ちゃん…」

巨海 真名子 : 「いいのよ、無理しなくて。…語るのに、辛いこともあるでしょう」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」

巨海 真名子 : 「それよりも、今のあなた達の話が聞きたいわ。学校はどう？ 部活は何をしているの？ 勉強は順調かしら？ …なんて」

巨海 真名子 : 「ふふ、とても今更だけど…普通のお祖母ちゃんと孫みたいな会話を楽しんでもいいかしら」

熊埜御堂 亜聡 : 「…っ、……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「……だってよ。明香。」 肘つん

熊埜御堂 明香 : 「わ、…も、もう。お兄ちゃんもちゃんとお話しようよ」

熊埜御堂 明香 : 「だって、……おばあちゃん、が、聞きたいって言ってくれてるんだから」

熊埜御堂 亜聡 : 「……しょーがねーな」

熊埜御堂 亜聡 : 「母さん方のばあさんなら…別にいいか」

DL : では、あなた達はようやく出会えた「祖母」としばしの間和やかな会話を楽しむことだろう。

DL : ……………

DL : 一方その頃、客間では。

DL : 亜聡と明香が草間に連れられて部屋を出た数分後、草間だけが客間に戻ってきた。

その手には折りたたまれた紙が何枚か握られている。

小波 絵本 : 「……………？それは…？」

草間 : 「失礼致します。こちら、この島の地図となります」

草間 : 「主な施設や立ち入り可、もしくは禁止の場所を記載しておりますので島内を出歩く際の参考になればと思いお持ちしました」

熊埜御堂 久永 : 「おお、そいつはありがたい。知らん間に立ちいっちゃいけん場所に入るのを防げるということだな」

小波 絵本 : 「ありがとうございます。」では受け取って内容を確認してみます

DL : はーい。では情報タブに

[情報] DL : 【海古島・地図】

- ・巨海家屋敷
 - ・港
 - ・郷土資料館
 - ・みやげ屋「なみだめ」
 - ・海岸
 - ・鉾山跡(※立ち入り禁止)
-

DL : 草間の言う通り、地図には目立った施設や立ち入り禁止の場所が丁寧に記載されている。少なくともこれに倣えば道に迷うことはないだろう。

草間 : 「疑問点などありましたらすぐお申し付けください。答えられる範囲でしたら」

小波 絵本 : 「そうですね…。ではみやげ屋や郷土資料館などの営業時間はわかりますか？」

草間 : 「郷土資料館は朝 10 時から夕方 18 時まで、みやげ屋…というよりは島唯一の雑貨店ですね。そちらは朝 7 時から深夜 0 時までの営業となっております」

小波 絵本 : 「雑貨屋の方は結構長い時間営業してるんですね」

草間 : 「ええ、島に一つしかない店ですので。……ああ夜 20 時以降、巨海家敷地内から出て出歩く際は使用人にひと声かけていただけると助かります」

小波 絵本 : 「わかりました。……聞きたい事はそのくらいですね。ありがとうございます」

草間 : 「いえ。……それと再三の注意となりますが」

草間 : 「鉾山跡には決して立ち入らぬようお願い致します。皆様の身の安全の為、ご協力ください」

小波 絵本 : 「はい、わかってます」

草間 : 「何せこの島は電波も不安定なので、いざという時の安全確認が困難ですので」

草間 : 「お分かりいただけたのでしたら結構で御座います。…何度も念を押すようで申し訳ありません」

熊埜御堂 久永 : 「まあまあ、俺達は良い大人。子供達…といってももう高校生、そんな浮かれ気分で禁忌を破るような人はここにはおらんぞ草間さん」

熊埜御堂 久永 : 「なあ小波くん！」

小波 絵本 : 「……そうですね。少なくとも亜聡は何もなければ、そんな歩くのすら面倒くさそうな場所にはいかないと思います」

熊埜御堂 久永：「はっはっはっはっは！ そりゃそうだ！！！」

草間：「……………。ああ、そうそう。それとも一つ」

草間：「本日は18時より心ばかりでは御座いますが晚餐会を開く予定となっております。なのでこの後外出されたとしても、是非17時半までには戻ってきていただければ」

草間：「今の時刻が……13時半、ですか。ということでよろしくお願い致します」

小波 絵本：「わかりました。部外者の僕にまでお気遣い頂きありがとうございます」（ぺこり）

草間：「いえ、皆様等しくお客様で御座います」

DL：他に聞きたいことがなければ草間はこの後は仕事がある、と客間を後にする事でしょう。

小波 絵本：特に聞きたい事はないので、草間さんを見送りますね

DL：では、失礼しますと言って草間は客間を後にします。

DL：この後は双子が戻ってくるまでスキップでも、何か行動したいことがあれば宣言どうぞ！

小波 絵本：調度品は迂闊に触るの怖いしな…。じゃあ何か、廊下の向こう側とかから誰かの喋り声とか聞こえないか耳を澄ましてみます

DL：はい、〈*知覚〉〈聞き耳〉をどうぞ！

小波 絵本：では〈聞き耳〉で！

小波 絵本：2DM<=7〈聞き耳〉(2DM<=7)>[8, 2]>1> 成功数1 成功!

DL：おお、では廊下から明るい声が聞こえますね。…あかりの声のようです。

あかり：「……さん！ 仕事終わったの？ どこ行くの？」

草間：「いえ、まだです。あなた達の方は？」

爽太：「今日はもう休憩していいって、だから僕海岸の方に行こうかなって」

あかり：「えー、また海岸！ 一緒にお部屋でお昼寝しようって言ったのに！」

DL：……そんな楽し気な会話が聞こえてきますね！

小波 絵本：「…………」

熊埜御堂 久永：「お、どうした小波くん。なんかあったか？」

小波 絵本：「……いえ。あの子供たちの元気な声が聞こえてきたなと思っただけです」

熊埜御堂 久永：「おお、さっきの子達か！ 小さいのによく働くなと感心しきりだったぞ、俺は！ なあ白戸さん！」

白戸：「へあっ！？ …え、ええそうですね、はい…うちの施設にいる子達よりまだ小さいのに…」

白戸：「確か、巨海家が預かってる…んでしたっけ？ ご両親は、どうされたんでしょうね」

熊埜御堂 久永：「人の事情っつーのは色々だからなあ。ま、あんなに明るく元気なんだから大丈夫って事なんだろう！」

小波 絵本：「……まあ、部外者が首を突っ込んでいい話かどうか分かりませんね」

熊埜御堂 久永：「おっと、最初から自分を部外者と決めつけるのはよくないぞ小波くん」

熊埜御堂 久永：「よく知らん立場だからこそ、見つけられるものだってある。それを言ってやるかどうかは個人の自由だ、でも最初から部外者を名乗ってたら言いたい時に何も言えなくなるぞ」

熊埜御堂 久永：「手を出す、口を出す、出さないを決めてから自分の立場に言及するもんだ。後悔しない為に」

小波 絵本：「……………っ…、そう…かもしれません…」(オトギバラシでの諸々を思い出しつつ)

熊埜御堂 久永：「まあ俺は何でもかんでも口や手を出すもんでしょっちゅう煙たがれるがな！(はっはっはっは！！)」

小波 絵本：「は、はあ…」

小波 絵本：では所在なさげに視線をうつつかせつつ、今度は室内に気になるモノがないか見回しましょう

DL：そうですね、では室内を見渡せば…飾られた調度品の中に小さなガラスケースがあるのに気づけます。

DL：それに近づけば、中に水色から青、青から紫へと美しいグラデーションの大粒の宝石が飾られているのがわかるでしょう。

DL：〈専門知識：鉱物学〉、で何か分かるかもしれません。

小波 絵本：「…これは…。この島で採れる宝石か…？」

小波 絵本：じゃあそうですね…〈観察眼〉〈直感〉〈洞察〉〈オカルト〉あたりで代用できそうなありますか…？

DL：その中だと…〈オカルト〉でギリ、かな？

小波 絵本：では〈オカルト〉で振ってみてもよろしいでしょうか？

DL：どうぞ！

小波 絵本：2DM<=7〈専門知識（オカルト）〉(2DM<=7) > [1, 1] > 4 > 成功数 4 ミラクル！

小波 絵本：！？

熊埜御堂 亜聡：！？

DL：！！！！？？？

小波 絵本：え、ここで？ここで？？？

DL：と、とりあえずチケットどうぞ……ミラクルかあ、そうだなあ

DL：せっかくだもんな

DL：では、あなたは以前「オカルトと宝石」なる本を読んだ事を思い出します。

その中に「知る人ぞ知る、これを知っていれば宝石マニア」という大仰な見出しと共に紹介された宝石があった事も。

DL：その宝石の名前は「ルサルカナイト」、…和名を「海涙石(かいるいせき)」といい、とある地域からしか産出されない幻の宝石と、写真と共に記載されていました。

DL：その本で見た宝石と、今日の前にある宝石…色や輝きがとても似通っている、いやほぼほぼ同じだということにあなたは気づくでしょう。

小波 絵本 : 「……この宝石…、あの時 雀に顔に押し付けられた本に載ってた…。…確か…、「ルサルカナイト」…だったか…？」

熊埜御堂 久永 : 「うん？ どうした小波くん、その宝石が何かあったか？」

小波 絵本 : 「ああ、いえ…。…以前 本で読んだことのある宝石が確かこれだったなと…」

熊埜御堂 久永 : 「へえ、本に載るほどの宝石か。まあ綺麗だもんなあ！」

熊埜御堂 久永 : 「まあ、俺はそういうのあんま好きじゃないが」 すん…

小波 絵本 : 「…「興味ない」ではなく「好きじゃない」…？」

熊埜御堂 久永 : 「なんつーかなあ、削ったり整えたり加工したりだとか、そういう技術は素直に賞賛できるんだが」

熊埜御堂 久永 : 「飾り立てて競い合うこともあるだろ、あれがあんまりな」

小波 絵本 : 「……ああ、成程…。…確かに僕も、こういったものは個人的に愛でるのが一番良いと思います」

熊埜御堂 久永 : 「そうそう、こんなに綺麗なのにな」

熊埜御堂 久永 : 「人様の商売の道具で終わっちゃうのはもったいねえよ。まあ、それで世の中回ってんだけどさ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……なんか盛り上がってんな、親父と先輩」（ってな感じで、そろそろ合流）

熊埜御堂 明香 : 「ただいま～」

熊埜御堂 久永 : 「おう、二人共戻ったか！ ……どうだった？」

熊埜御堂 亜聡 : 「どうだったって。…まあ、普通に。」

熊埜御堂 亜聡 : 「穏やかそうな人だった」

熊埜御堂 明香 : 「うん、…いっぱいお話しちゃった」

熊埜御堂 久永 : 「そか」

熊埜御堂 久永 : 「なら、パパも一安心だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「だから自分でパパって言うなって。……で、先輩は親父がふらふらしねーように見ててくれたわけだな」

小波 絵本 : 「……ただ話していただいただけではあるが…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ふうん？ 何の話してたんだ」

小波 絵本 : 「…ついさっきは、この宝石についてだな」（かくしかで共有します）

熊埜御堂 久永 : 「小波くんめっちゃくちゃいい子だぞ、俺の話に文句ひとつ返さないで聞いてくれる子なんて今まで明香以外はいなかったからな」

熊埜御堂 亜聡 : 「気に入られてんな先輩」

熊埜御堂 明香 : 「ふふふ、パパと仲良しになったんですね」

小波 絵本 : 「…邪魔になっていないのなら良かった…」（ふい…）

熊埜御堂 亜聡 : 「邪魔っつーのはねえから気にしないでいいと思うぞ。鬱陶しさなら親父が一番だし」

熊埜御堂 亜聡 : 「……しかし宝石か。そういや老舗の宝石メーカーの経営者だったか、さっきのばあさん」

熊埜御堂 明香 : 「だったね。じゃあ、これも商品…だったりするのかな？」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩曰く、幻の宝石なんだろ。いくらなんだろうな」

熊埜御堂 明香 : 「もう、無粋だよお兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「うるせー一度は考えるだろ」

小波 絵本 : 「さあな…。……それこそ値段の付けようがない代物なのかもしれないな」

熊埜御堂 久永 : 「そーだそーだー」(小声)

熊埜御堂 亜聡 : 「どうせ親父も似たようなこと考えてたんだろ。…小波先輩賭けます？」

小波 絵本 : 「何でもすぐに軽率に賭けようとするな」

熊埜御堂 亜聡 : 「チッ」

熊埜御堂 明香 : 「お兄ちゃん！」

小波 絵本 : 「……しかし、これがオカルト誌に載っていたことを考えると…、案外曰く付きのものだったりするかもな…」

熊埜御堂 明香 : 「ひゃあ…」

DL : (あっ)(そうそう、追加情報として)

DL : 亜聡くんはこのディスプレイされた「ルサルカナイト」が、真名子がつけていたものと同じものであることに気づいて OK です。

熊埜御堂 亜聡 : (ほうほう) (首飾りですかね、OK です！)

DL : (です)

小波 絵本 : 「例えばだが…、海外には持ち主が次々と変死を遂げた「ホープダイヤモンド」という宝石がある」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ん？」

熊埜御堂 明香 : 「あっ、呪いのダイヤ…ですっけ。有名ですよ。…？ どうしたのお兄ちゃん」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、別に。続けていいすよ先輩」

熊埜御堂 亜聡 : 「ちなみにそのダイヤは俺は知らねえ」

熊埜御堂 明香 : 「もー、オカルト部なのに！」

小波 絵本 : 「……部室に「オカルトと宝石」という本があるから読んでおけ。…で、お前は何を言おうとした？」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩が話したから気になっただけすけど。…それとは別の話だが、じゃあせつかくなんで」

熊埜御堂 亜聡 : 「そのガラスケースの宝石、さっきばあさんが首元に大ぶりのやつ付けてた。この地域の名産なのか、メーカー的にも代表する宝石だったりとかするのかもしれないすね」

熊埜御堂 明香 : 「…あっ、そういえば…同じものかも」

熊埜御堂 亜聡 : 「だから、気になるならあのばあさんに聞けば詳しい話聞けるんじゃないか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「もしくは社長秘書とか」

小波 絵本 : 「特定の産地からしか採れないらしいからな。名産品ではあるだろう」

熊埜御堂 明香 : 「宝石が名産品って……かっこいいね！」

熊埜御堂 明香 : 「…あ、でも今鉱山って…」

熊埜御堂 亜聡 : 「閉鎖」

熊埜御堂 明香 : 「かなしいね…」

熊埜御堂 亜聡 : 「今はどうしてんだろうな。その宝石も、もう取れねーのかどうなのか」

熊埜御堂 明香 : 「どうなんだろうね」

小波 絵本 : 「まあ、採掘が終了している宝石なんてザラにあるらしいからな」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうなんすね」(宝石くわしくない男子)

熊埜御堂 明香 : 「かなしい…」

小波 絵本 : 「……それを調べた奴も同じ感想を言っていた」<明香ちゃん

熊埜御堂 明香 : 「……それってもしかして…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。宝石興味あったんすか、あの先輩」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあ土産にでも何か買ってけば？」

小波 絵本 : 「……それは真面目に言ってるのか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「言ってますけど」

熊埜御堂 亜聡 : 「別にくそ高いやつじゃなくてもいいでしょ。……ま、先輩に任せるけどな」

小波 絵本 : 「……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……っわけで、屋敷飽きたからそろそろ外ぶらつきたいんだが。そういうの無いなら、部屋で寝たい。」

熊埜御堂 明香 : 「お兄ちゃん、せっかく来たんだから一緒に色々行こうよ！」

小波 絵本 : 「……草間さんが 17 時半には帰ってこいと言っていた」

熊埜御堂 亜聡 : 「だってよ明香」

熊埜御堂 明香 : 「まだ 14 時前だから全然色んなところ行けるよ！」

小波 絵本 : 「……地図も預かってある」(すっ)

熊埜御堂 明香 : 「わあ、ありがとうございます！ ……ほらお兄ちゃん、お土産屋さんあるよ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「……言っとくが、俺は別に土産いらねーぞ」

熊埜御堂 明香 : 「何でお兄ちゃんの分になるの！ ママとか友達とか部長とかの分だよ！」

小波 絵本 : 「他人に土産を買えと言っておきながら？」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、俺は別に買いたい相手もないねーから……って、あー……部長か……。」

熊埜御堂 亜聡 : 「買わないとうるさそうだな……」

熊埜御堂 明香 : 「ね、行こうよ。……だめ？」(こてん)

熊埜御堂 亜聡 : 「……。わーったよ。行くぞ。」

熊埜御堂 明香 : 「やった！ ……えへへ」

小波 絵本 : 「……僕もどのみち住吉と寿限無先輩には買うつもりだったからな……。行くか」

熊埜御堂 明香 : 「わーい！ じゃあみんなで行きましょう！」

熊埜御堂 久永 : 「あ、明香～。パパは白戸さんと話があるから留守番してるからな！」

熊埜御堂 明香 : 「えー……わかった。ママのお土産、こっちで見とくね」

熊埜御堂 久永 : 「おう、亜聡も一緒に見繕ってやってくれ！ じゃ小波くん、うちの子達の事頼んだぞ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「はいはい。……めんどくせー」

小波 絵本 : 「はい、行ってきます」

DL : ではあなた達は 3 人連れだって【みやげ屋「なみだめ」】へ向かった。

DL : ………

DL : では、あなた達は地図を見ながら島内を軽く散策しつつ……当初の目的地であったみやげ屋「なみだめ」へと無事に到着しました。

DL : 島唯一の雑貨屋らしいそこは、どこか懐かしい古ぼけた外観をしています。店を覗くと、中には雑貨や土産物の菓子が並べられています。

……店員の姿は見えません、どうやら少なくとも表の方にはいないようです。

小波 絵本 : 「……?誰も居ないのか…？」(きよろきよろ)

熊埜御堂 亜聡 : 「おもしろそうなもんでも置いてねーかな。」 外から商品棚の方をざっと見つつ

DL : っと、店の中に入りますか？

小波 絵本 : そうですね、入ります

熊埜御堂 亜聡 : 入ってよさそうなら入ります！

DL : はーい、では店の中に入ればそこから奥の方に工房のような場所が見え、そこから「カンカン」という何かを叩くような音が聞こえてきますね。

熊埜御堂 亜聡 : 「、……ん？ ……なんか音がする」

熊埜御堂 明香 : 「ほんとだ、何か…叩いてる音、かな？ 奥の方から？」

小波 絵本 : 「…………お邪魔します。」

小波 絵本 : 声を掛けつつ奥の方を覗いてみます

熊埜御堂 亜聡 : 小波先輩が奥の方を覗くなら、その後ろから一緒に覗いちゃうかもですね…！

DL : ではあなた達が身を乗り出して奥の方を覗くと、男性が一人金槌で何かを叩いている姿が目に入るでしょう。

作業に集中しているようで、声をかけるなどしなければあなた達に気づきそうもない。

小波 絵本 : 「…………（じっ…）」何を作っているのか観察してみます

DL : 観察するなら…〈観察眼〉とかで判定になりますかね

小波 絵本 : 1 あるからやってみようかなと…

熊埜御堂 亜聡 : がんばえー！

DL : どうぞ！

小波 絵本 : 1DM<=6〈観察眼〉(1DM<=6) > [1] > 2 > 成功数 2 ダブル！

system : [小波 絵本] クリケ : 1 → 2

小波 絵本 : ！？

熊埜御堂 亜聡 : ！？

DL : ふあっ！？

DL : では、あなたはじっと男性が何をしているのか観察する。

……その結果、どうやら彼の手握られているのは「刀」のようなものと分かるでしょう。ただ、それ以上はさすがに男性の動きに邪魔されて分かりません。

小波 絵本 : 「…………刀…ですか？」ようやく男性に声を掛けます

DL : では、声をかけられたことに気づいた男性はくりとあなた達の方へ振り返ります。

押火 : 「……ああ、いらっやい。何か用事か」と不愛想な表情のまま、気だるげに口を開きます。

小波 絵本 : 「いえ、土産を買いに来たのですが…」

押火 : 「ああ、なら表で勝手に見てってくれ。何か買うなら声をかけてくれりゃいい」

小波 絵本 : 「……おすすめの品などありますか？」

押火 : 「すすめたからって買ってくれんのかい」

小波 絵本 : 「財布との相談次第ですね」

押火 : 「ならあんまりすすめる意味はねえな。…気になるものがありゃ声かけてくれればいいからよ」

小波 絵本 : 「わかりました。お邪魔してすみません」 では工房から出てお土産を見に行こうとしますね

熊埜御堂 亜聡 : 「今何してんすか？」 では小波先輩が出ていく前に店員さんに

熊埜御堂 明香 : 「あつ、お兄ちゃん。あんまり邪魔しちゃ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「だって表でも聞こえてただろ。カンカンカンカンカン」

熊埜御堂 明香 : 「そうだけども……」

押火 : 「何してって、そりゃ、……………、あ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん？」

DL : 店員は気だるげにあなた達へと振り返ると、わずかに目を見開き小さく口を動かします。

…〈*知覚〉〈聞き耳〉による判定が可能です。

熊埜御堂 亜聡 : …聞き耳で！

熊埜御堂 亜聡 : 1DM<=5 〈聞き耳〉 (1DM<=5) > [1] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system : [熊埜御堂 亜聡] クリケ : 2 → 3

熊埜御堂 亜聡 : ！？

小波 絵本 : ！？！？

DL : どうしたの今日

DL : では、亜聡くんは店員が非常に小さな声で「みずの」と言った事がわかるでしょう。

熊埜御堂 亜聡 : 「、……。…俺らのことっすか？」 ぴくっと眉を動かして、怪訝そうに聞く感じで

押火 : 「……。…なんの話だ？」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、今「水野」って言ったから……。…水野じゃねーけど」

熊埜御堂 明香 : 「え、……。…そ、そうなん、ですか？」

押火 : 「……。…いや」

押火 : 「そんな事を言った覚えはないな」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。…」

熊埜御堂 亜聡 : 嘘だろ…？って目でじー。〈心理〉とかは…？

DL : 振れますよ！

熊埜御堂 亜聡 : ではせっかくなので！

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=8 〈心理〉 (2DM<=8) > [3, 5] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system : [熊埜御堂 亜聡] クリケ : 3 → 4

DL : ん———— ???

熊埜御堂 亜聡 : 女神大はしゃぎはいいけどそろそろ怖いから座って

DL : では、亜聡くんは今のやり取りで店員が何かを誤魔化そうしていると確信しますね。

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」 了解です。何だこいつ…って顔しながら、とりあえず深くは聞かない感じで…

熊埜御堂 明香 : 「…お兄ちゃん？」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香、…気のせいだったみてーだな。俺の。」

熊埜御堂 明香 : 「そ、そっか。ならいいんだけど」

熊埜御堂 亜聡 : 「『水飲んでえ』って言ったらしい」

熊埜御堂 明香 : 「ええ！？」

ドロシー : 「暑かったのかな…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「それなら仕方ねーよな」 雑誤魔化し

押火 : 「……………」

押火 : 「それで、何してるかだっけか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「おー」

押火 : 「仕事だよ。資料館の親父から展示品の整備を頼まれてね。それをしてた」

熊埜御堂 亜聡 : 「展示品の整備…？」 言われて手元を覗き込む感じで

小波 絵本 : 「……資料館？」 (ぴくっ…) 資料館という言葉に反応して戻ってきます

押火 : 「あらかたは終わったが、こいつだけは手間がかかる」

押火 : では亜聡くんが店員の手元を覗き込むと、そこには銀色に光り輝く刀身——刀がありました。

熊埜御堂 亜聡 : 「うお。それ、刀じゃねーか。本物？」

押火 : 「本物じゃなきゃ手入れはしねえさ。ま、誰が使うってわけでもないがな」

熊埜御堂 亜聡 : 「いやそりゃそーだろ。刀だぞ」

小波 絵本 : 「…展示品、という事は…その刀、島の重要文化財か何かですか？」

押火 : 「ああ。…詳しいことは資料館の親父から聞いてくれ、もっとも今日は閉まってるけどな」

小波 絵本 : 「……ああ、展示品が整備中ならそうですね…」

熊埜御堂 亜聡 : 「っつーか展示品の整備ってすげーだろ。普通の雑貨屋じゃねーのかここ」

押火 : 「ああ、雑貨屋だけじゃなくて工房も兼任してるからな」

押火 : 「っつても、俺は本来は鉱石やら宝石専門でこういった金物にゃ縁がない筈だったんだがな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「へえ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「器用なんだなおっさん」

押火 : 「……まあな」

熊埜御堂 明香 : 「…あ、じゃあもしかしてお店の方にも宝石とかあったり…？」

押火 : 「好きに見ろって言ったはずだ。何か買うなら呼べとも」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあ見るか。明香、行くぞ」 くるっ

熊埜御堂 明香：「あ、待ってよお兄ちゃん！ すみません、ありがとうございました…！」

押火：「……………」

小波 絵本：「お邪魔しました」 同じく出ていく

熊埜御堂 亜聡：そのまま亜聡は「品物を見る」しますね…！

小波 絵本：同じく品物を見てみます！

DL：では店内の品物を観察すると、よく見れば雑貨の多くが鉱石で出来たアクセサリ類だと分かります。

鉱石の名前といくつかのワードが隣のポップにかかれており、その種類も形状も様々だ。

値段はまちまちだが、中には安価なものもあるでしょう。

DL：ポップの内容の例として例：アンバー(琥珀)：歓喜・柔軟・創造、ジャスパー(碧玉)：自律・永遠の夢・判断力等があります。

これらについて詳しく知りたいなら、〈専門知識：鉱物学〉による判定が可能です。

熊埜御堂 亜聡：「意外と安いのもあるんだな…」

熊埜御堂 亜聡：代用判定できそうなものあるかな…〈知識〉…で分かる範囲とか…？

小波 絵本：今回は〈オカルト〉で代用は無理そうでしょうか？

DL：〈知識〉OKですよ！ 〈オカルト〉は少し難しい…かな

熊埜御堂 亜聡：では知識で振りたいです…！

小波 絵本：となるとこちらも〈知識〉かな…

DL：どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=6〈*知識〉(1DM<=6) > [2] > 1 > 成功数 1 成功!

小波 絵本：1DM<=5〈*知識〉(1DM<=5) > [3] > 1 > 成功数 1 成功!

DL：えらいな…。では二人ともポップに書かれているワードは鉱石の和名と「石言葉」と言う事が分かりますね。

熊埜御堂 亜聡：「なんか…あれだろ、花言葉みてーなやつ」

小波 絵本：「ああ…、女子が好きそうなヤツか…」

熊埜御堂 明香：「偏見！ 好きだけど！」

熊埜御堂 亜聡：「じゃあ先輩当たってんじゃねーか」

熊埜御堂 明香：「で、でもでも全員が全員そうじゃないっていうか…！」

熊埜御堂 亜聡：「ドロシーは？」 > 宝石

ドロシー：『え、ええと……。き、きれいなものは好き…かな…？』

熊埜御堂 亜聡：「アリスは？」

アリス：「大好きよ！ 金や宝石って、ヒトの欲望が詰め込まれてるから！ それに翻弄されてる人間って見ていてとっても楽しいわよ！」

熊埜御堂 亜聡：「……………」

熊埜御堂 亜聡：「まあ、やっぱ先輩当たってんじゃねーか？」

小波 絵本 : 「……若干ずれた感性の持ち主もいた気がするが…まあいいか…」

熊埜御堂 明香 : 「…い、いいのかなあ……お兄ちゃん達は、宝石、好きじゃない？」

熊埜御堂 亜聡 : 「普通」

小波 絵本 : 「……別に、嫌いな訳じゃない」

熊埜御堂 明香 : 「そっかあ。……お手頃なものもあるから、お土産とかにどうかな～とも思ったんだけど」

熊埜御堂 明香 : 「部長とかも同じ感じかなあ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。お前は欲しいやつでもあんのか？」

熊埜御堂 明香 : 「えっ？ うーん、そうだなあ……」

小波 絵本 : 「……邪魔にならないような物なら、八雲も嫌な顔はしないと思う…」

熊埜御堂 明香 : 「あ、ほんとですか？ なら何か買っていったらあげようかな」

熊埜御堂 明香 : 「ちなみに、わたしが気になってるのは…これかな！」

DL : そう言って明香が指さしたのは「パパラチア」だ。

熊埜御堂 亜聡 : 「ふーん…それも石言葉とかあんのか」

DL : 和名を「藍玉」、石言葉は「慈愛・誠実」とポップに記載されている。

熊埜御堂 亜聡 : 「"ほい"な……」 小聲

熊埜御堂 明香 : 「？」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや別に。」

熊埜御堂 亜聡 : ちなみにお値段は…？

DL : なかなかお高めですね…

熊埜御堂 亜聡 : 「……」 反対側にいる先輩を見る

小波 絵本 : 「買わないからな」(ぴしゃり)

熊埜御堂 亜聡 : 「チッ」

熊埜御堂 明香 : 「き、気になるっただけだから…！」

DL : (あ、ちなみに情報としては以上です)

熊埜御堂 亜聡 : (了解です！) (自分の財布の中身がいくらあったか考えつつ、では店内を見回してみようかな…)

小波 絵本 : (了解です！) (こちらもお土産どうしようか考えつつ店内見てみます)

DL : 店内を見渡せば、品物が所狭しと並べられている。食品と雑貨でコーナーが区切られているように見える。

…その区切られた位置に美しく輝く宝石がディスプレイされている。値札などが無いのを見るに非売品が展示されているようだ。よく見れば、それは巨海家当主がつけていたルサルカナイト…より少し小ぶりなものようですね。

熊埜御堂 明香：「……あっ、これって」

小波 絵本：「ルサルカナイトのようだな。…先ほど巨海家で見ただけのものよりは小さいが」

熊埜御堂 亜聡：「これは売りもんじゃねーんだな。やっぱ貴重なのか」

熊埜御堂 明香：「聞いてみる？ 売らないんですかーって」

小波 絵本：「……聞いたところで到底 買える値段ではない気がするが」

熊埜御堂 亜聡：「もしかしたら値札が付いてないのはタダってことかもしれねーぞ」(?)

押火：「おい」

熊埜御堂 亜聡：「うわ」

押火：「聞こえてるぞ、好き勝手言うな。それは売り物じゃない」

熊埜御堂 亜聡：「じゃあマジで飾ってるだけっすか」

押火：「ああ。別に俺は置いてても仕舞ってても捨てても構わんのだが、置いてた方が客寄せにもなる」

熊埜御堂 明香：「珍しい宝石だから…ですか？」

押火：「今はもう取り尽くされて鉱山も閉鎖されたから、手に入らないものだしな。…巨海家は長い間、この石でだいぶ儲けたそだよ」

押火：「ま、今は目玉商品もなくなって経営も苦しいんだろうけどな」

熊埜御堂 亜聡：「…そうなんすか？」

押火：「多分な。……ああ」

押火：「お前ら、巨海の客人か」

熊埜御堂 亜聡：「まあ…そうっすね」

押火：「なるほどな。じゃあ、今俺が言ったことはここだけの話にしとくんだぞ」

熊埜御堂 亜聡：「じゃあなんかまけてくれたら考える。これとか。」> パパラチア

押火：「無茶言うな。じゃあなんか適当に菓子でも持ってけ。それでどうだ？」

熊埜御堂 亜聡：「えー」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡：「しゃーねえな…。だってよ先輩。部長の土産もこれでいいんじゃない？」

小波 絵本：「流石に適当が過ぎる」

熊埜御堂 明香：「そだよ、もっとちゃんと選ばないと！ …もー、店員さんすみませんさっきから」

熊埜御堂 亜聡：「じゃあ先輩は何買うんだよ」

小波 絵本：「……八雲なんだから、栞とか珍しい本とか…そういうのが喜ぶんじゃないのか？」

熊埜御堂 亜聡：「珍しい本なあ…」

押火：「本は売ってない」

熊埜御堂 明香：「…じゃあ、あの、栞は？」

押火：「……………」

DL：店員はのっそのつと緩慢な動きで工房の方に引っ込み、少しして戻ってきます。
その手には、銀色で出来た何かがいくつか握られていました。

押火：「栞、というかブックマーカーだが」

押火：「先についてるのはトパーズ、黄玉だな。石言葉は「希望・知性・繁栄」だ」

押火 : 「本好きならまあまあ似合うんじゃないか、知らんが」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあそれだ」

熊埜御堂 明香 : 「わあ…！」

小波 絵本 : 「良かったな、ちょうど良さそうなものが見つかって」

熊埜御堂 明香 : 「はい！ じゃあそれをお土産用でお願いします！」

押火 : 「毎度」

熊埜御堂 亜聡 : 「ちなみにですが、安価なアクアマリンの何かってあります…？」

DL : choice[指輪,ブレスレット,チャーム] (choice[指輪,ブレスレット,チャーム]) > ブレスレット

DL : ではアクアマリンのブレスレットがありますね。お値段もお手頃！

熊埜御堂 亜聡 : おお！ じゃあそれを2つしれっと買いますね！

押火 : 「、……………」

押火 : 「『聡明』」

熊埜御堂 亜聡 : 「さすが、ポップ描いてるだけあって覚えてるんすね」

熊埜御堂 亜聡 : 「ほら、明香」 1つ。

熊埜御堂 明香 : 「え、…わ」

熊埜御堂 明香 : 「い、いいの？」

熊埜御堂 亜聡 : 「それで我慢しろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「そいつなら2つねえと意味ねーだろ」

熊埜御堂 明香 : 「……うん！」

熊埜御堂 明香 : 「えへへ、ありがとうお兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ん」

押火 : 「……………」

押火 : 「そのアクアマリン、金いいぞ」

熊埜御堂 亜聡 : 「は？」

押火 : 「さっきの俺の失言、黙っててくれるんだろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「マジか。……言ってみるもんだな」

押火 : 「二回目はねえからな」

熊埜御堂 亜聡 : 「どーも。ちなみに、2個まけるのも3個まけるのも同じじゃねーか？」先輩ちらっ

押火 : 「おい」

小波 絵本 : 「いや…、さすがにそれは…」

小波 絵本 : 「……僕は普通に買う。」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩は先輩だな。…」

小波 絵本 : ではシトリンとペリドットのチャームと、ローズクォーツのブレスレットの3つを買おうとしますね

熊埜御堂 亜聡 : 「色とりどりっすね」

小波 絵本 : 「渡したい相手が多いからな…」

押火 : 「毎度。……………」

押火 : 「『恋愛・繊細』…『信じる心』、『友情・初恋・甘い思い出』

押火 : 「……なんかあったか、お客さん？」

小波 絵本 : 「…………別に。世話になった人たちに贈りたい物を選んだらこうなったっただけです」

押火 : 「そうかい」

熊埜御堂 亜聡 : 「…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ま、俺はこんなもんかな。親父にはさっきもらった菓子でも渡すか」

熊埜御堂 明香 : 「あ、ママには？ どうしよっか、また後で考えよっか？」

熊埜御堂 明香 : 「どうせあと一週間もいるんだし…」

熊埜御堂 亜聡 : 「親父が選ぶんじゃない？ 選ばなかったらまた来るか」

熊埜御堂 明香 : 「うん、それもそう……」

押火 : 「早く出ていけ」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ん？」

DL : 「あと一週間もいる」、…そう明香が言った瞬間、店員の雰囲気が一気に冷たいものになります。

DL : 店員はじつ、とあなた達を睨みつけ、更に畳みかけるように口を開く。

押火 : 「早くこの島から出る。…ロクな目に合わんぞ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………はあ？ ？ ？」

DL : ……それだけ言うと、あなた達に背を向けてそのまま奥の工房へと引っ込んでしまいます。

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、どういうことすか。ちょっと、…おい！」

小波 絵本 : 「……………」

熊埜御堂 明香 : 「…わ、わたし変なこと言ったかな…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや言っていない」

小波 絵本 : 「……言っていない、と思うが…」

熊埜御堂 亜聡 : 「どうする？ 追いかけてゴネるか？」

熊埜御堂 明香 : 「そ、そこまでしなくても…！」

小波 絵本 : 「やめておけ。この島でトラブルを起こせば巨海家にも迷惑が掛かる」

熊埜御堂 亜聡 : 「、あー…………」 納得。

熊埜御堂 亜聡 : 「…しゃーねえな。なんなんだ一体」

熊埜御堂 明香 : 「……………」

熊埜御堂 明香 : 「いい店員さんだったのに、何があったんだろ…」

アリス : 「たまたま虫の居所が悪かったんじゃない？ まあ、気にする事じゃないと思うわよ」

熊埜御堂 亜聡 : 「接客業したらダメなタイプだろそれ。…はー、まあいいか別に」

DL : (では、次はどこへ向かいましょう?)

小波 絵本 : 「……確か資料館は閉まっていると言っていたな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうだったな。じゃあ行けるのは……海だな。」 港か海岸か

熊埜御堂 明香 : 「海！」

小波 絵本 : 「……そう言えば、あの小さい方の双子も海岸に行こうかと話していたな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「へえ。そうだったのか」

熊埜御堂 明香 : 「ちいさいほうのふたご」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや流しちまったけど確かにそうだな?。おい先輩」 > ちいさいほうのふたご

小波 絵本 : 「………まとめて呼ぶならその方がわかりやすいかと…」

熊埜御堂 亜聡 : 「普通に「あの双子」でわかるわ」

熊埜御堂 明香 : 「せ、せめてなまえ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「名前……、………」

小波 絵本 : 「……あかりと爽太だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「それだ」

熊埜御堂 明香 : 「…先輩は覚えてたけどお兄ちゃん覚えてなかったでしょ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「思い出したことだし海岸行くか」

熊埜御堂 明香 : 「思いだしたって言った今！」

熊埜御堂 亜聡 : 「気のせい気のせい」

熊埜御堂 明香 : 「もー！」

DL : ではそんな風に騒ぎつつ、あなた達は海岸へ向かいます。

押火 : 「………」 その姿を、奥の工房から見つめられていることにも気づかないまま。

DL : ………

DL : ……

DL : …

DL : 海岸へ向かうと着物を来た少年…爽太が潮干狩りをしているのが見えます。その他に人影はありません。少し離れたところに栈橋と小舟があるのを発見できますね。

熊埜御堂 亜聡 : 「お、いた。………? 一人しかいねーぞ」

熊埜御堂 明香 : 「あれ、ほんとだ。爽太君…だけ？」

小波 絵本 : 「……また一人だけでどこかに突っ走って行ってそうだな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ありそうすね。……おい、姉貴いねーけど一人で潮干狩りしていいのか」 爽太君に近づいて声をかける形で！

爽太 : 「えっ、……わ、わわっ!？」

爽太 : では急に声をかけられて驚き、そのまま尻もちをついてしまう。

熊埜御堂 亜聡 : 「あっ」

熊埜御堂 明香 : 「あっ、ころお兄ちゃん！」

小波 絵本 : 「…大丈夫か？」(すっ)手を差し伸べる

爽太 : 「わ、…ご、ごめんなさい、びっくりして…ありがとうございます！」

小波 絵本 : 「いや、こちらこそ驚かせてすまなかった。…1人だけなのか？」

爽太 : 「ひとり…あっ、お姉ちゃんですか？ お姉ちゃんなら、多分今お部屋で昼寝してる…かな？」

爽太 : 「誘ったんですけど、「きょうは夜にそなえてやすむ！」って言ってて」

熊埜御堂 亜聡 : 「自由な姉貴だな」

小波 絵本 : 「……確か姉の方が「海岸に行こう」って言ってなかったか…？」

爽太 : 「？ ええと、ぼくは海岸のほうに行こうって言ったけど…」

小波 絵本 : 「いや、すまない。僕の勘違いだった。……夜に備えて…、もしかして、晚餐会の事か？」

爽太 : 「はい、ぼくたちも給仕に加わってねっておねがいされたんです」

爽太 : 「だから、えっと、…は、はじめてなので、上手にできないかもなんですけど、…がんばりますから！」

熊埜御堂 明香 : 「わあ、そうだったんだ。うんうん、がんばってね！ 応援してるね！」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺等は別に何も気にしねーから、気にすんな」

小波 絵本 : 「……最初から上手にできる人間なんていない。だからそう気負わなくてもいい」

爽太 : 「はっ、はい！」

熊埜御堂 亜聡 : 「…で、そんな忙しい奴がこんなとこで何してたんだ。夕飯用のハマグリでも取ってたのか？」

爽太 : 「あ、えっと、明日の朝ごはんになるかなと思って貝取ってたのはそうなんですけど」

爽太 : 「ぼく、海が好きで……」

爽太 : 「だから、暇さえあれば海の近くにいちやうとか…」

熊埜御堂 亜聡 : 「へえ…海なあ」

爽太 : 「はい！」

熊埜御堂 亜聡 : 「海か山かって定番の質問があるよな。俺は「部屋」って答えるけど。…海が好きってことは、あの小舟で沖に出たりとかするのか？」

爽太 : 「あ、……えへへ、実はあれ、ぼくの舟なんです」

小波 絵本 : 「選択肢にない答えを増設するな。……へえ、舟を持ってるのはすごいな」

爽太 : 「見たいならご案内しましょうか！ さすがに沖まではいけけないけど、栈橋につけたまま乗るくらいだったら多分だいじょうぶです！」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩興味あるなら乗せてもらったらどうすか？」

小波 絵本 : 「………(ちら、)」横目で爽太君の様子を見えます

爽太 : 乗せてもらえば？ と言ったのを聞いた瞬間に目をきらきらさせていますね

熊埜御堂 亜聡 : 喜んでる

小波 絵本 : 「………なら、お言葉に甘えて乗せてもらっても？」 空気読む

爽太 : 「っはい！ じゃあどうぞこっちに！」

DL : 爽太は目を輝かせてあなた達を棧橋につけた小舟まで案内してくれます。

棧橋も舟も小さいながらにしっかりした作りで、大人が数人乗っても大丈夫そうだとわかるでしょう。

熊埜御堂 亜聡 : 「おー、すげーな。立派。」 乗らないけど棧橋までついてきた

熊埜御堂 明香 : 「ね、立派な舟！」

爽太 : 「ありがとうございます！ 時々これに乗って、沖の方で釣りをしたりするんです。お姉ちゃんには危ないからやめろって言われちゃうんですけど…」

小波 絵本 : 「遠目で見た時よりもずっとしっかりした舟だな…。……確かに流されてしまっは危ないな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「流されたら確かに…。この船、エンジンとかついてんのか？」 覗き込み

爽太 : 「あ、はい。一応は…でも、ぼくでも扱えるようにってあんまり早くならないんです」

爽太 : 「…もっと大きい舟だったら、別の島や土地にいけるのになあ」

小波 絵本 : 「……島から出たいのか？」

爽太 : 「出たい、というか…島の外ってどうなってるんだろと思って」

爽太 : 「大きい学校があったり、広い道路があったり、お店もこの島が丸ごと入るくらい広がったりするんでしょうか？」

小波 絵本 : 「……確かに、島の外にはたくさんの物がある。……良いモノだけじゃなくて、悪いモノも、な…」

爽太 : 「悪いモノ？」

小波 絵本 : 「……人に変なモノを見せて、とんでもない事件に発展させたゲームとか…」

熊埜御堂 亜聡 : 「げっほ」

爽太 : 「ぼく、ゲームしたことないです！」

爽太 : 「島の外にはそんなゲームがあるんですか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「待て待て待て待て。先輩。」

熊埜御堂 亜聡 : 「知識が偏ってる先輩」

小波 絵本 : 「……冗談だ。…まあ、何が言いたいかと言うと…、こんな風に平気で嘘を吐く悪い人間も人が多い場所には沢山いる、という事だ」

爽太 : 「な、なるほど……」

爽太 : 「……お姉ちゃんも、よくおなじこと言ってます。島の外には悪い人間も多いから、あんまり外なんてあこがれないほうがいいって」

爽太 : 「でも、やっぱりそういうのってじっさいに見ないとわかんないんじゃないかなって思ってた…」

小波 絵本 : 「……そうだな。実際に痛い目に遭って、そこから学ぶ事もある。……本当は痛い目に遭う前に気が付けば一番なんだが」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

爽太 : 「…うーん、むずかしいですね」

爽太 : 「痛い目にあわないと勉強できないのに、本当はそうなるまえに気が付くのが一番なんて、ぼくにはむずかしいかも」

小波 絵本 : 「……君だけじゃない。大人でもそれが出来ない人間は沢山いる。……僕もそうだった」

爽太 : 「……そうだったんですね」

小波 絵本 : 「……もし、今 君に出来る事があるとするなら…。君の事を真剣に心配してくれている人の声に耳を傾ける事、だろうな。」

爽太 : 「……そう、なのかな」

爽太 : 「うーん、でもお姉ちゃんはお姉ちゃんが無茶ばっかりするんですよ…」

熊埜御堂 亜聡 : 「無茶？」

爽太 : 「ほら、今日もお客様置いてっちゃって先にお屋敷に走って行っちゃったし…」

爽太 : 「なんか、いつもぼくより先回りしてお仕事しようとするんです。…双子だから立場は一緒なのに」

熊埜御堂 亜聡 : 「まあ……双子だろうと、いつも対等な気分でいられるわけじゃねーからな……」

熊埜御堂 明香 : 「そうだね、妹にお尻叩かれながら部屋の掃除をするお兄ちゃんもいるし」

小波 絵本 : 「……亜聡…、お前…」

熊埜御堂 亜聡 : 「兄にどんだけ言われても相手の好意に気付かぬー妹もいるし」

熊埜御堂 明香 : 「この間ほんとうに部屋ひどかったからねお兄ちゃん！ って、好意って何のこと？ 話逸らしちゃだめだよ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「あーあー。今はもう昔の話だろ。今の部屋は綺麗かもしれねーからこの話は終わり。」

熊埜御堂 明香 : 「……ここに来る前にちゃんと掃除してきた？ ドロシーちゃんに聞くからね？」

熊埜御堂 亜聡 : 「したかもしれないししてないかもしれない。『シュレーディンガーの俺の部屋』。」

熊埜御堂 明香 : 「ドロシーちゃん！」

ドロシー : choice[(亜聡君掃除した?) した,してない] (choice[(亜聡君掃除した?)した,してない]) > (亜聡君掃除した?)した

ドロシー : 『大丈夫、今回はした。…というか、してもらった』(うんうん)

熊埜御堂 明香 : 「そっか…大変だったね…」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺に言う台詞だろそれ」

熊埜御堂 明香 : 「ドロシーちゃんがどれだけ言ったら腰上げたのかなって想像したら労わりたくなっちゃった」

ドロシー : 『(ふるふる) ……帰って来た時、ゴキブリとか湧いてたら大変だと思ったから…』

熊埜御堂 明香 : 「やだあ…想像したくないい…」

熊埜御堂 亜聡 : 「別に毒があるわけでもねーのになア」> ゴキブリ

爽太 : 「えっと、掃除はした方がいいとおもいます…」

熊埜御堂 明香 : 「ほらあ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

ドロシー : 『亜聡が良くて、結局 明香が退治する羽目になりそうだから…』

熊埜御堂 亜聡 : 「明香はゴキブリは……」

熊埜御堂 明香 : choice[ダメ,平気,ダメだったのにお兄ちゃんのせいで…] (choice[ダメ,平気,ダメだったのにお兄ちゃんのせいで…]) > ダメだったのにお兄ちゃんのせいで…

熊埜御堂 明香 : 「……慣れちゃったよお……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。じゃあいいか」

熊埜御堂 明香 : 「よくない！」

小波 絵本 : 「最低だなお前」

熊埜御堂 亜聡 : 「まあいいんだよ俺の部屋のゴキブリ事情は。それより舟だろ舟」 雑方向転換

爽太 : 「ふふふっ、……あつ、そうだ！」

爽太：「今日はもう遅いから案内できないんですけど、明日の午前中に皆さんも一緒に釣りとかどうですか！
実はとっておきの場所があって…！」

爽太：「多分、まだぼくしか知らない場所なんです！ おもしろい話を聞かせてくれたお礼に連れて行きたいなって思って、……どうでしょう？」

熊埜御堂 亜聡：「おもしろい話」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん…」

小波 絵本：「今の話をおもしろいと受け取ってくれているならそれは良かった。……そうだな、1 週間もいるんだ。案内、よろしく頼む」

熊埜御堂 亜聡：「……そうだな。1 週間もいるんだからな。どうせだし、釣りもやるか」

爽太：「(ぱあっ)じ、じゃあ、約束ですよ！ 明日、ここで待ってますからね！」

熊埜御堂 明香：「ふふっ、うん。じゃあ約束ね！」

小波 絵本：「ああ、必ず行く」

熊埜御堂 亜聡：「明香が連れて来る」 俺を

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん」

DL：では、爽太と明日の約束を交わしたあなた達は、水平線に日が沈んでいくのに気が付く。
…もう晚餐会の時間も近い、そろそろ戻らないと思う事でしょう。

▼ 1 日目 夕方 —— 晩餐会

DL : あの後、あなた達は爽太と共に巨海邸へと帰宅した。

そして少しの休憩のあと、草間の案内で屋敷の広間へと通される。……晩餐会の始まりだ。

DL : 長いテーブルの上には主に海鮮を中心としたさまざまな料理が並んでいる。

更に数人の使用人が忙しく動いているのが見え、その中にはあかりと爽太の姿も見えた。

DL : あかりはあなた達の姿を見つけると、顔を輝かせて飲み物の瓶を持って駆けてきて、飲み物を注いでくれる。…その頻度があまりにも多い為、爽太が慌ててあかりを引っ張って奥へと引っ込む光景も見られた。

DL : 草間は真名子の横に立ったまま控えている。

食事は今は取らないようで、時折真名子に話しかけられては相槌をうっていた。

あなた達の向かいの席では、白戸が久永にじっくり話しかけられて困っている姿が見えた。

DL : (描写としては以上です、晩餐会では会話に耳を立てたり好きな NPC に話しかけたりなどが可能です)

熊埜御堂 亜聡 : (はーい！) では亜聡は…やっぱり目の前で親父に絡まれてる白戸さんをまずは哀れみと呆れの目で見ちゃいますかね…。まずはそのまま話聞かかも。

小波 絵本 : 小波は特に話しかけたりはしなさそうなので、会話に聞き耳でも立ててますかね

DL : 誰の会話に聞き耳を立てる感じですか？

小波 絵本 : じゃあそうですね…。真名子さんと草間さんにしましょうか

DL : はーい、じゃあさきに真名子と草間の会話の内容から

DL : 一番奥の席、かつ小声……更に久永の声が大きいこともあって、聞き耳を立てるも二人の会話内容とはとぎれとぎれにしか聞こえない。

巨海 真名子 : 「……は、………ってに。鉦山の方には、誰も……ようにお願いします」

草間 : 「は。閉鎖し……言え、危険ですので。皆様にも……く、伝えております」

巨海 真名子 : 「よかった。下手に近づい……ないもの」

DL : ……かろうじて聞こえたのはこれくらいですね。

小波 絵本 : (了解です！)

熊埜御堂 亜聡 : 「…おい親父。声でけえぞ。」 向かいの席に

熊埜御堂 久永 : 「おお、すまんすまん。酒が入るとついな～」

熊埜御堂 亜聡 : 「どんだけ飲んだんだよ。いや飲まなくても声でけえけど」

熊埜御堂 久永 : 「いやいつもよりちょっと多いだけだから…母さんには怒られない範囲だから…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ならそれ以上飲んだら怒られるゾーンってことじゃねーか。…白戸さん？も、別に親父に無理に合わせなくていいすからね」

白戸 : 「い、いやあ…べ、別に困ってなんてないですよ、本当に…はは」

熊埜御堂 明香 : 「だ、だめですよ！ そういう事言うとパパ調子に乗っちゃうから…」

熊埜御堂 久永 : 「ひどくね？」

小波 絵本 : 「……………」(無言の肯定) > 明香ちゃん

熊埜御堂 亜聡 : 「それはそうだな。……そーいや親父、俺等が土産屋向かった後、白戸さんと何話してたんだ？」

熊埜御堂 久永 : 「今日飲みたい酒の話」

熊埜御堂 亜聡 : 「おい」

熊埜御堂 久永 : 「パパだって一週間の夏休みを満喫したいんだ、わかってくれよ」

小波 絵本 : 「(もっと他に話す事があるのでは…?)」

熊埜御堂 久永 : 「家に帰ったら母さんと明香が二人して「飲み過ぎ！」って言うだろうしさあ」

白戸 : 「……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香。お前ひとりだからって舐められてるぞ」

熊埜御堂 明香 : 「速やかにママに報告します」

熊埜御堂 久永 : 「待つて待つて待つて、ほんとごめんって」

熊埜御堂 亜聡 : 「どんだけ生臭坊主なんだよ……。…」

熊埜御堂 亜聡 : ちなみに白戸さんのようす？もちう見しますが、特に気になる様子はないです？

DL : そうですね、白戸はどこか苦い顔をしながらお酒をちびちび飲んでいます。

熊埜御堂 亜聡 : 了解です。うーむ、親父に絡まれて迷惑がっているようにしか見えないのがつらい…

熊埜御堂 亜聡 : 念のため白戸さんに<心理>よろしいです？

DL : はい、OK です！

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=8 <心理> (2DM<=8) > [2, 7] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 4 → 5

DL : では亜聡くんは白戸が苦々しい顔をしているのは、久永が絡んでくる意図に気づいているからだと感じますね。

熊埜御堂 亜聡 : 意図

DL : なんか絡まれて困るなあ…じゃなくて、多分この人こういう意図で絡んで来てるんだよな…困るなあ…みたいな…

熊埜御堂 亜聡 : な、なるほど……。じゃあ親父をじとつと睨んで

熊埜御堂 亜聡 : 「何考えてんのか知らねーけど、あんま迷惑かけんなよ」 って言いながら、こっちにも<心理>を…

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=8 <心理> (2DM<=8) > [5, 4] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 5 → 6

DL : では、亜聡くんは久永が自分達と白戸をあまり関わらせたくないのだろうな、と感じますね

熊埜御堂 亜聡 : 親父~~~~~???

熊埜御堂 亜聡 : じゃあもう、親父もなんかやってんな…と思いつつ、その意図を汲んで、明香ちゃんと先輩引き連れておばあちゃんの方行ってみようかな…

熊埜御堂 久永：「ん、どっか行くのか？」

熊埜御堂 亜聡：「ん。そーいや先輩を例のばあさ…真名子さんに紹介できてなかったなって」

熊埜御堂 亜聡：「一応ここにいるからには挨拶とか気にするかと。」

小波 絵本：「……わかった、そういう事なら行く」席を立ちます

熊埜御堂 亜聡：「ん。明香も行くぞ」

熊埜御堂 明香：「えっ、あ、うん」

熊埜御堂 久永：「ああ、なるほどな。まあ気を付けて行ってこいよ。……亜聡ー」

熊埜御堂 亜聡：「ん？」

熊埜御堂 久永：「俺は、いつでもお前らの味方だからな。忘れんなよ」

熊埜御堂 亜聡：「…は？ なんだよ急に。」

熊埜御堂 亜聡：「食中毒か？」

熊埜御堂 久永：「せめて酔ってるか？ くらいに留めようぜ」

熊埜御堂 亜聡：「ああ悪い、そうだな。突拍子がねーのはいつものことだった。」

熊埜御堂 久永：「失敬だな！ 俺の息子の癖に！」

熊埜御堂 亜聡：「はいはい」

熊埜御堂 亜聡：そのままスルーして真名子さんたちの席へ

小波 絵本：同じく真名子さんの所に行きます

熊埜御堂 明香：では明香もてこてこついて行きますね

DL：ではあなた達が連れ立って真名子の元に近寄ると、それに気づいた草間がスッと一歩下がり、「どうぞ」と近寄るように促してくれる。

巨海 真名子：真名子の草間の仕草であなた達の存在に気づき、やわらかな笑みを浮かべて出迎えてくれる。

熊埜御堂 亜聡：「ん。…話の邪魔したすかね」

巨海 真名子：「あら……。いいえ、そんなことはないわ」

巨海 真名子：「話しかけに来てくれたのよね、嬉しいわ。今日のお食事はどうかしら、美味しい？」

熊埜御堂 明香：「は、はい！ どれもとっても美味しいです！」

熊埜御堂 亜聡：「ん…まあ」

巨海 真名子：「うふふ、そう。よかったわ」

熊埜御堂 亜聡：「…。そういえば一緒に来た先輩のこと、紹介してなかったなって思ったんで」

熊埜御堂 亜聡：「この人、一緒に来たんすけどうちの学校の部活の先輩。」

小波 絵本：「……初めまして、小波絵本と言います」（ペこり）

巨海 真名子：「まあ、そうなの。草間から聞いてはいたけど対面するのははじめてね」

巨海 真名子：「巨海 真名子と申します。いつも二人がお世話になって…」深々

小波 絵本：「いえ、こちらこそ僕の分の宿泊先や食事まで面倒見て下さってありがとうございます」

巨海 真名子：「ふふ、せっかくのお客様ですもの。どうせなら良い思い出を作って帰っていただきたいですから」

巨海 真名子：「だから気になさなくていいのよ、是非この島を楽しんで行ってちょうだいね」

小波 絵本：「はい、ありがとうございます」

熊埜御堂 明香：「(ほっ)、……よかったですね、先輩！」

熊埜御堂 亜聡：「楽しんで…、…昼間は先輩と一緒にちょっと島ん中見て回ってきたすけど、やっぱ海は綺麗だったすね」

巨海 真名子：「まあ、海に行ったのね。私も海は好きよ、あそこから見の夕暮れはとても綺麗で…あなた達が気に入ってくれたならよいのだけど」

熊埜御堂 明香：「わあ…きっと綺麗なんだろうね、今日は晚餐会があるからって早く帰ってきちゃったけど…明日は見られるかなあ」

熊埜御堂 亜聡：「明日は朝から海の予定だったか…、…まあ夕方も行けばいいだけだしな」

熊埜御堂 亜聡：「雨とか降らなけりゃ見られんだろ」

熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃんがそう言うと降る気がする…」

熊埜御堂 亜聡：「おい」

小波 絵本：「まあ1週間もあれば1日くらいは晴れるんじゃないか？」

熊埜御堂 明香：「で、ですね！」

熊埜御堂 亜聡：「まるで俺のせいで「1週間の内1日しか晴れねえ」みてーになってるじゃねえか」

熊埜御堂 明香：「だってお兄ちゃんがらしくない行動すると降るような気がする…」

小波 絵本：「それこそ日頃の行いのせいだろう」

熊埜御堂 亜聡：「日頃の行い次第で雨になるなら年中梅雨だわ」

熊埜御堂 亜聡：「まあ雨降ったら資料館か…あとはまた土産屋でも行って宝石見てれば時間潰れるだろ」

巨海 真名子：「そうね、資料館やお土産屋さんもきっと楽しいわ」

巨海 真名子：「小さな島だけど…素敵なおところはたくさんあるから、是非この島を好きになって欲しいと思うから…色んなところに行ってみてね」

熊埜御堂 亜聡：「…でも鉱山跡には行くなって話だろ？」

巨海 真名子：「ああ、聞いていたのね…ええ、ごめんなさい。あそこはとても危険だから…」

熊埜御堂 亜聡：「『危険ですのであまり近寄らないよう』って、最初にその人から聞いたからな」 草間さん

草間：「……」(ぺこり)

巨海 真名子：「でも伝えるように強く言っていたのは私だもの」

小波 絵本：「まあ僕達には鉱山に行くような理由なんてないのでまず行かないでしょうね」

熊埜御堂 亜聡：「でも昔は鉱石が取れたって話すよね。いつから立ち入り禁止なんすか、あの山」

巨海 真名子：「そうね、大体……20年前くらいからかしら」

巨海 真名子：「と言っても、全面的に禁止になったのは16年前くらいから。それまでは許可さえ出れば立ち入ること自体はできたのよ」

熊埜御堂 亜聡：「ふーん…？ 宝石のとれるような山なら、なんかいい感じに整備して、観光地にでもすればいいのって思ってたんすけど」

熊埜御堂 亜聡：「なんかあったんすか？」

巨海 真名子：「……そうね、私もそういったことが出来る気力があればよかったのだけど」

巨海 真名子：「……娘が出て行ってしまってから、なんとなく「もういいか」という気持ちになってしまっ…」

熊埜御堂 明香：「あ、」

熊埜御堂 亜聡：「、……。…そうすか」

熊埜御堂 明香：「……ご、ごめんなさい」

巨海 真名子：「いいえ、こちらこそごめんなさい。せっかく話しかけてくれたのに楽しいお話が出来なくて…」

巨海 真名子：「でも、いいの。…今日という日、あなた達に出会えたから。私も元気出てきたわ」

巨海 真名子：「落ち着いたら、また色々と考えてみようかしら。……ふふ、応援してくれたら嬉しいわ」

熊埜御堂 亜聡：「……そうすね。いいと思います」

熊埜御堂 亜聡：「……そういや、宝石といえば、この島でしか取れない宝石…？ だかなんかを、今日土産屋でも見たっすね。」

巨海 真名子：「ああ、ルサルカナイトのことね。これと同じものだわ」 そう言って真名子は首元の宝石を指さします。

巨海 真名子：「もう新しいものは出ないのが残念だけど…、それでも綺麗でしょう？」

熊埜御堂 明香：「はい、とっても」

熊埜御堂 亜聡：「ん。俺は宝石には詳しくねえけど、うちの先輩が知ってるぐらいだから相当貴重なんだろうなって」

小波 絵本：「……僕の知り合いも、「綺麗だ」と言っていました。雑誌に載っていた写真ではありますが…」

巨海 真名子：「ふふ、有名なのね。何だか自分のことみたいに嬉しいわ」

巨海 真名子：「私はこの宝石と一緒に育ってきたみたいなのところがあるから……鉱石が出て来なくなった時は、本当に悲しかったもの」

熊埜御堂 亜聡：「宝石が出てこなくなるって、なんかきっかけとかあるんすか？ そういうもんなのかもしれねえけど。」

巨海 真名子：「さあ……恐らく、単純に「枯れた」だけなのだとは思っただけど…」

熊埜御堂 明香：「そんなものなのかなあ…」

熊埜御堂 亜聡：「そういうもんなんだな…」

熊埜御堂 亜聡：宝石詳しくない亜聡は、ここまでの話で真名子さんに＜心理＞を振りたいです…

DL：はい、どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：…そろそろ失敗する気がするのでクリチケ使用してもいいですか！

DL：www どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] クリチケ：5 → 4

熊埜御堂 亜聡：3DM<=8〈心理〉(3DM<=8) > [6, 9, 3] > 2 > 成功数2 ダブル！

DL：還元祭

熊埜御堂 亜聡：んなこたなかった！

小波 絵本：即時リターン

system：[熊埜御堂 亜聡] クリチケ：4 → 5

DL：そうですね…では亜聡くんは真名子が言った「枯れた」という意味が、従来のものとは違うような気がしました。

熊埜御堂 亜聡：…おお…？

熊埜御堂 亜聡：「…ちなみに宝石が「枯れる」ってどういう状況なんすか？」 無知の特権で聞いてみる

巨海 真名子：「そうね、鉱石が出て来なくなる…作られなくなる、というのかしら？」

熊埜御堂 亜聡：「作られなくなる？」

巨海 真名子：「ええ、簡単に言うとり過ぎて…作られる土壌が保てなくなるというか」

巨海 真名子：「そうでなくても、掘り進めすぎれば相応の危険もあるわ。地盤沈下や地滑りとか…人の手の届く範囲を取り尽くしてしまえば、その更に奥に鉱物があっても……命を落としてしまうかもでしょう？」

小波 絵本：ちなみにですが…、今の真名子さんの話を聞いて自分の知ってる宝石の知識と違ってる点はないか、＜知識＞などで判定できますか？

DL：できますよ、どうぞ！

小波 絵本：はい！

小波 絵本：あ、こちらもクリケ使ってもいいですか？

DL：いいですよ、どうぞ！

system：[小波 絵本] クリケ：2 → 1

小波 絵本：2DM≤5（*知識）(2DM≤5) > [5, 6] > 1 > 成功数 1 成功！

小波 絵本：ほっ…

DL：では、真名子がかみ砕いて話した内容と自分の知識に特に差異はないようです。

小波 絵本：了解です！

巨海 真名子：「参考になったかしら？」

熊埜御堂 亜聡：「ん。勉強になりました。」 素直

巨海 真名子：「よかった」

巨海 真名子：「ふふ、かわいい孫にいいところ見せられたかしら？」

熊埜御堂 亜聡：「……」 や、優しい…むずがゆい…

熊埜御堂 明香：「は、はい！ かつこよかったです！」

小波 絵本：「……件の知り合いが聞いたら多分 尊敬の眼差しで見つめてきていたと思います」

巨海 真名子：「まあ、ありがとう。…なんだか年甲斐もなくはしゃいじやって、ごめんなさいね」

熊埜御堂 亜聡：「い、いや別に。……そ、そういう知識も土産屋で聞いとけばよかったっすね。あの店員の人の宝石の加工してたって言ってたから、詳しくだったし。」 好意がむずがゆくて話題そらし

巨海 真名子：「店員さん？ ……お土産屋さんの、かしら？」

熊埜御堂 亜聡：「ん。あの気だるそうな人」

巨海 真名子：「ええと……草間、あなた確か親しくなかったかしら？」

草間：「ええ、まあ。多少交流のある程度では御座いますが」

草間：「……彼が何か？」

熊埜御堂 亜聡：「え、意外。……じゃねえや」

熊埜御堂 亜聡：「土産屋行ったとき、いろいろ世話に…世話に？ なったんで。」

草間：「そうですか」

草間：「あまり愛想の良い…とは言えない人物ですが、皆様を邪見にはしない程度の良識は御座いますのでお気になさるめよう」

熊埜御堂 明香：「は、はぁ…」

熊埜御堂 亜聡：「（邪見にはしない…？）」「帰って言われた顔

草間：「……何か？」

小波 絵本：「そう言えば…、あの店主が資料館の展示品である刀の手入れをしていたのですが…、そういう事を学芸員でもない人がやるのは珍しいですね。本人は宝石が専門だとは言っていましたが」

草間：「……彼は元は大学で研究員をやっていたらしいので、そういった技術を持っている可能性もあります」

熊埜御堂 亜聡：「研究員」

草間：「ええ、詳しく話を聞いたことはないのですが」

熊埜御堂 亜聡：「ふうん…。…大学って、島の外の大学っすか？」

草間：「ここに大学やそれに準ずる施設は御座いませんので」

熊埜御堂 亜聡：「すよね。そう見たんで。……」

草間：「何か気になることが御座いますでしょうか」

熊埜御堂 亜聡：「……。いや……」

熊埜御堂 亜聡：「……土産屋で顔合わせた時、…「水野」、って言われた気がして」

草間：「水野？」

熊埜御堂 亜聡：「…、いや。気のせいだと思うけど。」

熊埜御堂 亜聡：一応、＜心理＞振れます…？草間さんに

DL：どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：2DM≤8〈心理〉(2DM≤8)＞[6, 10]＞0＞成功数0 失敗！

熊埜御堂 亜聡：ここでかい！！

DL：では草間があまりにも能面すぎて何も分かりませんでした！

小波 絵本：DL様、今度は小波が草間さんに＜心理＞してもいいでしょうか？

DL：もちろんです、どうぞ！

小波 絵本：ありがとうございます！あ、今回もクリケ使用で！

DL：はい、どうぞ！

system：[小波 絵本] クリケ：1→0

小波 絵本：2DM≤6〈心理〉(2DM≤6)＞[6, 9]＞1＞成功数1 成功！

小波 絵本：よしよし

熊埜御堂 亜聡：ひゅー先輩――！

DL：お見事！

DL：では小波先輩は亜聡くんが一連の出来事を草間に伝えた時、…草間がわずかに動揺し、…それからかすかに怒りをにじませたことに気づけます。

小波 絵本：「……」

草間 : 「……私も恐らくは気のせいだと思います」

熊埜御堂 亜聡 : 「すよね」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあやっぱ『水飲んでえ』だったんだな」

熊埜御堂 明香 : 「…それはやっぱり苦しいような…」

小波 絵本 : 「……そういう事にしておけ」＜明香ちゃん

熊埜御堂 明香 : 「は、はい…」

熊埜御堂 亜聡 : 「まあ土産は普通に買えまし。…ああ、長々居座ってすみません」

熊埜御堂 亜聡 : 「そろそろ親父が酔っぱらって収集つかなくなってる頃なんで、俺等はこれで」

巨海 真名子 : 「いいえ、いいのよ。また気軽に話しかけてきてちょうだいね」

草間 : 「……」 すっとお辞儀して見送り

小波 絵本 : 「……お邪魔しました」

熊埜御堂 亜聡 : ではそのまま一旦自席に戻っていく感じで…

小波 絵本 : あ、では戻る途中でこそっと亜聡君に話しかけたいです

熊埜御堂 亜聡 : 「……あの草間って人、何考えてんのかよくわかんねえな…」 ぶつぶつ言ってる

小波 絵本 : 「……亜聡」できる限り小声で話しかけます

熊埜御堂 亜聡 : 「ん？」

小波 絵本 : 「……草間さんの前で「水野」の名前は口にしない方がいいかもしれない」

小波 絵本 : 「何があったかは知らないが…草間さんはその名前にあまり良い印象が無いようだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「、…そう、なんすか。……」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ん。わかった。」 こくり

熊埜御堂 明香 : 「？ お兄ちゃん？ 先輩？」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん。なんでもねえ」

熊埜御堂 明香 : 「えー、……ほんと？」

小波 絵本 : 「ああ、亜聡のズボンのチャックが開いてる、と言っていたけど」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩」

熊埜御堂 明香 : 「ちょっとだらしないよお兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺の尊厳」

熊埜御堂 明香 : 「あの部屋の時点であると思ってる？」

熊埜御堂 亜聡 : 「部屋とチャックは違うだろ」

熊埜御堂 明香 : 「だらしなさの象徴としては同じ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「くっそ…先輩いつか絶対チャック開いてるの指摘してやるからな…」

小波 絵本 : 「やれるものならやってみろ」(ふっ…) ＜亜聡君

熊埜御堂 明香 : 「もー……とりあえず今は黙るけど」

熊埜御堂 明香 : 「話してよくなったら、話してね」

熊埜御堂 亜聡 : 「油断していると痛い目見るぞ。……おー」 明香ちゃんの頭ぼん

熊埜御堂 明香 : 「……(む)」

DL : さて、次はどうしましょうか？ 晩餐会を切り上げて部屋に戻る、別の行動をするも可とします

熊埜御堂 亜聡：先輩誰か話したい相手います…？

小波 絵本：特にいないですねえ…

熊埜御堂 亜聡：亜聡としても気になるのは親父とおばあちゃんくらいだから…。明日も早いし、部屋に戻ります？

小波 絵本：戻りますか～

熊埜御堂 亜聡：そうですね！

熊埜御堂 亜聡：じゃあ親父に一声かけて部屋に戻る方向でいいかな…。あ、帰り際に爽太君にだけ声掛けていいですか？

DL：あ、いいですよ。では部屋の隅でふわ～あ、とこっそり大きなあくびをしている爽太を見つけることができます

爽太：「(ふわあ…)」

熊埜御堂 亜聡：「爽太」

小波 絵本：「……大丈夫か？」

爽太：「へっ、……あっ、わあ！？」

爽太：「ご、ごごごごめんなさい！ ちょっと疲れちゃって…」

熊埜御堂 亜聡：「慌てすぎだろ。…明日、何か持って行くもんあるか？」 持ち物の確認。

爽太：「あ、こっちで準備するからだいじょうぶです！ ライフジャケットとか帽子とか釣り竿とか……あ、でも濡れてもいい恰好の方がいいかも」

爽太：「…えへへ、本当に来てくれるんですね！ 嬉しいな」

熊埜御堂 亜聡：「ん。明香が起こすからな」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん」

小波 絵本：あ、じゃあ亜聡君が爽太君と喋ってる間にこっそり草間さんに話しかけに行ってもいいですか？

DL：あ、いいですよ！

小波 絵本：（きょろきょろ）「……すみません、草間さん」（小声）

草間：「はい、何かご用でしょうか」

小波 絵本：「爽太が大分 疲れているみたいなので、上手い事言って休ませてやった方がいいかもしれません」

草間：「ああ、……そうですね」

草間：「ありがとうございます、あとでこちらから言うておきましょう」

小波 絵本：「はい、ありがとうございます」（ぺこり）

草間：「いえ、こちらこそ。あの子を気にかけてくださって」

小波 絵本：「……ついでにもう1つ、お聞きしても良いでしょうか？」

草間：「何で御座いましょう」

小波 絵本：「……草間さんは、水野家の事について何かご存知なのですか？」

草間：「……………」

草間：「亜聡様と明香様の旧姓、という事以上のことは何も」

小波 絵本：「……そうですか。すみません、草間さんがその名前を気に掛けているように見えたのでつい聞いてしまいました」

草間：「そうですか」

小波 絵本 : ...一応<心理>いいですか？

DL : どうぞ！

小波 絵本 : 1DM<=6<心理>(1DM<=6) > [9] > 0 > 成功数 0 失敗!

DL : なんにも…わからない…

小波 絵本 : んん

小波 絵本 : では一礼して亜聡君達の方に向かいます

熊埜御堂 亜聡 : 爽太君と明香ちゃんとおもしろ T シャツについて話してるところに合流してもらいつつ。

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩？」 なんかあったのか？って顔

小波 絵本 : 「いや、何でもない。ただ資料館の営業時間をど忘れしてから聞きに行ってただけだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ、なるほど」

熊埜御堂 明香 : 「先輩がそんなお兄ちゃんみたいなことを…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩だって忘れるぐらいあるだろ、なんでも俺にしてくんな」

熊埜御堂 明香 : 「じゃあお兄ちゃんお土産屋さんの営業時間覚えてる？」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。よし、そろそろ部屋に戻って寝るか」

熊埜御堂 明香 : 「お兄ちゃん！」

DL : では、あなたが割り当てられた部屋に戻ろうとしたその時、酒の匂いをさせた久永がぬっとあらわれますね

熊埜御堂 久永 : 「お、なんだあ。もう部屋に戻るのか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「うわ酒くせ」

熊埜御堂 久永 : 「ははは、さすがに飲み過ぎたわ」

熊埜御堂 亜聡 : 「だろうな。親父も俺等と一緒に戻った方がいいんじゃないのか」

熊埜御堂 明香 : 「もー、ママに絶対怒られるくらい飲んだでしょ！」

熊埜御堂 久永 : 「まあまあ、旅行なんだしこれくらいは……ああ、そうだなあ」

熊埜御堂 久永 : 「……いや、もうちょっと居るわ」

熊埜御堂 亜聡 : 「…そーかよ。別に止めねえけど。」

小波 絵本 : ちなみにですが、白戸さんはどうしてますか？

DL : 椅子に座ってちびちび飲んでますね

小波 絵本 : では白戸さんに話しかけに行きます

小波 絵本 : 「……白戸さん」

白戸 : 「、……あ、ああ。どうか、しましたか？」

小波 絵本 : 「……すみません、宿泊棟がどっちだったか忘れてしまいました。ご迷惑でなければ一緒に部屋に戻って頂けませんか…？」

白戸 : 「ああ、なるほど。ええ、構いません、よ」

小波 絵本 : 「すみません、ありがとうございます」(ぺこり)

白戸 : 「いえいえ、気になさらず…」

白戸 : 「私も、そろそろ戻ろうかと思っていた、ところだったので…助かります」

小波 絵本 : では白戸さんと一緒に退室します

DL : では白戸は小波先輩と一緒に退室しますね

熊埜御堂 亜聡 : 「……。白戸さん困ってたんじゃないのか、親父。」 それを見送りながら、親父殿に話しかける感じで

熊埜御堂 久永 : 「ああ、だろうな」

熊埜御堂 明香 : 「…あんまり困らせるのはダメだよ、パパ」

熊埜御堂 亜聡 : 「どういつもりであんなウザ絡みしてたんだ。…あの人、俺等になんか用でもあるのか？」

熊埜御堂 久永 : 「なんだ、気付いてたのか」

熊埜御堂 亜聡 : 「そりゃ気付くだろう。何年一緒にいると思ってんだ」

熊埜御堂 久永 : 「はは、まあそりゃそうだ。……なあ亜聡」

熊埜御堂 久永 : 「おまえ、ちゃんと家に帰る気はあるか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「……それはどういう質問だ？」 怪訝な顔

熊埜御堂 久永 : 「なに、深く考えなくていい。そのままの意味だ」

熊埜御堂 久永 : 「熊埜御堂の家に、帰る気はあるか？ って話だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。あんな」

熊埜御堂 亜聡 : 「何がどうなるうが、俺も明香も、今は"熊埜御堂"だぞ」

熊埜御堂 亜聡 : 「その時点で、実家はそこだろうが」

熊埜御堂 久永 : 「そうか」

熊埜御堂 久永 : 「だが、それを聞き入れてくれる優しい大人ばっかじゃないんだぜ」

熊埜御堂 亜聡 : 「…は？ 何のことだ」

熊埜御堂 久永 : 「……白戸さんは、お前らを巨海家に帰そうとしてる」

熊埜御堂 久永 : 「って言ったらおまえ、信じるか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「………そうなのか」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、信じねー道理はねえけど」

熊埜御堂 久永 : 「まあおまえはそういうやつだよ。明香なんかほれ、鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしてるぜ」

熊埜御堂 明香 : 「………」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん？ (くるっ) ……うわ、マジだ。おい明香、戻ってこい」 額べしっ

熊埜御堂 明香 : 「びゃっ、……お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「おかえり。…明香はどうする？ もし親父の言う通りなら。」

熊埜御堂 明香 : 「う、………」

熊埜御堂 明香 : 「……わかんない」

熊埜御堂 明香 : 「だって今日会ったばかりだし、……でもおばあちゃんは、…優しいし」

熊埜御堂 明香 : 「それに、そんな……また苗字変えるかも、なんて一切考えてなかったのに」

熊埜御堂 亜聡 : 「、……」 ちょっと目を丸く

熊埜御堂 久永：「ま、明香もそういう奴だわな」

熊埜御堂 亜聡：「……そうか。まあ、そうだな。明香はそういう奴だ」

熊埜御堂 亜聡：「…じゃあ親父。さっきの、やっぱ保留ってことで。」

熊埜御堂 久永：「おう」

熊埜御堂 久永：「……ただまあ、俺だってお前らをここまで育て上げたって自負がある。何よりお前らを我が子として愛してるからな」

熊埜御堂 久永：「俺のいない場所で白戸さんがお前らに何か吹き込もう、ってのは許せねえんだ」

熊埜御堂 久永：「だからまああやってたな、別に俺がいる場で正々堂々話してくれる分には許そうかと思ってたんだが全然そうしねえしよ」

熊埜御堂 久永：「ま、答えを出すのはお前らだからな。大人の事情は大人に任せとけ、今はとりあえず一週間の旅行を心行くまで楽しむんだな！」

熊埜御堂 亜聡：「…。おー」

DL：がっはっは、と豪快に笑い久永は亜聡くんの背中をバシバシと叩く。

熊埜御堂 亜聡：「いって！！」

熊埜御堂 亜聡：「……おい親父、そういうことだぞ！」 キッ

熊埜御堂 久永：「おー、すまんすまん。酒入ってるせいで力加減がな」

熊埜御堂 明香：「…やっぱママに報告するー」

熊埜御堂 亜聡：「頼んだ」

熊埜御堂 久永：「おっと、待ってくれ明香。それだけは、な？ な？」

熊埜御堂 明香：「聞きます！ お姉ちゃんにも言いつけてやる！」

熊埜御堂 亜聡：「そうしようぜ」

熊埜御堂 久永：「あれ～～～～、おかしいなパパめっちゃいい事言ったはずなんだけども～～～～」

DL：そんな風に軽口を叩きつつ、あなた達双子もそろそろ部屋へと戻る頃になるだろう。

DL：…………

DL：ではそのまま小波先輩と白戸との会話シーンになります

DL：結構な量の酒を飲んでいたようですが、白戸の足取りは思ったよりもしっかりしています。

小波 絵本：「……お酒、強いんですね。結構飲んでるように見えたのに…」

白戸：「は、はは…まあ、付き合いで飲むことも多いので…」

白戸：「ただ、体にはあまり良くないことは確かなので…控えようとは思ってるんですけどね…」

小波 絵本：「……それは久永さんの方が控えるべきでは」

白戸：「あ、ああいえ。熊埜御堂さんとはね、初めて飲みましたから」

小波 絵本：「あ、いえ。酒量を控えるべきなのは久永さんの方だという意味でした。すみません」

白戸：「あ、ああ……すみません、話を読み取るのが苦手です…ええ、はい」

小波 絵本 : 「僕もそうなので気にしないで下さい。……今までは、間に入ってくれる人が居たから何とか頑張っていましたが…」

白戸 : 「おや、ご友人…ですか、ね？」

小波 絵本 : 「はい。……今は側にいませんが…、とても大切な人、です。」

白戸 : 「そうですか…」

白戸 : 「……いえ、私はですね……大切な人や家族、ってのは…やっぱり、傍にいてこそだと思ってまして」

白戸 : 「君にこんなことを言うのもアレですが…だからこそ、熊埜御堂さんにもわかっていただきたい、とは思っているんです…」

小波 絵本 : 「……僕も、」

小波 絵本 : 「僕も…、少し前まではそう思っていました。その人を失いたくなくて、必死に繋ぎとめようとして……でも…」

小波 絵本 : 「…その人に叱られました。「自分の為に妙な事をしてほしくない」と」

小波 絵本 : 「結果 その人は僕の傍から去って行きました。でも…、今はそれが正しかったのかもしれない、とあの双子のおかげで思えるようになりました」

小波 絵本 : 「……大切な人は、傍に居なくても自分の中にかげがえのないものを残してくれる。だから常に傍に居るようなものだと思います」

白戸 : 「……そうですか」

白戸 : 「でもね、私は……そうやって受け入れることのできないくらいに、幼い子達の相手をしているんですよ」

白戸 : 「お父さんはどこ、お母さんは、お家に帰りたい。……そういうのを聞いているとね、本当、参ってしまっ

て」
白戸 : 「もちろん新しい家族に迎えられて幸福になる子だっています、でもそうしたらその子のいなくなった方の家族はどこへ行ってしまうのでしょうか」

白戸 : 「……今回の亜聡さんと明香さんのケースは、本当に貴重です。分かつた縁を再び繋ぐことができたのだから」

白戸 : 「だからこそ、私は…」

小波 絵本 : 今までの白戸さんに話に対して〈心理〉出来ますか？

DL : もちろんです、どうぞ！

小波 絵本 : 1DM<=6〈心理〉(1DM<=6) > [2] > 1 > 成功数 1 成功！

DL : えらい

小波 絵本 : 良かった…

DL : ではそうですね、小波先輩は今の白戸の話にどこか白々しいというか……うわべだけの雰囲気を感じ取りました

小波 絵本 : 「……白戸さん」

白戸 : 「はい、なんでしょう？」

小波 絵本 : 「……確かに日頃 そのような子ども達の相手をしていたら、今回のようなケースで必死になるのも理解できます。しかし…」

小波 絵本 : 「……明香も亜聡も、もう子どもではありません。自分達が誰の傍に居たいのか、自分の意志で選べる程 大人になっている。」

小波 絵本 : 「久永さんは少なくともそう思っているからこそ、ここに付いて来ているのだと思います」

白戸 : 「……そうですね」

白戸 : 「でも、やはり、優先されるべきは亜聡さんと明香さんの意思ですから」

白戸 : 「二人の意思が固まったなら、……部外者は口を出せない、でしょうからね」

小波 絵本 : 「……そうですね。僕もあの 2 人の事に口出しできるような立場ではないと思っています。……ただ…」

小波 絵本 : 「……先輩からあの双子の事を任されているので、最後まで責任もって面倒を見るつもりではありません」

白戸 : 「……そうですか。でもね」

白戸 : 「君も学生でしょう、…あまり無理に大人に歯向かうもんじゃありません。これは、アドバイスのようなものですが…」

白戸 : 「知らない方が良い事も、世の中にはたくさんあるものですから」

小波 絵本 : 「……そうですね。それは身に覚えがあります」(オトギバラシのあれそれを思い出しながら)

白戸 : 「なら、よかったです。…おっと、話過ぎましたね…私はあの、そろそろ戻ります。おやすみなさい」

小波 絵本 : 「こちらこそ長話をしてしまってすみませんでした。…おやすみなさい」

DL : では白戸は会釈するとそのまま自分が宿泊する棟へ帰っていきますね。

小波 絵本 : 「(……やけに突っかかってきたな…)」では自分もそのまま自室に戻ります

DL : はーい、双子と合流はせず…で大丈夫ですかね

小波 絵本 : では、自室に戻って亜聡君にニヤイン送ります！

DL : はーい、無事に送れました！

熊埜御堂 亜聡 : その頃には割り当てられた部屋にいそうなので、ドロシーちゃんと喋ってる途中に通知が来て「…んあ？」ってなる感じで…

熊埜御堂 亜聡 : 「…」言われた通り部屋を出て、先輩に合流しますかね…！

小波 絵本 : ではなるべく人目に付かなさそうな場所に移動します

DL : 中ですか？ 外ですか？

小波 絵本 : ……誰もいなさそうだし海岸にでも行きます？

熊埜御堂 亜聡 : 海岸…！（エモい）移動できそうならそうしますか！

DL : あ、敷地外に出るなら使用人さんにその事を伝えることになりそうですけどよろしいです？

熊埜御堂 亜聡 : 自分は別に OK ですよ！男二人出かけた噂が立ちそうなのが嫌なら、どちらかの部屋でも可

小波 絵本 : ……昼間 海岸に忘れ物したとか言って出ます？（無理そうなら屋内で…）

熊埜御堂 亜聡 : 最悪何かの理由で後ろから付いてこられたとしても、聞き耳振りましょっか…

小波 絵本 : そうしましょうか…巨海家と白戸さんが繋がったら会話聞かれちゃバそうだし…

熊埜御堂 亜聡 : 了解です！ではそうだな…爽太くんに一言断ってから、外へ。

DL : 爽太はさすがにもう寝てるかな…モブ使用人さんに伝えれば「暗いのでお気をつけて」と言ってくれて見送ってくれますね

DL : では二人は夜の海岸へ

………

夜の海岸

熊埜御堂 亜聡 : 「暗。先輩、夜の散歩とかするタイプすか」

小波 絵本 : 「……怪異じゃあるまいしそんな趣味がある訳無いだろう。今からする話は巨海家の人間に聞かれたらまずいかもしれないから誰もいない場所に来ただけだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「その理屈だとたまに俺もコンビニに向かう怪異になるんすけど。……ん？何の話だ？」

小波 絵本 : 「……さっき白戸さんと2人だけで話をしていたんだが…。あの人の言う事はハッキリ言って信用できない」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ん？」

小波 絵本 : 「口ではお前たちの事を想っているような事を言っていたが、うわべだけのように感じた。……本当は、他に目的があってお前達を巨海家に帰そうとしているのかもしれない」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「……そうかよ。さっき、うちの親父も、あの人が俺等を巨海家に帰そうとしてるって話をしてきたところだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ただ、先輩が見るにそれは善意ではねーってことか」

小波 絵本 : 「ああ、そう思って良いだろうな」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうかよ。……チッ、めんどくせーな。俺らの問題にさせてくれねーのか周りは」

熊埜御堂 亜聡 : 「…俺はな。今さら血のつながった家が出てきたからって、二度も苗字を変えるようなことになるなら、めんどくせーから勘弁だって思ったんだよ。…せっかく今の苗字で落ち着いたのに」

熊埜御堂 亜聡 : 「ただ、明香は。……明香は、俺よりはいろいろ、考えることがあるみたいで」

小波 絵本 : 「……人の良い奴は難儀だな」

熊埜御堂 亜聡 : 「切って捨てるか、割り切っちゃえば楽なものにな。あいつはそういうのは…嫌がる」

熊埜御堂 亜聡 : 「明日以降も俺等2人とも、何言われるか分かんねーけど、それ全部ひっくるめてちゃんと考えて答えを出そうとするだろうな。……、……その時は」

熊埜御堂 亜聡 : 「その時は、俺は明香の行きたい方に行く。」

小波 絵本 : 「……そうか」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ。俺はあいつを、二度と一人にする気はない」

熊埜御堂 亜聡 : 「今度こそ、どこに行こうが付いてく。……それだけだ、今のところは」

小波 絵本 : 「……………もう一つ、言っておく事がある」

熊埜御堂 亜聡 : 「…？」

小波 絵本 : 「今回僕がここに来たのは先輩に連絡を貰ったからだが…、僕個人としてはお前達 兄妹には借りがある」

熊埜御堂 亜聡 : 「借り？」

小波 絵本 : 「……雀との事だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……ああ。あれ、「借り」ってことになってんすか」

小波 絵本 : 「…僕自身としてはまだまだ未練はあるが、少なくとも雀は納得して逝ったからな…。その点に関しては感謝している」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。…そうすか」

小波 絵本 : 「……だから協力してやる。お前達が自分の意志で誰の傍に居るかを選べるように」

熊埜御堂 亜聡 : 「！、…」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。…そういうことなら、…ありがたいですね。俺らは…俺は。」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあ早速一つ、先に頼んどいていいですか」

小波 絵本 : 「…なんだ？」

熊埜御堂 亜聡 : (小波先輩の方に体ごと向きを変える)

熊埜御堂 亜聡 : 「…最悪、俺のことはいいから。明香を傷つける奴がいたら守ってやってほしい。…あいつはあいつなりに強いけど、それでも何かあった時には、俺よりもちゃんと傷つく奴だから」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩に「借り」があるなら、それ全部使っていい。だからあいつのことをまずは頼みます」

小波 絵本 : 「……いや、駄目だな」

熊埜御堂 亜聡 : 「は？」

小波 絵本 : 「例え明香が無事だったとしても、お前が無事じゃなかったら明香も寿限無先輩も悲しむ。…だから、」

小波 絵本 : 「守るのはお前も含めて、だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。……はつ。…強え人だな、あんた本当。」

小波 絵本 : 「実際に戦った身としては頼もしいんじゃないのか？」(ふ…)

熊埜御堂 亜聡 : 「あのよく分かんねえ刀はもうねーみてえだけど。…ま、頼りにしてます」

熊埜御堂 亜聡 : 「先輩のいいところ見たら、明香と一緒にちゃんと雀先輩にも報告しとくんで」

小波 絵本 : 「なら僕はお前のいい所を見たら織畑にでも報告しようか」(ふ…)

熊埜御堂 亜聡 : 「あー、あいつなら馬鹿正直に褒めそうだな確かに。じゃあそれをお願いします」

小波 絵本 : 「…冗談はこのくらいにして話を戻すぞ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん？ああ。まだ何かあったか？」

小波 絵本 : 「白戸さんが何を考えているのか、それが気にならないか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「あー…。そりゃあ、気になるか気にならねーかで言えば、すげー気になるっすね」

小波 絵本 : 「多分 直球で聞いても話してはくれないだろうし、誰か巨海家の事情を知っていそうな人に話を聞きたいものだな…」

DL : では、そうやって海岸で話し込んでいると「……なにやってんだ、こんな時間に」と後ろから声をかけられますね。

熊埜御堂 亜聡 : 「、……ん？」 くるっと振り返ります

小波 絵本 : 「………！！」(ザッ) 亜聡君を後ろに庇うようにして立ち塞がります

押火 : 「こんばんは、子供がこんな時間までうろつくなよ」 振り返ると、そこにいたのはお土産屋の店員でした

小波 絵本 : 「…ああ、あなたは…土産屋の…」

熊埜御堂 亜聡 : 「、おっさんじゃねーか。あんたこそ何してんだこんなところで」

押火 : 「配達帰りのだよ。まったく、この島の連中ときたらこんな時間にも遠慮なく呼びつけて来やがる」

小波 絵本 : 「ああ、そう言えば営業時間は 0 時まででしたね」

熊埜御堂 亜聡 : 「デリバリーまでやってんのか」

押火 : 「この島に店が俺のどこ以外ないもんでね」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺だったら絶対バイトしたくないすねその店」

押火 : 「募集してねえから安心しろ」

押火 : 「……んで、そちらは何やってたんだ。散歩って雰囲気でもないが」

熊埜御堂 亜聡 : 「……いや、しいて当てはまる言葉を探すなら散歩だな……。…なんて説明すりゃいいんだこれ先輩」

熊埜御堂 亜聡 : 「人生相談？」

押火 : 「……へえ？」

小波 絵本 : 「……正直に言いますと、巨海家を信用して大丈夫なのか？という話をしていました。昼間「帰れ」と言ったあなたはどう思いますか？」

押火 : 「なんだ、覚えてたか。で、もうそこまでたどり着いてると」

熊埜御堂 亜聡 : 「そこ？」

押火 : 「うん、まあ、そうだな。……明日の午後」

押火 : 「店に來い、聞いてほしい話がある」

小波 絵本 : 「…だ、そうだ。行くか？」 亜聡君の方を見ながら

熊埜御堂 亜聡 : 「…。それは、明香も連れてっていいやつか？」

押火 : 「任せる」

熊埜御堂 亜聡 : 「ふーん。じゃあまあ、連れていくか」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん、いいすよ先輩。俺は行く方で。」

小波 絵本 : 「わかった。…これはそもそもお前達の問題だ。決定権はお前と明香にある」

熊埜御堂 亜聡 : 「ま、そりゃそうだ」

押火 : 「決まりだな。……店は閉じとくが、遠慮なく入ってくればいい」

押火 : 「……………」

押火 : 「まあ、俺に出来る範囲のことはするよ。そういう"約束"だしな」

熊埜御堂 亜聡 : 「、……誰との」

押火 : 「じゃ、それも聞きに來い」

熊埜御堂 亜聡 : 「思わせぶりかよ。明日行ったらおっさん死んでるとかやめろよ」

押火 : 「縁起でもないことを言うなよ」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺の読む推理小説だと大体死んでるからおっさんみたいな奴。……はー」

熊埜御堂 亜聡 : 「……『水野』のことは、話す気になったんだろうな？」

押火 : 「……………」

押火 : 「おまえ次第かな」

熊埜御堂 亜聡 : 「どういう意味だよ」

押火 : 「そうやってピリピリされちゃ話せないって事だ」

熊埜御堂 亜聡：「っ、……。……。チッ」 凶星だった>ピリピリしてる
小波 絵本：「……………」(オギバラシでの自分の態度を思い返しつつ)

DL：他に何もなければ押火はこのまま自分の店に帰りますね

熊埜御堂 亜聡：話は以上でいいかな……。……。ああそうだ、ピリピリついでに、普段よりも過敏になってるっていう意味で周囲に<聞き耳>とか振ってもいいですか？自分たち以外に気配が無いか、念のため。

DL：どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！クリチケも1枚使いたいです！

DL：いいですよ！

system：[熊埜御堂 亜聡] クリチケ：5 → 4

熊埜御堂 亜聡：2DM<=5<聞き耳>(2DM<=5)>[4, 2]>2>成功数2 ダブル!

system：[熊埜御堂 亜聡] クリチケ：4 → 5

DL：今のところは周囲に自分達以外はいないようだと分かりますね

熊埜御堂 亜聡：よかった…

熊埜御堂 亜聡：では亜聡は以上ですね！

小波 絵本：小波も以上で大丈夫です！

DL：ではこのまま巨海邸へと戻る、よろしいですかね？

小波 絵本：あ、そうだ

小波 絵本：帰りながら木刀代わりに使えそうな木の枝とか見つけれませんか？

DL：……。<幸運>ですかね？

小波 絵本：……。やるだけやってみていいですか？

DL：どうぞ！

小波 絵本：1DM<=4<*幸運>(1DM<=4)>[9]>0>成功数0 失敗!

小波 絵本：デス3ネ

DL：ないです

小波 絵本：…素直に帰ります！

DL：では帰宅！もうそろそろ就寝…でよろしいでしょうか！

熊埜御堂 亜聡：亜聡はOKです！明日も早いさっさと寝よう…

小波 絵本：寝ましょう！明日は釣りだ…

DL：では、二人は宛がわれた部屋に戻って就寝…

DL：……………

DL：……………

DL：…

▼ 1 日目 深夜 ——異変

DL : ここで〈聞き耳〉をどうぞ

小波 絵本 : $2DM \leq 7$ 〈聞き耳〉 ($2DM \leq 7$) > [1, 10] > 1 > 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡 : $1DM \leq 5$ 〈聞き耳〉 ($1DM \leq 5$) > [10] > -1 > 成功数-1 ファンブル!

熊埜御堂 亜聡 : あ。

小波 絵本 : あ

熊埜御堂 亜聡 : …クリチケ使います!

DL : OK です! system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 5 → 4

DL : では亜聡くんはぐっすり、小波先輩は……ふと、廊下の方から足音が聞こえて目を覚まします。

DL : 足音は玄関の方に向かっているようですね。

小波 絵本 : 「………?」ではこっそりと後を付けたりできますか?

DL : 部屋を出ると既に足音の主はおらず、玄関の方にも向かうも……誰もいませんね。

DL : 空はまだ暗く、時計を見れば午前三時頃です。

小波 絵本 : そうですね…。では誰の靴が無くなっているかわかりますか?

DL : ううん、誰がどんな靴を履いていたか覚えていられれば…かな?

DL : 〈洞察〉〈観察眼〉辺りで判定をどうぞ!

小波 絵本 : では〈洞察〉で!

小波 絵本 : $2DM \leq 7$ 〈洞察〉 ($2DM \leq 7$) > [3, 8] > 1 > 成功数 1 成功!

DL : では白戸と久永の靴がなくなっていることが分かります

小波 絵本 : 「………!」では玄関から出て 2 人をこっそり追いかけます!

DL : 先ほども言いましたが、既に人影は見当たらないのでどこに行ったか見当もつきません…

小波 絵本 : ううん…。じゃあ〈聞き耳〉で声とか足音辿ったりできません…?

DL : いいですよ、〈聞き耳〉どうぞ!

小波 絵本 : $2DM \leq 7$ 〈聞き耳〉 ($2DM \leq 7$) > [1, 8] > 2 > 成功数 2 ダブル!

[雑談] system : [小波 絵本] クリチケ : 0 → 1

DL : では小波先輩が耳を澄ますと、……わずかながらにどこかへと向かう足音が聞こえます。追いかけますか?

小波 絵本 : 追いかけます！

DL : では小波先輩は足音を追いかける。

しかし追いつくことはできず、そのままどり着いたのは……鉱山の入り口でした。

小波 絵本 : 「（ここは…、鉱山の入り口？ 中に入ったのか…？）」

小波 絵本 : 一応 周りを見回しますが…、2 人がいる気配はないのでしょうか？

DL : 小波先輩の周囲には人の気配はありませんね

小波 絵本 : では亜聡君のスマホに通話を繋げてから中に入ります

DL : では亜聡くんに電話をかけ、あなたが鉱山の中に足を踏み入れようとすると

あかり : 「あ————っ！！！！！」

小波 絵本 : 「…！？」

あかり : 「だめよお客様！ 鉱山の中に入ったら！！」

DL : と、背後からあかりが慌てた顔をして追いかけてあなたを止めますね

小波 絵本 : 「いや…、君こそこんな時間に一体何を…？」

あかり : 「もうちょっとしたら朝ごはんの仕込みのお手伝いがあるの！ だから台所に向かおうと思って…そしたら誰か玄関から出ていく音がしたから」

あかり : 「追いかけてきたの！」

小波 絵本 : 「僕は…、白戸さんと久永さんが出て行ったから追いかけたらここまで来た。2 人とも中に入ったのかもしれない」

あかり : 「！ なら尚更お客様まで入っちゃダメよ！」

あかり : 「わたし、草間さんに知らせなきゃ！ お客様も一緒にお屋敷に戻って！」

小波 絵本 : 「……わかった。2 人を探してもらおう」

あかり : 「じゃあ行きましょう！ ほら急いで急いで！」 ペしぺしと腰を叩く

小波 絵本 : ではあかりちゃんを抱えて走って屋敷に戻ります

DL : ではあなたはあかりと共に巨海邸へと戻ります。

すぐさまあかりから草間に話が伝わり、何人かの使用人で捜索隊を組んで鉱山に立ち入るものの……

DL : ……結局、二人は見つかりませんでした。

DL : ………

DL : ……

DL : …

▼ 2 日目 朝 —— 伝承

DL : それから少し経ち、時刻は現在午前 7 時。

DL : 応接間には亜聡さんと小波先輩、それと草間とあかりがいます。

DL : 真名子、明香、そして爽太の姿は見えません。

草間 : 「……申し訳ありません。まさかこのような事態になるとは……」

小波 絵本 : 「……いえ…、僕が鉱山の前で追いつけていれば……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。鉱山以外の場所は探したんすか？」

草間 : 「ええ、一応海岸の方と港の方。集落の方も」

草間 : 「ですが何分深夜のことでしたので、目撃証言も何もなく……」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうすか。…先輩が足音を聞き間違えてて、本当は鉱山には行ってなかった……ってのも考えてただけだな」

熊埜御堂 亜聡 : 「……どこ行っただ、あの親父」

小波 絵本 : 「靴が無くなっていたからな…、出て行ったのは確かなんだろう。……聞き間違いであってほしかった……」

草間 : 「……鉱山の方の搜索は続けてみます。ただ内部を歩くのに長けたものでないと行えないので……お二人は決して立ち入らないようお願いします」

小波 絵本 : 「……よろしくお願いします。」(ぺこり)

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」

あかり : 「ええと、とりあえずお二人共朝食はいかがかしら！」

あかり : 「和食と洋食、どちらもご用意してますよ！！」

小波 絵本 : 「……そうだな。食べて僕達も島を回りながら 2 人を探してみよう」

熊埜御堂 亜聡 : 「その前に、明香と真名子さんは？」

草間 : 「当主様はいつも自室で朝食を取られています。明香様は……どうやら今朝から具合が優れないとのことで」

草間 : 「声はお掛けしたのですが、こちらまで来れないとの事でした」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうなのか。…なら、俺はそっちに行く」

熊埜御堂 亜聡 : 「朝飯は部屋に運べるか？」

草間 : 「もちろんで御座います。あとで運ばせましょう」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん。じゃあそうしてくれ」

草間 : 「小波様はいかがされますか？」

小波 絵本 : 「僕は…」(ちらっと横目であかりちゃんの方を見ます)

あかり : 「？」

小波 絵本 : 「……食堂で頂きます」(あかりちゃんがスタンバイしてるので)

あかり : 「(ぱあ)ご準備しますね！！！！」

草間 : 「……………。では私は搜索隊の指揮に入りますのでこれで」

熊埜御堂 亜聡 : 「あ、待った。そういえば爽太は今どこにいるんすか？ 一応言っておきたいことがあるんで探したいんすけど」

草間 : 「ああ、あの子ならこの時間は海岸でしょう。朝食後にでも会いに行っておいてください」

熊埜御堂 亜聡 : 「ふーん……。いつものことなんすね。了解っす」

草間 : 「お願いします。では私はこれで」

DL : と草間は去りますね。

では亜聡くんは明香のところ、小波先輩は食堂でよろしいでしょうか？

熊埜御堂 亜聡 : OK です…！

小波 絵本 : OK です！

DL : では…どうしようかな、双子の方を先にしましょうか

熊埜御堂 亜聡 : 了解です！

DL : ………

DL : ではあなたは明香が泊まっている部屋へとやってきました。

中に入ればベッドに横になっている明香の姿が目に入ります。

熊埜御堂 明香 : 「……だれ…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺だよ」 声をかけて、ゆっくりベッドの方に近づきますね

熊埜御堂 亜聡 : 「大丈夫か？ 具合悪いのか」

熊埜御堂 明香 : 「お兄ちゃん…？」

熊埜御堂 明香 : 明香は布団から顔を出しますね、……なるほど、確かに顔が赤くて熱がありそうです

熊埜御堂 明香 : 「うん、なんだか今朝からポーっとして……」

熊埜御堂 亜聡 : 「ちょっとデコ出せ。………ん、確かに熱いな」 おでこつつん

熊埜御堂 明香 : 「んー……」

アリス : 「あ、やっぱり？ 風邪かしらね？ 明香、大丈夫？」

熊埜御堂 亜聡 : 「海風に当たり過ぎたか……。症状は風邪っぽいかな？」

熊埜御堂 明香 : 「うん、だいじょうぶ……ありがと、アリスちゃんお兄ちゃん……」

熊埜御堂 明香 : 「あとで、おくすり持ってきてくれるって、草間さんが……飲んだら、たぶん、なおるから……」

熊埜御堂 亜聡 : 「この際ゆっくり寝てろよ。別に急ぎでやらなきゃなんねーこともねえし。薬飲んで無理に動こうとすんなよ」

アリス : 「よしよし、いい子いい子。しっかり休んで早く治すのよ〜」（画面越しによしよし）

熊埜御堂 亜聡 : 「朝飯、粥か雑炊つつつとけばよかったな……。あの人ならそれぐらい手配してるか……」

熊埜御堂 明香 : 「う〜、そこまでこどもじゃないよ……あ、」

熊埜御堂 明香 : 「パパは…？ だいじょうぶ、かな…二日酔いとか、なったりしない…？」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

熊埜御堂 亜聡 : 「……ああ。なんか朝っぱらから外出て動き回ってるみてーだぞ。だから大丈夫なんだろう」

熊埜御堂 明香 : 「そっか、ならよかった……」

アリス : 「………」（じ〜っ…）（亜聡君を見つめる）

熊埜御堂 亜聡：「（アリスちゃんには視線を向けない）（ベットの淵に腰かけて、明香ちゃんの額から前髪の生え際にかけてを手のひらでゆっくり撫でる）」

熊埜御堂 明香：「わ、……どしたの？」

熊埜御堂 亜聡：「別に。……昔母さんがやってた、熱冷ましのまじない。」

熊埜御堂 明香：「、……ふふ、そっか」

熊埜御堂 亜聡：「親父には、見かけたら明香んとこ顔出せて言っておくから、お前はゆっくり寝てろ」

熊埜御堂 明香：「うん、ありがと。……ね、お兄ちゃん」

熊埜御堂 明香：「もうちょっただけ、いてくれる？ ……手、にぎってくれたらうれしいな」

熊埜御堂 亜聡：「………しゃーねえな」片手をぎゅっと

熊埜御堂 明香：「えへへ、ありがと」

熊埜御堂 亜聡：「俺もここで飯食うから」

熊埜御堂 明香：「……うつっちゃうかも？」

熊埜御堂 亜聡：「うつして治るもんならうつせよ。そうしたら俺も寝てる口実ができるだろ」

熊埜御堂 明香：「……もー」

熊埜御堂 亜聡：「…。ほら、ドロシーもアリスも明香の話し相手になってろよ。俺は食ってる間は喋らねーから」
スマホを明香ちゃんの布団の上に並べる

ドロシー：『…うん、わかった。任せて』（ふふっ…）

熊埜御堂 明香：「ふふ、うれしいな。じゃあおはなし、なにがいいかな…」

アリス：「あ、じゃあ元気になったら何がしたい？ どこかに出かけるとか、何か食べるとか」

熊埜御堂 明香：「もー、そんなたいしたやつじゃないってば。ただのカゼだし……あ、でもなんか甘いもの食べたいなあ」

DL：そんな楽し気な会話を聞きつつ、亜聡くんは朝食を取ります。

DL：………

DL：亜聡くんは明香のところで、そして小波先輩はあかりの給仕を受けて朝食をとることになります。

DL：という事で現在食堂、小波先輩の隣にはここに顔のあかりが甲斐甲斐しく給仕をしていますね

小波 絵本：「………（もぐもぐ）」（無言で朝食を食べてます）

あかり：「おかわりはいつでも言ってくださいね！！！」

小波 絵本：「……ああ、ありがと。」（そんなに食わねえけどな、みたいな顔をしながら）

あかり：「はい！！！」

小波 絵本：「……そう言えば、かなり早い時間に起きていたが眠くないのか？」（黙っていたら強制的にお代わりさせられそうなので話題転換）

あかり：「わたし朝型だからぜんぜん大丈夫です！」

あかり：「あとお昼寝もするし、何も問題ないわ！」

小波 絵本：「そ、そうか…。明香が聞いたら亜聡に「見習え」と言いそうだな…」

あかり：「でも、私よりも爽太の方が朝はずっと動いてるわねー。多分今日もまた船の方に行ってしまうし」

小波 絵本 : 「……ああ、昨日 釣りに行く約束をしていたからな……。……行けるような事態じゃなくなって申し訳ないが」

あかり : 「うん、しょうがないわ！ でもあとでちゃんと断りに行ってあげてね！」

あかり : 「たぶんあの子ずっとひとりで待ちぼうけするから！」

小波 絵本 : 「ああ、この後 亜聡と一緒にいくつもりだから大丈夫だ。……弟の事も気遣えて偉いな」

あかり : 「そりゃ大事な双子の片割れたもの！」

あかり : 「それにあの子ちょっとぼんやりしてるというか……どんくさいところあるし、しっかり者としては放っておけないわ！」

小波 絵本 : 「……そういう所もあの大きい方の双子に似ているな……。双子ってそういうモノなのだろうか……？」

あかり : 「さあ！」

小波 絵本 : 「……そう言えば、不躰な質問だが……あかりと爽太は何故 巨海家に来る事になったんだ？」

DL : ではそう聞くとあかりは笑顔のまま一瞬だけ固まり、

あかり : 「……いろいろあったの！」

DL : とだけ答えますね。

小波 絵本 : 「……そうか。」（そこで詮索するのをやめます）

小波 絵本 : 「……普段 真名子さんや草間さんとは仲良くできてるか？」（話題を変えようします）

あかり : 「うん、それはもちろん！」

あかり : 「当主様なんかよく私に「がんばってますね」ってしてくれるし、よくお部屋に呼んでくださったりするの！」

小波 絵本 : 「そうか。良い人なんだな」

あかり : 「うん、……わたしにいろいろ教えてくれるし、本当にいつも助けてくれる人！」

小波 絵本 : 「大事にしてもらっているんだな。それは良い事だ」

あかり : 「でしょ！ ……あっ、それより！」

あかり : 「おかわりは大丈夫ですか！」

小波 絵本 : 「………水のおかわりを貰っても良いか？」（ご飯はもう無理）

あかり : 「はい！」

DL : ではばたばたと音を立てて厨房へと消えるあかりを見送る小波先輩。

…他に聞きたいことがなければ、このまま朝食のシーンを切りますがいかがでしょう？

小波 絵本 : あとは…昨晚白戸さんやパパにおかしな点がなかったかと、現在の搜索の状況が知りたい、ってくらいですかね…

あかり : では戻ってきたあかりは「昨日はお客様が部屋に戻るちょっと前に自分の部屋に戻ったからお二人の様子はわからないし、搜索の状況は「子供には聞かせられないから」って教えてもらってないの！」と返しますね

小波 絵本 : ではあかりちゃんにお礼を言って亜聡君と合流しにお部屋の方に行きます

DL : では問題なく合流できますね。

DL : 今日はどこへ向かいましょう？

熊埜御堂 亜聡 : 「明香はまあ、風邪だった。……？先輩、どんだけ飯食ったんだ？」（ちょっとげんなりしてる先輩を見つつ）

小波 絵本 : 「……朝食だけで1日に必要な水分を全て摂取したような気がする…」

熊埜御堂 亜聡 : 「なんで水限定なんだよ」

小波 絵本 : 「……さすがに茶碗に山盛りの白米を2杯も食べる気にはなれなかった」

熊埜御堂 亜聡 : 「あー……。」「（自分も大食いではない派の男子高校生）」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ま、いいか。腹ごなしに動けば紛れんだろ。」

小波 絵本 : 「……さっさと海岸に行くぞ。この調子だと山盛りの弁当まで持たされかねない」

熊埜御堂 亜聡 : 「どんだけ飯食わせてえんだよ。…そーだな、爽太が待ってる」

DL : では向かうのは海岸…でよろしいですか？

熊埜御堂 亜聡 : OKです！

小波 絵本 : OKです！

DL : ではあなた達は海岸へ向かう

DL : ………

DL : ……

DL : …

DL : では海岸へつくと、爽太がそわそわとした様子で周囲を伺っている姿がまず目に入るでしょう。

DL : そしてあなた達を見つけると、たたたと駆け寄ってきますね。

爽太 : 「あっ、お客様……！」

爽太 : 「えっと、すみません！！」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ん？」

小波 絵本 : 「……爽太？」

爽太 : 「あの、今日船を出すって……昨日、約束したんですけど」

爽太 : 「すみません……ちょっと、いろいろあって……船、出せなくなっちゃったんです…」

爽太 : 「お屋敷の方で、言おうかなって思ったんですけど、すれ違いになるのが怖くて…」

爽太 : 「……ごめんなさい、約束したのに…」

DL : と、かなりしょんぼりとした様子で二人に謝ってきますね。

どうやら諸事情で今日は船が出せなくなってしまったようです。

熊埜御堂 亜聡 : 「…いや、むしろ俺等の方が先に約束破ってるしだな」

小波 絵本 : 「ああ、実は僕たちの方も釣りに行ける状況ではなくなってしまったんだ。約束していたのにすまなかった」

爽太 : 「あっ、そうだったんですね……い、いえ！ こっちこそ、約束破っちゃったし……」

爽太 : 「だからその、今日はどう過ごされるのかなって…」

小波 絵本 : 「一応 午後からは約束があるが…、それまでは空いてるな」

熊埜御堂 亜聡 : 「まあ行けるとこはあんだろ。ついでに親父がどっかぶらついてねーか、見て回るのも手だしな」

爽太 : 「そうなんだ……じゃあ、郷土資料館はどうですか？」

爽太 : 「昨日はしまってたけど、今日は開いてるはずで……ぼくも、たまにそこで本読んだりして過ごしてるんです」

小波 絵本 : 「そうだな、そもそも僕はそこが目当てで来たようなものだ。…他に行きたい所がなければ行ってみるか？」<亜聡君

熊埜御堂 亜聡 : 「別に、構わねっすよ。俺は別に行きたいところがあるわけじゃねーし」

小波 絵本 : 「……ちなみにだが、爽太はこの後はどうするんだ？」

爽太 : 「お屋敷に戻っていつものお仕事をします。急に予定変えちゃったのであるかはわかんないんですけど…」

熊埜御堂 亜聡 : 「ねえかもな」(仕事)

爽太 : 「あう」

小波 絵本 : 「……爽太、君さえ良ければなんだが…。資料館を案内してくれないか？詳しい人間がいてくれると助かるからありがたい」

爽太 : 「えっ、…い、いいんですか？」

小波 絵本 : 「ああ、頼めるか？」

爽太 : 「は、はい！ ぼくでよければ！」

小波 絵本 : 「そうか、ならよろしく頼む」

DL : ではあなた達は爽太を引き連れて郷土資料館に向かう…でよろしいでしょうか？

小波 絵本 : OK です！ 一緒に行こう！

熊埜御堂 亜聡 : OK ですー あ、道中でもいいのですが爽太君にちょっと聞きたいことがあるんですが、ついでにいいです？

DL : いいですよ！

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！

熊埜御堂 亜聡 : 「そういえば爽太。さっき、いろいろあって船が出せなくなった…つつつたが、何かあったのか？」

爽太 : 「あ、はい。ちょっと…船を別の場所につけることになっちゃって」

熊埜御堂 亜聡 : 「別の場所？」

爽太 : 「そうなんです、だからここから船を出すことができなくなっちゃったんです」

爽太 : 「その、どれくらいの期間ここに戻せないかもわからなくて」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ふーん…。誰かが何かにつかうのか、あの船」

爽太 : 「ええと、そうですね…はい」

爽太 : 「船を、貸した感じになるのかな」

小波 絵本 : 「……それはもしかすると、久永さん達の捜索に関係あるのでは…？」

爽太 : 「捜索？」

小波 絵本 : 「……屋敷に帰ればわかる事だから今言うが…。昨晚から久永さんと白戸さんが行方不明になっているんだ」

爽太 : 「……えっ！？」

爽太 : 「そ、そそそ、そうだったんですか…! ?」

熊埜御堂 亜聡 : 「まー知らねえよな。朝早くから屋敷出てたつー話だし。ちなみに親父と白戸さん、どっかで見てたりしねーか？」

爽太 : 「み、見てないです……」

熊埜御堂 亜聡 : 「だよな。ま、見かけたらまた教えてくれ」

爽太 : 「は、はい……」

熊埜御堂 亜聡 : 「で。話は戻すが、船はそれ関係じゃないかもしれねーな。貸したのが今朝とかならともかく。」

爽太 : 「そ、そうですね。ぼくも、理由はくわしくきかなかったので……」

小波 絵本 : 「……確かに。搜索の為ならきちんと爽太にも説明しているだろうしな。一体何の為に……？」

熊埜御堂 亜聡 : 「つつーか、誰だよそんな急に話割り込ませる奴。」

爽太 : 「え、ええと……ごめんなさい、みんなには秘密にねって言われてて……」

熊埜御堂 亜聡 : 「は？ なんだその口止め。」

爽太 : 「うう……実はぼくも、許可出されてない時間に船出しちゃって……それを黙ってもらうかわりに、ぼくも言っちゃだめなんです……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。」 <心理> ローラーすっかな…どうしよっかなって顔

熊埜御堂 亜聡 : 「草間さん？」

爽太 : 「あっ、き、聞いちゃだめですよ！」

爽太 : 「ぼく、絶対言いませんから！」

熊埜御堂 亜聡 : 「チッ」 …ちなみに<心理>は振れたりします？

DL : どうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : ワーイ ありがとうございます！

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=8 <心理> (2DM<=8) > [4, 10] > 0 > 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡 : チッ

DL : がんばって黙っててかわいいね〜、ってなりました！

小波 絵本 : じゃあ小波もいいですか……？

DL : 小波先輩もどうぞ〜

小波 絵本 : 1DM<=6 <心理> (1DM<=6) > [7] > 0 > 成功数 0 失敗!

小波 絵本 : 惜しい

DL : がんばって黙っててかわいい(ry

熊埜御堂 亜聡 : 「しゃーねえな…詮索しねえでおくか」

爽太 : 「(ほっ)、……あ、ほら！ それより郷土資料館が見えてきましたよ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん？ …おー、あれか」

小波 絵本 : 「ああ、あの建物か」

DL : では近づくとかじんまりとしつつ中々立派な建物が見えてきます。

入口のあたりに近づく「開館中」の看板が見えると同時に、その下に「※一部の資料整備中、展示を取り下げています」と書かれていますね。

熊埜御堂 亜聡 : 「ん、確かに今日は開いてんな」

小波 絵本 : 「一部資料取り下げ中……。そう言えば昨日 土産屋で刀の手入れをしていたな」

熊埜御堂 亜聡 : 「そっうやそんなもやってたな…。とりあえず、入るか」

DL : では、あなた達は郷土資料館へと足を踏み入れる。

DL : ………

DL : 中に入ればまず目に入るのは、巨大な人魚のような姿の女性……を模した石像です。

プレートには「海之石神」と書かれています。

DL : 石像の左右にはそれぞれ展示室と資料室になっているようで、資料室の方には大きな本棚があるのが見えます。展示室にはいくつか何かが展示されていますが、真ん中の大きな展示ケースは空のようですね。

熊埜御堂 亜聡 : 「うわ、意外と広えな。……。ん、「海之石神」って確か、家出る前にネットで見た…」 自分の知っている単語に、ふらっと石像に近づきます

小波 絵本 : 「「海之石神」か…」 (研究用ノートにMEME)

熊埜御堂 亜聡 : 「なんか、ここの島民はこの土着神を強く信仰していたり、その方面の伝承もいくつかあるとか何とかをネット記事で見た。」

小波 絵本 : 「そうか。そんなものをよく見つけられたなお前。僕は何も見つけられなかった」

熊埜御堂 亜聡 : って感じで、石像をまずは調べたいですね…！

DL : では石像をぐるぐると観察してみますが、…とりあえずは何の変哲もない石像のようですね。

(特に情報は出ません)

熊埜御堂 亜聡 : 「そうなんすか？ まあちっさい記事だったすけどね。……。へー、こんな見た目なんだな」 (了解です！)

小波 絵本 : 「……ん？ あそこの大きな展示ケースは空だな……。…爽太、あそこには普段何が展示されているんだ？」

爽太 : 「ええと……。確かおっきな刀が入ってたと思います」

小波 絵本 : 「刀……。昨日 土産屋で見たものか…？ …教えてくれてありがとう」

爽太 : 「ど、どういたしまして！」

小波 絵本 : ちなみにですが、その空の展示ケースに説明文とかはありますか？

DL : では簡潔にこういった説明文が記載されたプレートが見つかりますね。

【情報】DL：【神刀】

「海之石神」がかつて英雄に与えたとされる刀、正式な名称は「海鳴切(うみなりぎり)」という。
 どうやらまだ整備が終わっていないらしく、今は展示されていない。

小波 絵本：「「海鳴切」…。神刀という事は、展示品の目玉と言った所か…」(ノートにメモ)

熊埜御堂 亜聡：「先輩、俺適当に見て回るっすけど別にいいよな？」(資料室の方指さしながら)(団体行動しない奴)

小波 絵本：「別にいい。僕は僕で部活動しているからな」

熊埜御堂 亜聡：「おー」 てっけてっけ資料室の方に行って本棚を眺める感じで

DL：はい、では<*調査>や<検索>で何かしら目につく資料が得られるかもしれません

熊埜御堂 亜聡：くっ、<検索> ない…。…<洞察> や<観察眼> はいかがですか！

DL：そうですね、<洞察>OK ですよ！

熊埜御堂 亜聡：やったー！ありがとうございます！では洞察で！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=8<洞察>(2DM<=8)>[1, 9]>2> 成功数2 ダブル!

system：[熊埜御堂 亜聡] クリチケ：4 → 5

DL：ではわかりやすく「海古島の歴史」として紹介されていた資料と、本棚を洞察した結果見つかった資料が出てきますね

【情報】DL：【海古鉱山】

海涙石と呼ばれる鉱石が出土する唯一の鉱山。

一番栄えたのは明治から大正にかけて、世の中のジュエリーブームの波に乗り大いに海古島を潤わせた。

ただ現在は鉱石が枯渇してしまい、閉鎖されている。

【情報】DL：【ミノイシカミ伝説】

その昔、「■■■■■」という悪神がとある島に暮らす人々を支配、蹂躪し、悪逆の限りを尽くしていた。

人々は悪神に対抗する術を持たず、その支配を受け入れていたがある時「海之石神」と呼ばれる土地神の加護を受けた島外の人間が神刀を携えて島にやってくる。

その神刀で「■■■■■」を斬り伏せた上でその名を奪い捨て、古い神——「古々神」と新たに名付け、その存在を矮小なものに貶めて島を悪逆から救い出した。

その人間は「海之石神」と共に英雄として祭り上げられ、人間もまた島の長として島に留まる事を選ぶ。

島には関わった二柱の神から名が取られ、新たに「海古島(みこじま)」と呼ばれるようになる。

【情報】DL：【悲恋寓話】

かつて海古島に名家の娘と漁師の青年がいた。二人は惹かれ合い恋人同士となったが、娘の父親に結婚を反対され、その事を嘆いた二人は島の崖から身を投げ、心中を図る。

娘を失い二人の仲を反対した事を後悔した父親は、二人を弔うために盛大な葬式を上げた…という海古島に伝わる寓話の一つ。

かつて本当に起こった話、とされている。

【情報】DL：【双子にまつわる伝承】

かつて双子は「家を守る」という意識が強い武家や大店の商家では双子が産まれるやいなや、間引かれたり片方を幽閉されたりという風習が存在していた。

中でも、特に忌まれたのは男女の双子であり、その二人は「心中者の生まれ変わり」というのが通説だ。

タイのとある地方では男女の双子が生まれてきた時、その双子による結婚式を挙げるという風習が存在している。

理由として、かつて心中した恋人同士の「一緒になりたい」という願いが神様に聞き届けられ、2人は双子として生まれてきたとされており、双子を結婚させて、2人の願いを叶えたことを神様に知らせないと、双子は早死にしまうと信じられているというものがある。

DL：郷土資料館の情報は以上です！

熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます…！

熊埜御堂 亜聡：「（ばら…ばら…）（…びたっ）……………」

熊埜御堂 亜聡：「……。この辺、先輩好きそうだな」手に持って、近くに机か棚かに置いておく

熊埜御堂 亜聡：「先輩。こっち、オカルトっぽい話いろいろあるっすよ」先輩が落ち着いた頃に呼びますね！

小波 絵本：「本当か？」デジカメでパシャパシャ展示品撮影してましたが、亜聡君の呼びかけに反応して見に行きます

熊埜御堂 亜聡：「すげー真面目に部活してる」

小波 絵本：「寿限無先輩がせっかく呼んでくれたんだ。きちんと活動して帰るのが筋だろう」

熊埜御堂 亜聡：「絶対兄貴気にしねーと思う。…まあいいすけど」

熊埜御堂 亜聡：「ほら、この辺。」よけておいた本を指さしつつ

小波 絵本：「ああ、ありがとう。」では本をパラパラと読んでみます

小波 絵本：「……………何と言うか、不穏だな…」（亜聡君と爽太君を見ながら）

爽太：「？」

熊埜御堂 亜聡：「こっち見んな」

熊埜御堂 亜聡：「双子ってただけだろ。……別に俺らは、間引かれても片方を幽閉されてもねーからな」

小波 絵本：「……そうだな。」

熊埜御堂 亜聡：「だろ。……………まあ、一時期、引き離されはしたか。」

小波 絵本 : 「……一応聞か、それは犯罪に関わってたりしてないよな？」(間引きや幽閉という単語を見て)

熊埜御堂 亜聡 : 「いや。むしろ、至極まっとうに法律に則って手続きされた結果そうされた」

熊埜御堂 亜聡 : 「両親が死んだあと。引き取り手がいなかったから、施設に入れられた。その時、どれだけ騒いでも頼んでも、2人同じ場所には入れなかった。…それだけの話だ」

小波 絵本 : 「……そうか…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ま、そもそも元の親父が馬鹿なことしなければそうなこともなかったんだろうが。とにかく」

熊埜御堂 亜聡 : 「双子だろうが特別扱いされねーってことだろうよ。今の時代。」

小波 絵本 : 「……生まれてきたのが現代で良かったな。」

熊埜御堂 亜聡 : 「本当にな。爽太もな」

爽太 : 「? えっと、はい！」

熊埜御堂 亜聡 : 「、……くつく」絶対内容分かってなくてちょっと笑う

爽太 : 「？」

熊埜御堂 亜聡 : 「爽太は、姉ちゃんと一緒にいたいかな？」

爽太 : 「! はい、お姉ちゃんは大事な家族なので！」

小波 絵本 : 「……あかりの方も今朝、同じ事を言っていた」

爽太 : 「わ、…そうなんだ。…えへへ」

熊埜御堂 亜聡 : 「(…ふ、)…本人らが望んでんだ。今の時代は、これでいいんだよ」

小波 絵本 : 「……そうだな。傍に居る事を選べるのなら、一緒に居た方がいい」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん。……。」(…ちらっと、本にある"心中"という文字に視線を移して)

熊埜御堂 亜聡 : 「…気になる本はこれで最後だな」(ぱたん、と本を閉じる)

爽太 : 「あ、はい。……そういえばもうすぐお昼ですね…お二人はこれからどうされるんですか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「あー……。…昼からは先約があるからな」

小波 絵本 : 「ああ。……案内してくれてありがとう。この後は僕達2人で行く所があるんだ」

爽太 : 「あ、そうだったんですね。じゃあぼくは一旦お屋敷に戻りますね！」

小波 絵本 : 「ああ、そうだ。……爽太」

爽太 : 「？」

小波 絵本 : 「屋敷に戻ったら、明香に亜聡が資料館では大人しくしていたと報告しておいてくれ。今 熱を出して寝込んでいるから」

熊埜御堂 亜聡 : 「おい」

爽太 : 「ふふふ、はい! わかりました！」

熊埜御堂 亜聡 : 「報告するようなことじゃねーだろうが」

小波 絵本 : 「報告しておいた方が明香は安心するんじゃないのか？」(ふ…)

爽太 : 「そうですよ！」

熊埜御堂 亜聡 : 「寝てるだろ普通に。……」

熊埜御堂 亜聡 : 「はあ……」でかため息

DL : では亜聡くんをからかいつつ、郷土資料館での一時は過ぎていきます。

……そろそろ「なみだめ」に向かいますか？

小波 絵本 : 向かいます！

熊埜御堂 亜聡：行きましょうか…！

DL：では。

DL：………

DL：……

DL：…

▼ 2 日目 昼 —— 真相

DL : ではあなた達は昨日ぶりに土産屋「なみだめ」の前に来ています。
表には「閉店中」の看板が出ていますが、鍵自体は開いているようです。

小波 絵本 : 「…………お邪魔します」声を掛けて入ります
熊埜御堂 亜聡 : 「おっさん、生きてるか」 遠慮なく入ります

DL : 店員…押火は表には出ていないようです。
また奥の工房からも人の気配はありません、……更に奥の方を覗けば押火の私室らしき場所が見えます。

熊埜御堂 亜聡 : 「…いねえ。」
小波 絵本 : 「……また奥の方に居るのか？」 では奥の方を覗いてみます

DL : 奥の私室を覗けば置まれた布団と小さな机、そして机に小さな写真立てがあるのが見えます。
……誰かがいる気配がありません。

小波 絵本 : 「……。居ないな…」 きょろきょろと見回しながら
熊埜御堂 亜聡 : 「マジかよ。人のこと呼んでおいて」

DL : 私室に入ってみますか？
熊埜御堂 亜聡 : 亜聡は遠慮なく探そうなので部屋入りますかね…
小波 絵本 : 入りますか…

DL : ではあなた達は押火の私室へと足を踏み入れる。
するとさきほど見つけた小さな写真立てがよりはっきり見え、そこには。

DL : ……二人の男女が仲睦まじく寄り添う姿があった。



DL : 亜聡くんはすぐに理解できますね。

それが自分の……両親の生きていた頃の姿だと。

熊埜御堂 亜聡 : 「、…、……！！」 ぴたっと、足を止めますね

小波 絵本 : 「………亜聡？」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

熊埜御堂 亜聡 : 「………いや。………久しぶりに見る顔が、…目に入った、から」 ちょっと声が震えてるかも

熊埜御堂 亜聡 : 「……その写真。……俺等の父親と、母親だ」

小波 絵本 : 「………！……確かに、言われてみれば似ている。女性の方は巨海家にも写真が飾ってあったしな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「………。…なんで、こんなもんがこんなとこに」

DL : その時、がたっという音が私室の入り口から聞こえる。

慌てて振り向けば、そこには土産屋の店員……押火が立っていた。

押火 : 「……ああ、もう来てたのか。早エな」

熊埜御堂 亜聡 : 「！、………遅えよ、おっさん」

小波 絵本 : 「……ああ、良かった。てっきり亜聡の笑えない冗談が現実になったかと」

押火 : 「勝手に人を殺すな」

熊埜御堂 亜聡 : 「生きてたからいいだろ」

押火 : 「良くねえわクソガキ」

DL : 押火はそう言いつつタバコを咥えて火をつけた。

そしてそのまま私室に入り、どかっと机の前に座る。

押火 : 「まあ座れよ。それなりに長い話をすることになるからな」

小波 絵本 : 「………」 では大人しく座ります

熊埜御堂 亜聡 : 「茶ぐらい出せよ。…」 こちらも（比較的）大人しく座ります

押火 : 「……で」

押火 : 「まず聞きたいことはあるか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「あるに決まってるわ分かってて聞いてんだろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「あの写真。なんであんなもんが置いてあるんだ」 ぴっと指さしつつ

押火 : 「……俺の親友とその奥さんの写真だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「…親友？」 訝し気

押火 : 「ああ。もう 16、7 年は会って……いや」

押火 : 「8 年前の死に目にすら会えてない」

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

押火 : 「さて、どこから説明するべきだろうな」

押火 : 「その様子じゃ、水野に対して何らかの誤解があるようだしなあ」

熊埜御堂 亜聡：「は、なんの誤解だよ」

押火：「死んだ理由」

熊埜御堂 亜聡：「……。……。何か知ってるのか、おっさん。俺等ですら知らねえのに」 声低く

押火：「ああ。……。あいつは」

押火：「お前らを守るために死んだんだ」

熊埜御堂 亜聡：「……………はあ？」

熊埜御堂 亜聡：「こんな話の最中にふざけんな。何の話だよ」

押火：「本当の話だよ。あいつは追い詰められた末、お前らを巨海家から守るために自ら死を選んだ」

熊埜御堂 亜聡：「意味が分からねえ。一から話せ。分かるように。今すぐ。」

押火：「……。俺とお前の父親……。水野は大学で鉱物学を専攻しててな、とある鉱石に興味を持ってこの島に長期間滞在していた」

押火：「そこで巨海家のお嬢さん……。亜希さんと出会って、なんやかんやあった後に結婚した」

押火：「結婚してすぐは二人は幸せそうだったよ、……。でもそれから一年ほどして、亜希さんが妊娠してから何かがおかしくなった」

押火：「亜希さんの腹の中には、双子がいた」

熊埜御堂 亜聡：「……。睨みながら聞してる」

小波 絵本：「……。それは、この島の因習に関する事、ですか？」

押火：「なんだ、知ってるのか？」

小波 絵本：「先程 資料館で男女の双子は特に忌まれた、と読んだもので」

押火：「ああ、それくらいか。……。双子の妊娠が発覚したとき、巨海家の当主……。亜希さんの母親は大層喜んでたらしい」

熊埜御堂 亜聡：「……。あ？」

押火：「——『これで神に捧げられる供物がようやく生まれてくる』ってな」

小波 絵本：「……。『供物』？」

熊埜御堂 亜聡：「……。どういう意味だ？」

押火：「さあね、あまりにおぞましいモンで俺には理解できなかったが……。どうやらこの島には「男女の双子」が生まれた時、……。その命を神様に返すんだとよ」

押火：「双子が7歳を過ぎた時、殺す。……。そういった因習が昔からまかり通っていたらしい」

熊埜御堂 亜聡：「……。ふざけてる。何時代だよ…」

押火：「だが現代、それを聞いて受け入れられる親がどこにいる？ ……水野はすぐさま身重の亜希さんを抱えて島から出ようとした」

押火：「その時に協力したのが俺と、……。あの屋敷に仕えてる草間だ」

小波 絵本：「……。草間さんが？」

押火：「あいつは亜希さんの幼馴染でね、どうも二人を見捨てられなかったらしい」

押火：「それで二人は無事に島を出て、無事に双子も生まれた。これでめでたしめでたし、ハッピーエンドってわけだ」

熊埜御堂 亜聡：「どこがだよ。それで話が終わりなら、さっきの「俺等のために死んだ」って話はどこから来た？」

熊埜御堂 亜聡：「島から出て、その後何があった」

押火 : 「……諦めなかったんだよ」

押火 : 「巨海家当主は、生贄を諦めなかった。執拗に水野達を追いかけた」

押火 : 「俺達も妨害したんだけどな、相手は資産家。まず資金力じゃ勝てっこない、……当の本人の水野のプレッシャーもかなりのものだったろうよ」

押火 : 「……そんな生活に、まず根を上げたのが亜希さんだった」

熊埜御堂 亜聡 : 「…！」

押火 : 「自分の母親が、自分の子供を殺そうと追ってくるんだ。精神がおかしくなってもしょうがない」

押火 : 「……そして水野も段々それに影響されてくる、追っ手は緩めてくれる気配もない、でも子供達だけは守りたい」

押火 : 「8年前のある日、俺に一本の留守電が入った」

水野 香吾 : 「——悪い押火、限界だ」

水野 香吾 : 「もう隠せない、逃げ切れない。この子達にとって僕達は重荷だ」

水野 香吾 : 「最後の手段を取る、亜希も受け入れてくれた。……すまない、もう二度と会えない」

水野 香吾 : 「もしもお前がこの子達に会うことがあったなら、その時は全力で……守ってあげてほしい」

水野 香吾 : 「本当にすまない、……さようなら」

押火 : 「……それが俺が聞いた水野の最後の言葉だった」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」

押火 : 「その後、水野と亜希さんの訃報を聞いた。……お前らの行方だけは分からずじまいだったけどな」

押火 : 「で、だ」

押火 : 「なんでこの島にいる？」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………なんだよ、それ……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「…明香がいた施設の、所長が訪ねてきた。「母方の身内が見つかった」って。向こうが会いたがってるからって、それで…。それで、会いに来た」

小波 絵本 : 「……恐らくですが、彼は巨海家と繋がっています。今は久永さん…、亜聡達の養父共々行方知れずですが」

押火 : 「は？」

押火 : 「お前ら親子二代揃って俺に面倒事を持ち込むのが趣味か？」

熊埜御堂 亜聡 : 「知らねえよ。っつーか被害者だろ俺等」

押火 : 「ていうかそんな事になってるなんて聞いてねえぞ草間ア……………」

小波 絵本 : 「……ついでにもう一つ、面倒事になるかもしれない事を言って構いませんか？」

押火 : 「なんだ？」

小波 絵本 : 「……今 巨海家には、7歳の男女の双子がいるんですが…」

押火 : 「ああ、草間の子供だろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「は？？」

押火 : 「ん？」

小波 絵本 : 「……………は？」

押火 : 「……巨海の屋敷の小間使いの双子は、草間の子供だ。…知らなかったのか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや聞かされてねーぞ」

小波 絵本 : 「……………あかりが自分の身の上を話しながらなかったで…」

押火 : 「ん、そうだったのか。まあ俺も詳しい事情は知らんが」

押火 : 「母親は双子を生んだと同時に亡くなってる、草間には他に身よりがないからあの屋敷に住みこませてもらってるんだと」

押火 : 「だがあの双子に対して当主は興味を示さなかったらしいから、あくまで「巨海家の血を引いた」双子に執心してるんじゃないかってのが俺と草間の結論だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「結論だ。じゃねーよ」

小波 絵本 : 「そうだったんですか…」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、あの草間さんって人、あの双子を俺等に紹介するとき「とある事情により当主様がお預かりになっていらっしゃるのですが」つてたぞ。俺等に隠す気満々だろこれ」

押火 : 「いや、お前らに限らん」

押火 : 「理由は知らんし興味もないが、あいつは普段は親子関係を伏せている。…気になるなら聞いてみたらいい」

押火 : 「どっちにしろ、この島を出るには草間の協力が不可欠だ」

小波 絵本 : 「……そうですね。一度 腹を割って話す必要がありますね」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。本当に味方だつーなら、その辺も含めて、だな」 > 一度 腹を割って話す必要がある

DL : …さて、長い間話しているうちに日も暮れてきたようです。

他に聞きたいこともなければ、一度屋敷に戻った方がいいでしょう。…搜索の進捗も聞けるかもしれません。

熊埜御堂 亜聡 : 帰りますか…亜聡自身はまだいろいろ整理できてないけど…

小波 絵本 : 「……ではこれから先の事は一度 草間さんと話をしてから方針を決めていく、という事で大丈夫ですか？」 < 押火さん

押火 : 「俺としてはそれを薦める。一刻も早くこの島を出ろ、ってのは変わらない」

小波 絵本 : 「わかりました。ではこれから僕達は巨海家の屋敷に戻ります。……一応 これを…」 (すっ)
(自分のスマホの番号書いて渡します)

押火 : 「ああ、どうも。…たまにつながらなくなるから意味あるかどうかはわかんないがな」

小波 絵本 : 「それでも保険は無いよりマシかと思います」

押火 : 「そうか」

熊埜御堂 亜聡 : 「言うこと言い終わったからって死ぬなよおっさん」

押火 : 「なんでそんな恐ろしいこと言うかね」

熊埜御堂 亜聡 : 「そりゃあ」

熊埜御堂 亜聡 : 「おっさんが意味深だから、昨日の夜、草間さんと話してたとはいえあの真名子さんの近くで、おっさんが「水野」の名前を出してたこと、俺がばらしたからな」

押火 : 「ああ」

押火 : 「その程度で殺されんなら俺はとっくの昔に死んでるだろうな」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうなのか。ちなみに草間さんはそれ聞いてキレてたらしいぞ」 (先輩曰く)

押火 : 「だろうな」

小波 絵本 : 「……危機感が無いですね…」

押火 : 「20 年近くこの島で暮らしてんだ、何が気に障るかどうくらいは理解してる」

押火 : 「ま、今回の件が終わったらどうなるかは分からんけどな」

熊埜御堂 亜聡 : 「それならおっさんもさっさと島出ればいいだろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「なんなら俺等が出るとき一緒に来るか」

押火 : 「ま、考えとくよ」

押火 : 「だけどひとまずは、自分の身を第一に考えろ。…でなきゃ水野が報われない」

押火 : 「俺がこの島に留まり続けたのは、ひとえにお前らの存在あってこそだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「、…そうなのか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「そりや律儀だな」

押火 : 「だろう」

押火 : 「ま、とにかく島から出る。早く帰れ。二度と巨海には関わるな。…これくらいだな、俺からは」

熊埜御堂 亜聡 : 「そこまで言うなら俺等が無事家に帰るまで、ちゃんと面倒見ろよ。……、……明香」

押火 : 「……話すかどうかはお前に任せる」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。ちゃんと話すよ、メイも当事者だからな」

押火 : 「そうか」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。よし、先輩。俺はもういいす。」

小波 絵本 : 「そうか…。……では、お邪魔しました。」

押火 : 「おう」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあな」

DL : では、あなた達は押火に見送られながら店を出て行きます。

………

DL : 店を出れば辺りはすっかり夕日で真っ赤に染まっていました。

……遠くから誰かが駆けてくるのが見えます。

草間 : 「——こちらに居られましたか！」

熊埜御堂 亜聡 : 「、ん？」

小波 絵本 : 「……草間さん？」

DL : 珍しく草間が慌てた様子であなた達に駆け寄ってきます。

その顔色は悪く、どこか落ち着かない様子です。

熊埜御堂 亜聡 : 「……どうしたんすか？そんなに慌てて。」

草間 : 「、失礼しました。……いえ、実は」

草間 : 「……白戸様が見つかりました、……その」

草間 : 「……ご遺体で、です」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………は？」

小波 絵本 : 「……——！！」

草間 : 「今、使用人たちでご遺体を引き上げようと……如何されますか」

熊埜御堂 亜聡：「遺体、って、…………死ん、で？…………ど、どこにいたんすか。」

小波 絵本：「…………手伝います！」

熊埜御堂 亜聡：「…………待て。親父は。」

草間：「熊埜御堂様は見つかっておりません」

草間：「…………ですので、まだ」

熊埜御堂 亜聡：「……………」

熊埜御堂 亜聡：「…………先輩が行くなら、付き合います」

小波 絵本：「…………いいのか？明香の傍に居なくて大丈夫なのか？」

熊埜御堂 亜聡：「本当は一刻も早く戻りてえところだが、今の一報だけ聞いた状態で戻っても、どうせ明香にすぐ何かあったって見抜かれる」

熊埜御堂 亜聡：「ちゃんと状況を理解した上で、あいつに説明する」

小波 絵本：「…………わかった。なら行こう」

草間：「…………では、こちらへ」

DL：では草間はあなた達を、白戸の遺体が見つかったという場所へと案内します。

DL：…………

DL：…………

DL：…

DL：…………白戸の遺体が見つかったのは、切り立った崖———の下海。

そこに行けば使用人が何人か集まり、太い縄を一生懸命引っ張っているのが見えた。

DL：ゆっくり、ゆっくりと上がっていく縄——それが上がり切ると同時に、びしょ濡れの…………ぴくりとも動かない白戸の体が崖下から引き上げられる。

DL：それと同時に分厚い雲が空を覆い、…………少し間を置いて雨が降り出す。

DL：雨は次第に強くなり、崖下に吹く風が——まるで泣いているかのような轟音を立てた。

DL：共鳴判定（強度 5／上昇 1）∞共鳴感情：[哀しみ（情念）]

小波 絵本：バッチリ被ってますね！

熊埜御堂 亜聡：うわぁん先輩ー！！（こちらはなしです！素で振ります！）

DL：どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=5（∞共鳴）（1DM<=5）> [3] > 1 > 成功数 1 成功！

小波 絵本：（1*2）DM<=5（完全一致）（2DM<=5）> [3, 6] > 1 > 成功数 1 成功！

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：1 → 2

system：[小波 絵本] 共鳴：1 → 2

DL：…引き上げられた白戸の遺体は、使用人たちの手で運ばれていくのをあなた達は呆然と眺めるでしょう。

草間 : 「……急かすようで申し訳ありませんが、すぐに屋敷に戻りましょう」

草間 : 「警察と、……帰りの船を手配します。…このような事が起きてしまつては、当主様も恐らくは皆様を引き留めたりはしない筈です」

熊埜御堂 亜聡 : 「！、……。…そうですね。さすがにこの状況で島に留まりたいとはならねーな」

小波 絵本 : 「……そうですね。久永さんの事は気掛かりではありますが…致し方ありません」

草間 : 「熊埜御堂様の事は私達が力を尽くして搜索致します。……急ぎましょう、雨もひどくなってきた」

DL : あなた達は草間に連れられ、大急ぎで巨海邸へと帰ります。

DL : ………

DL : ……

DL : …

▼ 2 日目 夕方 ——秘密

DL : それから。

DL : 巨海邸に帰ったあなた達はすぐさま食堂に集められ、今はあなた達と草間、そして真名子がいます。今は草間の口から、現在の状況が説明されている状況です。

草間 : 「……といった経緯で白戸様のご遺体が見つかった件についてですが、警察に連絡がつきました。ですが…」

草間 : 「……突然の雨で、海古島周辺の海が荒れており船やヘリでは近づくことができず、治まるまで待機してほしいとの事です」

草間 : 「それと、事件か事故かの判断もこちらでは出来かねますので……ひとまずはなるべく海に近づくかぬよう、外出もなるべく控えていただき、やむを得ない場合でも複数人で行動していただくようお願い致します」

草間 : 「……この度はこのような事が起こってしまい、皆様を不安にさせたこと…まことに申し訳なく思っております」と、草間は深々と頭を下げますね。

熊埜御堂 亜聡 : 「………」

小波 絵本 : 「………」

DL : それと真名子の様子ですが…どうにも不安そうで、あまり口数も多くありません。

DL : 草間の現状説明の最中でも俯いており、時折草間やあなた達が声をかけてもどこか反応がおぼろげです。

熊埜御堂 亜聡 : 声掛けるか…と思ったけど、声をかけてもダメなのか…。＜心理＞振れます…？

DL : いいですよ！

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！せっかくなのでクリチケも使いたいです！

DL : どうぞ！

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 5 → 4

熊埜御堂 亜聡 : 3DM<=8 〈心理〉 (3DM<=8) > [10, 3, 6] > 1 > 成功数 1 成功！

DL : えー、では亜聡くんは真名子がどこかここに心あらず…というか、白戸の死自体はどうでも良さそうで、それ以外に何か気になる事柄があるのでは、と受け取りますね。

熊埜御堂 亜聡 : うおお……おばあちゃん……

熊埜御堂 亜聡 : 「……真名子さん、大丈夫すか。なんか、気になることでも？」

巨海 真名子 : 「…え？ …ああ、ごめんなさい」

巨海 真名子 : 「立て続けに色んなことがあったせいかしら…疲れちゃったのかもしれないわ」

巨海 真名子 : 「……草間、わたくしは一旦部屋に戻ってもいいかしら？ …今日はもう休みたいの」

草間 : 「それは…」 ちら、とあなた達を見ますね

小波 絵本 : 「……この状況では疲れてしまっても仕方がないと思います。僕達にはお構いなくお休みになって下さい」

熊埜御堂 亜聡：「…。そうすね。俺も明香のところに行くか」

巨海 真名子：「ありがとう、…それじゃあおやすみなさい」

巨海 真名子：と真名子は食堂を出て行きますね。

熊埜御堂 亜聡：ではそれを扉が閉まるまで見送りつつ。

熊埜御堂 亜聡：「……………大丈夫か、あのばあさん。」ぼそと

小波 絵本：「……………何か気になった事でも？」<亜聡君

熊埜御堂 亜聡：「……………いくら何でも、客が死んだらもうちょっと心に留めるだろ普通。…つまり、だいぶ他事に
気を取られてたな。」

熊埜御堂 亜聡：（あ、一応小声です）（一応）

草間：（了解です）（特に草間は咎めたりしません）

小波 絵本：「……………確かに。他に気になるような何かがあるのか…？」

熊埜御堂 亜聡：「かもな。…仮にだが、それがさっき土産屋で聞いた話だったら最悪だな」

小波 絵本：「……………」

熊埜御堂 亜聡：「……………草間さん、こんなことになって、あの双子どうしてます？」

草間：「…あの子達は今は部屋で休ませています」

草間：「……………押火から色々とお聞きなされたようですね」

熊埜御堂 亜聡：「バレてんなこれは」

小波 絵本：「……………なら、腹を割って話しても問題ない、と受け取って構いませんか？」

草間：「はい。……………ここでは誰かに聞かれる可能性が御座います。私の私室へどうぞ」

DL：という事で草間は自分の私室にあなた達を案内しますね、…ついて行きますか？

小波 絵本：「……………」では大人しく付いて行きます

熊埜御堂 亜聡：「待った。明香も起きてたら、あいつも連れていけねーか？」

熊埜御堂 亜聡：「あいつ今どうしてる」

草間：「明香様でしたら、あかりが昼過ぎに様子を見に行った時は「まだ寝ている」との事でした」

草間：「夕方頃は……………白戸様の件があったので、まだ」

草間：「明香様の様子を見に行く、とのことでしたら私は先に私室で待っておりますので」

熊埜御堂 亜聡：「そうか。じゃあ、先輩は先に行ってくれ」

小波 絵本：「わかった。」

熊埜御堂 亜聡：ということで、亜聡は明香ちゃんの部屋を経由してから行きますね…！

DL：はい、では先に亜聡くんの方から描写していきますね！

小波先輩は少々お待ちを…

DL：……………

DL : では亜聡くんは明香が泊まっている客室の扉を叩きます。
…が、中から返事はありません。

熊埜御堂 亜聡 : 「明香。……メイ。起きてるか？」 扉開きますか…？

DL : 鍵はかかってないので入れますね！
そのまま部屋に入れば、少し息の荒い明香がベッドに横になっているのが見えます。

熊埜御堂 亜聡 : 「…メイ。大丈夫か？」 小声で声をかけながら近づいて、起きてなさそうなら額に手を当ててみますね…？

熊埜御堂 明香 : 「……ん、……おにいちゃん…？」

DL : そっと近づけば、明香がゆっくりと目を開きます。
起きてはいたようです。

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ、俺だ。……大丈夫か。つらそうだな」

熊埜御堂 明香 : 「うん、ちょっと、だけ……お薬、飲んだのにな…」

アリス : 「亜聡が出ていってからずっとこの調子なのよ。……これはちょっと、病院にでも行った方がいいんじゃない？」

熊埜御堂 亜聡 : 「だな。薬で治まらねーなら病院の方が良さそうだな」

熊埜御堂 亜聡 : 「……やっぱり風邪っぽいのか？」

熊埜御堂 明香 : 「…んー……わかん、ない…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…風邪っぽいのかも分からねーのか。他に様子が見られる人がいればいいんだが…」

ドロシー : 『そもそもこの島、病院ってあるのかな…？』

熊埜御堂 亜聡 : 「さすがに何かしらできる人はいると思ってるが、草間さんに聞いてみるか」

熊埜御堂 亜聡 : ちなみに、亜聡自身は何も技能ない…けど、＜知覚＞などで「今のようすが風邪の症状に見えるか」など分かたりしませんか…？

DL : いいですよ、どうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！そして明香ちゃんのためにクリチケ使いたいです！

DL : どうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 4 → 3

熊埜御堂 亜聡 : 2DM≤4 (＊知覚) (2DM≤4) > [4, 10] > 0 > 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡 : おい 10!!!

DL : じゃあ熱があつて苦しうだなあということくらいしかわかりません！

熊埜御堂 亜聡 : な、何もできない…！とりあえず水など飲ませてあげつつ、寝かせてあげるか…

熊埜御堂 亜聡：「…あとで草間さんにもうちよつとちゃんと診てもらえる人がいねえか聞いてみる。もう少し我慢できるか？」

熊埜御堂 明香：「うん、ありがとぅ……ふふ、お兄ちゃんが世話焼きだ」

熊埜御堂 亜聡：「…うるせー。」 明香ちゃんの額から前髪の生え際にかけてを手のひらでゆっくり撫でる

熊埜御堂 亜聡：「とりあえず、今は寝てろ。あとでまた来るから」

熊埜御堂 明香：「うん……そういえば…パパや、せんぱいは？」

熊埜御堂 亜聡：「……親父は、まだ帰ってきてない。」

熊埜御堂 亜聡：「まだどこかほつき歩いてるのかもな。…先輩は帰ってきてるぞ」

熊埜御堂 明香：「……そっか」

熊埜御堂 明香：「…しょうがないなあ、パパは…ね、おにいちゃん」

熊埜御堂 亜聡：「あとで母さんに報告だな。……あ？」

熊埜御堂 明香：「……わたしがうるさくないからって、へんなことしたり、しないでね？」

熊埜御堂 亜聡：「………どういことだ？」

熊埜御堂 亜聡：「心当たりねーからよく分かんねーな」

熊埜御堂 明香：「えー、ほんと…？ ……なんかかくしたりとか、してない？」

熊埜御堂 明香：「わたしわかつちゃうよそういうの、…ふたごだもん」

熊埜御堂 亜聡：「…おー、そうだな。お前、そういうの気付くのクソ早えからな」

熊埜御堂 亜聡：「隠し事なんてしてねーよ。言っていないことがあるだけだ」

熊埜御堂 明香：「やっぱり」

熊埜御堂 亜聡：「ただ、今のメイは、薬飲んでゆっくり寝ることに忙しそうだから言わないってだけ」

熊埜御堂 亜聡：「……別に、変なことなんかしない。安心してろ、大丈夫だ。」

熊埜御堂 明香：「もう！ ……わかった、でもむりしちゃうだよ」

熊埜御堂 亜聡：「ん。何かあったら、ドロシー経由にでもニヤインに連絡入れてもらう」

熊埜御堂 亜聡：「だからお前も、何かあったらアリスに頼んで連絡寄越せよ」

熊埜御堂 明香：「…うん」

アリス：「わかってるわよ～。亜聡も何かあったらドロシー経由で良いから連絡しなさいよ～！」

熊埜御堂 亜聡：「よし。……とりあえず、今は早く治せ」 頭撫で

熊埜御堂 明香：「わ、……えへへ、うん」

熊埜御堂 亜聡：「ん。…あとは俺に任せろ」

熊埜御堂 亜聡：（明香ちゃんの様子も分かったし、亜聡はこんなもんですかね…）（アリスちゃんに「何かあったら連絡よこせ」って重々言い含めてから、部屋を出ます…）

DL：はい、ではそのまま草間の私室に向かう感じで大丈夫でしょうか？

熊埜御堂 亜聡：はい、OKです！

DL：では草間の私室で全員合流ですね。

DL：草間の私室はきっちりと整頓されており、物も少なくすっきりとした印象を抱くでしょう。

棚の上には三つ写真立てが置いてあり、今よりも幼いあかりと爽太の写真と見覚えのない女性の写真、そして亜聡くんと明香の両親の写真がありますね。

DL : 草間はベッドに腰掛け、あなた達二人には椅子を薦めます。

草間 : 「どうぞ。特に出せるものがなく申し訳ありませんが」

小波 絵本 : 「いえ、お構いなく」

熊埜御堂 亜聡 : 「どうも。……明香の症状、悪化してたから連れてこなかった。あとでいいからあいつのことちゃんと診てくれる奴紹介してくれ」

草間 : 「それで御座いましたか、心配ですね…この島には小さな診療所しかありませんが、あとでそちらの医師に来ていただくよう手配をしておきます」

熊埜御堂 亜聡 : 「おー、頼んだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……で。待たせて悪かったな。「腹を割って話す」んだろ？」

草間 : 「……はい」

草間 : 「訊ねたいことがありましたら何なりと、…答えられる範囲でしたら誠意をもって答えさせていただきます」

熊埜御堂 亜聡 : 「正直俺からはめちゃくちゃあるんだが…、とりあえず、その写真つつこんでいいか？」 部屋の写真 3 枚指さす

草間 : 「……私の妻と、子供達と、……幼馴染とその夫の写真です」

草間 : 「子供達以外は、故人ですが」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。土産屋のおっさんの話とは、つじつまが合ってるんだな」

熊埜御堂 亜聡 : 「じゃあ、草間さんも俺等の実の両親に何があったかは知ってる。……あとは俺等がどうしてここに呼ばれたのかも、分かってんだな？」

草間 : 「はい」

草間 : 「……当主様は「生贄」の為、双子を長い間探しておられましたので」

熊埜御堂 亜聡 : 「うわ」

小波 絵本 : 「………」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ちなみに、具体的には俺らは何される予定だったんだ？」

草間 : 「……タイのとある地方で行われる「双子の結婚式」という風習をご存じでしょうか？」

小波 絵本 : 「はい。昼間 資料館でそういった本を読みました」

草間 : 「では、海古島の「悲恋寓話」に関しても？」

熊埜御堂 亜聡 : 「なんか読んだなそれも」

熊埜御堂 亜聡 : 「……それが関係あるのか？」 訝しげな顔

草間 : 「はい」

草間 : 「……海古島にて生まれる、巨海家の血を引く双子はこの「悲恋寓話」に出てくる漁師と娘の生まれ変わりとされています。…少なくとも巨海家の中では」

草間 : 「そして双子が生まれ、7 歳が過ぎた時巨海家は……この双子を海に「帰す」儀式を行うのです」

草間 : 「帰す、とは言いましたがつまるところ……双子をかつて心中した恋人の生まれ変わりと見做した上で、…海古の山の上から海に……、その」

草間 : 「突き落として、殺す。……そういったものです」

小波 絵本 : 「………」

熊埜御堂 亜聡 : 「オブラートゼロだな。…なんだよ、その儀式は。何の意味があるんだ」

草間 : 「……わかりません。私は巨海の外の人間で、……長らく儀式も行われはしませんでしたから」

熊埜御堂 亜聡 : 「は、そりゃそうだろうな。1 つの家に、男女の双子が生まれる確率なんて相当低い」

草間 : 「ですが、巨海家はこの儀式に深い執心を持っていた。それだけは確かです、……現に今の当主様も」

草間 : 「8 年かけて娘夫婦を自殺に追い込むほど探し続けるほどに……更に 8 年もかけて、孫であろう双子が引き取られた児童養護施設を探し続けるほどに執着しておられました」

熊埜御堂 亜聡 : 「、……そうやって改めて聞くと、本当にいかれてんな」

熊埜御堂 亜聡 : 「それで、白戸さんに？」

草間 : 「ええ。…各児童養護施設の所長に多額の謝礼金を渡すとちらつかせ、…結果それに引っかかったのが」

草間 : 「……明香様が在籍しておられた施設の所長、白戸様でした」

熊埜御堂 亜聡 : 「……」

草間 : 「私共も、まさかここからお二人の所在が割れてしまうとは……」

熊埜御堂 亜聡 : 「金に目がくらんだ奴の責任だろ。そんなの。……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……じゃあなんで、白戸さんは死んだんだろうな…。親父まで消えて」

草間 : 「……わかりません」

草間 : 「ただ、状況的に熊埜御堂様は大変に白戸様や当主様、そして私を疑っておいでのようでした」

熊埜御堂 亜聡 : 「…親父が？」

草間 : 「はい。推測ではありますが…一番口を割りそうな白戸様に事情を聞き出そうとして、……何らかに巻き込まれた可能性が高いのでは、と」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。……親父何やってんだクソ…」

小波 絵本 : 「……白戸さんの死因はわかっているのですか？」

草間 : 「いえ、素人目ですから判断がつかず……」

草間 : 「ただ、見た限り外傷はないようでしたので……やはり憶測になってしまいますが、……溺死ではないかと」

草間 : 「鉾山の上まで登れば、崖から海に落ちてしまう可能性も低くはありませんから」

小波 絵本 : 「……という事は、久永さんも海に落ちた可能性が高い、と…」

熊埜御堂 亜聡 : 「おい先輩、勝手に人の親父殺すな」

小波 絵本 : 「………すまない。今のは僕が悪かった。」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香がいたら一発殴ってたがいねえから許す」

熊埜御堂 亜聡 : 「代わりに紛らわしい消え方してる親父の方殴っておく」

小波 絵本 : 「やめておけ。お前のもやみたい腕が折れるだけだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺のことなんだと思ってんだよ」

小波 絵本 : 「生意気で怠情なもやし」

熊埜御堂 亜聡 : 「やっぱ先輩もあとで一発殴る」

小波 絵本 : 「やれるものならやってみろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「くそ、絶対あとでやってやるからな。………ああもう話が逸れる。これ以上分からないなら今はこの話はここまででいい」

草間 : 「はい」

小波 絵本 : ではこのタイミングで…、先程 草間さんから聞いた双子の儀式の話について <オカルト> でわかる事とかありませんか？

DL : いいですよ、振ってみてくださいな！

小波 絵本 : あ、ではここでクリチケも使っていいですか？

DL : どうぞ！

小波 絵本 : ありがとうございます！

system : [小波 絵本] クリチケ : 1 → 0

小波 絵本 : 3DM<=7〈専門知識（オカルト）〉(3DM<=7) > [3, 8, 6] > 2 > 成功数 2 ダブル！

system : [小波 絵本] クリチケ : 0 → 1

DL : では小波先輩は「似たような因習を聞いたことがない」から本当に巨海家内々で行われていたんだな、ということと

DL : 「この手の因習は定期的に儀式が行われそうなものなのに長い間行われなかったのは何故だろう」、と思いきりました

小波 絵本 : ふむ…？

小波 絵本 : 「……………少し話を戻しますが、僕も巨海家で行われている儀式に似たようなものは聞いた事はありません。本当に巨海家独自で内々に行われていたものようですね」

小波 絵本 : 「……それとも一つ。この手の因習は定期的に儀式が行われそうなものなのに、何故 長い間行われなかったのでしょうか？ ……亜聡の言う通り、都合よく男女の双子が生まれなかったのもあるでしょうが…」

小波 絵本 : 「しかし長い間行われなかった因習は廃れていくもの。…真名子さんがここまで執心している理由がますます分からない。」

草間 : 「それは…確かに……」

草間 : 「……思い返せば、亜希が……亜聡様の母君が双子を懐妊した、と聞いた時の当主様の喜びようは異様でした」

草間 : 「長くしていなかった儀式を「ようやくできる、叶う」と表現するほど、待ちわびていたというか…」

熊埜御堂 亜聡 : 「『これで神に捧げられる供物がようやく生まれてくる』」

熊埜御堂 亜聡 : 「だったか？」

小波 絵本 : 「……………つまり真名子さんは、かなり昔から…亜希さんが懐妊するよりも遥かに昔から儀式が出来る事を待ち望んでいた、と？」

草間 : 「……恐らく、は」

熊埜御堂 亜聡 : 「……………なんにしても」

熊埜御堂 亜聡 : 「目的が分からないんじゃ、尚のこと気分が悪いんだよな。ただでさえ突き落とされて殺されるとかいう話されてなのに。……外で調べられねえなら、この屋敷の中で、何かそういうものを調べられそうな場所はねえのか」

草間 : 「……当主様のお部屋くらいしか……」

熊埜御堂 亜聡 : 「無理だろ」

草間 : 「恐らくは」

草間 : 「……押火は」

草間 : 「押火は、早々にこの島を出た方がいいと言ったのでしょう。……私も同じことを思っています」

草間 : 「ですが海の様子や、明香様の体調、……白戸様の件に関しても、このまま島を安全に出るのは…恐らく難しいでしょう」

草間 : 「皆様が島にご滞在の間、身のご安全に関しては私が責任を負います。……秘書の立場故、表向きは当主様に寄ってしまうかもしれませんが、そこはお許しください」

熊埜御堂 亜聡 : 「そこまで思いつめられなくてもいいんですけど」

熊埜御堂 亜聡 : 「…まあ、協力してくれる人がいるってだけでこっちは助かるし。実の両親のこととか、巨海家の狙いの事とか、今日一日だけでいろいろ聞いたすけど……俺が一番重視してるものについては、何も変わってない。」

草間 : 「…と、言いますと」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺は今までの生活に何も不満がない。今の親父がいて、母さんがいて、…明香がいる。……あとはおまけに、今回の事で、もしかしたら実の両親の方にも、墓参りができるようになるかもしれない。」

熊埜御堂 亜聡 : 「俺は、今の生活を守ればそれでいい。明香がいる今の生活のまま、これからも生きていきたい」

熊埜御堂 亜聡 : 「……だから、とどのつまりは。家に帰りたいんだよ。俺の周りにいる全員、何事も無く、な」

草間 : 「……わかりました。私の手の届く範囲であれば、手助けさせていただきます」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ、頼むぞ。草間さんも。」

熊埜御堂 亜聡 : 「あと土産屋のおっさんにも言ったけどあんたも微妙に死にそうだからあんたも島出る」

草間 : 「死にそう」

小波 絵本 : 「ならあかりと爽太も一緒に出ろ」

熊埜御堂 亜聡 : 「ほんとだよあの2人も連れてけ。なら今度は、その話だな」(あかりちゃんと爽太君の身の上の話)

小波 絵本 : 「……ああ、そうだな。……草間さん」

草間 : 「……そうですね、とは言うものの…あまり語れる内容はないのですが…」

草間 : 「あの子達は、確かに私の実子です。しかし親子関係をあまり言いふらすことはしていませんし、…特に当主様には伏せています」

草間 : 「あの子達が男女の双子である、というのも理由の一端ではありますが…いざという時、当主様が私に対してあの子達を使って圧をかけられないように、という意図をもって伏せています」

草間 : 「…本来であれば、島外の人間であった妻と共にこの島から離れた場所で暮らしてもらう予定だったのですが…彼女が不慮の事故で亡くなってしまい、他に頼れる人間もおらず」

草間 : 「なので当主様には「頼れる身内のいないみなし子」として、屋敷に…危ない事だとは分かっていますが、手元から離す事も出来ず」

草間 : 「…あの子達には、苦労ばかりかけてしまっていますが」

小波 絵本 : 「……あの双子には、真名子さんの所業については伏せてあるんですよね？2人とも真名子さんを心から信頼している様子でしたし…」

草間 : 「はい。……言えませんでした」

熊埜御堂 亜聡 : 「だろうな」

小波 絵本 : 「……それはそうでしょうね。」

熊埜御堂 亜聡 : 「だったら、今のこの状況についてはあの2人はどう理解してんだ？ 父親がすぐそばにいるのに、表立っては父親とは呼ばせねーようにしてるんだろ？ …さすがに違和感あるんじゃないのか」

草間 : 「私がこの屋敷に滞在している時…特に当主様の横に控えている時は、基本的に秘書の仕事をしていますので。なので仕事中は父と呼ばないように、と言い含めています」

小波 絵本 : 「……あかりに身の上の事を尋ねた時、かなり表情が曇っていた。……良い感情は持っていないさそうではある。」

草間 : 「それは…そうでしょうね。唯一の身内が「甘えないように」「親子と悟らせないように」と言いつけているのですから」

熊埜御堂 亜聡 : 「……。…事情は理解するが…子供にとっては勝手だな」 眉間にしわ

草間 : 「…はい」

熊埜御堂 亜聡 : 「いつまでそんな生活するつもりだ？……それとも、もしかしてあんたも、俺等のためだとか言うのか。」

草間 : 「いえ、私は押火ほど重くはないので。ただ…」

草間 : 「あなた方二人が無事に逃げおおせてしまえば、この島と巨海家はおしまいです。そうすれば私は大手を振って退職届を出す事が出来ますので」

小波 絵本 : 「………だとさ。責任重大だな、お前達」

熊埜御堂 亜聡 : 「………不本意にもな。つまり俺等が逃げられねーと、あかりと爽太までこのまま…巻き添えじゃねーか」

草間 : 「私が何より危惧していたのは、お二人が当主様の本懐に気づかずに近づいてしまうことでしたから…」

熊埜御堂 亜聡 : 「確かに、何も知らないままただの好意だと近づいてた可能性は……あるな。」（明香ちゃんを思い浮かべつつ）

小波 絵本 : 「オトギバラシ……、竹取の事も最初 何も疑わずにゲームに誘われていそうだったしな」

熊埜御堂 亜聡 : 「……」 まったく否定できない

熊埜御堂 亜聡 : 「…いやあれは先輩と竹取先輩が悪いだろ」

小波 絵本 : 「………それに関してはすまなかった。」

熊埜御堂 亜聡 : 「謝るのかよ。…まあ、その話は今はいいか。」

熊埜御堂 亜聡 : 「とにかく、あとは何とかして全員で島を抜け出すだけだな。……親父も見つけてな」

草間 : 「……申し訳ありません、まだ何も」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香もさすがにそろそろ怪しんでる。…早いところ足取り掴まねーと、あいつの症状も悪化する一方だ。」

熊埜御堂 亜聡 : 「やっぱ、もう一回探しに出るか…」

小波 絵本 : 「………草間さん。ちなみにですが、あと探していない場所がありますか？」

草間 : 「……後はもう、崖下か海方面になりますね」

熊埜御堂 亜聡 : 「半分死んでる前提じゃねーか」

草間 : 「……申し訳ありません」

小波 絵本 : 「せめて岩肌に引っ掛けてくれているのであれば良いが…」

熊埜御堂 亜聡 : 「落ちてる前提じゃねーか」

草間 : 「……ですが、落ちていたとしてもここまで見つからないのは妙だなとは思います」

小波 絵本 : 「………まさか…意図的に隠れている、という事ですか…？」

草間 : 「…わかりません。ですが、その可能性もあります」

熊埜御堂 亜聡 : 「、………なんでわざわざ」

小波 絵本 : 「……確かに。久永さんが草間さんも含めて誰の事も信用していないのなら、巨海家の息のかかった人間が探しに来てても出ていかないかもしれませんね」

草間 : 「…そうですね」

熊埜御堂 亜聡 : 「…なるほどな…」

草間 : 「…他にお聞きしたいことはありますか？」

小波 絵本 : 「……そう言えば今朝、爽太が誰かに船を貸したという話を聞いたのですが…」

草間 : 「…船を？」 きょとん

小波 絵本 : 「誰に貸したのか、絶対に言うなと言われたそうです」

草間 : 「……いえ、初耳です」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうなのか。…てっきり草間さんだと思ったんだが」

小波 絵本 : 「……草間さんでないとすれば…、もしかして相手は久永さんなのでは？」

熊埜御堂 亜聡 : 「だが、「許可が出されてない時間に船を出したことへの口止めの対価」なんだろう？」 言っちゃう。

小波 絵本 : 「しかし既に島内に居ないのだとすれば、探しても見つからないのは納得できないか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「まあ、言いたいことはわかる。…が…、どうなんだろうな」

小波 絵本 : 「確にお前達を置いて 1 人だけ帰るような人ではないだろうが…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。…ちっと切り口を変えてみるか。草間さん、この島で、海岸以外に船を付けられるような場所ってあるのか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「たぶん人目につかない場所で」

草間 : 「……それこそ、崖下辺りになるかと」

小波 絵本 : 「……そう言えば、爽太も釣りに行く約束をした時に「とっておきの場所がある」と言っていたな…」

熊埜御堂 亜聡 : 「崖下なら船をつけられる場所はあるのか。……ああ、それも確かに案内されてなかったな」

熊埜御堂 亜聡 : 「崖の下って言うから断崖絶壁を想像してたが、上陸できるような空間があるならもしかしたら…って可能性はあるな」

小波 絵本 : 「……ひょっとしたら爽太から船を借りる時にその場所を教えてもらったのかもしれないな」

草間 : 「そうかもしれませんが、とにかく雨が落ちていたらまたそのあたりを……」

DL : と、話しているところで草間の私室の扉がコンコン、と叩かれた。

少しして外から「…いますかー？」と、明るく幼い声が聞こえる。

草間 : 「っ、すみません。少し……はい、います。どうぞ」

DL : 草間が扉に向かって声をかければ、ひょこっとそこからあかりが顔を出す。

あかり : 「……あっ、お客様ったらここにいらっしやったのね！」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん？ …おー」

小波 絵本 : 「……ああ。久永さんの搜索の状況を聞いていたんだ」

あかり : 「そうだったのね！ お客様がどこにもいらっしやらないから、居場所を知らないかと思って聞きに来たの！」

あかり：「もうそろそろいい時間ですけど、お部屋にご案内しますか！」 目エキラキラ

熊埜御堂 亜聡：「あー…」（断れない空気）（ちらっと先輩見ます）

小波 絵本：「……草間さん、ありがとうございました。また今後も引き続きよろしくお願いします。」（べこり）

草間：「いえ、…また何かありましたら」

草間：「ではお二人をお部屋までご案内をお願いします。…おやすみなさい」

あかり：「はーい！ おやすみなさい！」

熊埜御堂 亜聡：「ん」

小波 絵本：「おやすみなさい。……では、失礼します」

熊埜御堂 亜聡：「…ありがとうございました。明香の件はよろしくお願いします。」 軽く会釈して部屋を退出しますね

DL：では草間に見送られ、あかりの先導であなた達は部屋を出る。

DL：そのままあかりがあなた達を部屋に案内する……その道中。

あかり：「……ねえ、お客様！」

小波 絵本：「うん？ どうした？」

熊埜御堂 亜聡：「あ？」

あかり：「もしかして当主様やこの島に関して何か調べたいことがあるの？」

熊埜御堂 亜聡：「……あ？」

あかり：「だって草間さんの私室に行ってた、ってことはそういう事を聞きたかったんじゃないの？ それに爽太が言ってたわ、「今日はお客様と一緒に郷土資料館に行ったんだ」って！」

あかり：「そういうのずるい！ わたしもなんか教えたい！」

小波 絵本：「……ああ、そういう事か。そうだな、僕は元々 部活の一環でこの島の因習や伝承を調べに来たんだ」

熊埜御堂 亜聡：「つつーか何だよ「わたしもなんか教えたい」って。逆に何なら教えてくれるんだよ」

あかり：「ふっふっふー、じゃあとおきを教えてあげる！」 そう笑うとあかりは声を潜めて

あかり：「…あのねあのね、当主様が使ってる書斎にはた一つくさん本があるの！ 昼間は当主様以外誰も近づいちゃ行けないんだけど…」

あかり：「……深夜だったらね、こっそりそこに入ることができるの」

小波 絵本：「………！ ……成程。確かに資料館にもない情報があるかもしれないな。教えてくれてありがとう」

熊埜御堂 亜聡：「…へえ、そりやおもしろい情報だな。そこ、深夜なら普通に入れんのか？」

あかり：「うん、鍵自体はかかってないの。でも内緒ね！ 誰にも言っちゃダメよ！ …誰にもよ！」

熊埜御堂 亜聡：「おう、内緒な。」

小波 絵本：「ああ、3 人だけの秘密だ」

熊埜御堂 亜聡：「…じゃあこの先輩が、今の話を聞いて好奇心にかられて書斎にもし行っただとしても、あかりも秘密にしてくれるんだろうな？」

あかり：「それはもちろん！」

熊埜御堂 亜聡：「よかったな、先輩」

小波 絵本 : 「……そもそも情報源が誰なのかはすぐにバレるだろうからな。あかりも秘密にしておくのは当然の事だろう」

小波 絵本 : 「……爽太も口が堅いからな。あかりの口の堅さも信用しているさ」(あかりちゃんの方を見ながら)

あかり : 「ふふふ、うん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「……じゃあそういうことなら、今夜にでも行ってみるか」

小波 絵本 : 「ああ。その前に明香の様子も見に行こう。」

熊埜御堂 亜聡 : 「ああ…、…まあ、先輩ならいいだろう」

熊埜御堂 亜聡 : 明香ちゃんの部屋に寄り道します！

DL : はーい、では明香の部屋に行けば明香はもう寝ていますね

DL : 眠りつつも顔は赤く、ちょっと息も荒いです。

熊埜御堂 亜聡 : 「……もう寝てるな。悪い、先輩。まだ具合は悪そうだ」

小波 絵本 : 「そうか。……早い所 動けるようになってもらえると助かるんだが…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…どうしても動かさなきゃなんねーときがあれば、最悪俺が背負うつすよ」

熊埜御堂 亜聡 : 「……先輩の目の前で背負われたいくなければ、さっさと元気になればよ」 もう一度額を撫でつつ…濡れタオル的なもので額を冷やしてあげたいですね…

DL : ではおでこに冷やしタオルを乗せてあげると、ちょっと表情が和らいだ気がします。

熊埜御堂 亜聡 : 「……。………気が変わった」 それを見て

小波 絵本 : 「……？ 何が？」

熊埜御堂 亜聡 : 「静かに寝かしておいてやるつもりだったが…。先輩。時間になるまで俺はここで明香のこと見てるから、時間になったら呼びに来てくれ」

小波 絵本 : 「……わかった。……お前も少しは休んでおけよ。僕に背負われなくなったらな」

熊埜御堂 亜聡 : 「それだけは絶対に無いから安心してください。…じゃああかり、先輩のことは頼んだ。」

あかり : 「はーい！」

DL : (さて他にやりたいことがなければ深夜まで飛ばしますが、如何でしょう？)

熊埜御堂 亜聡 : 2 人が出て行ったあとは、明香ちゃんの様子を見つつ汗を拭いたりしつつも、あとは明香ちゃんの手を握った状態で、椅子に座ったまま少し休みます！

小波 絵本 : あ、じゃあ少しだけあかりちゃんとお話してもいいですか？

DL : いいですよ！

小波 絵本 : (ありがとうございます！)

小波 絵本 : 「……あかり。少しだけ、話しても良いか？」(すっ) かがんであかりちゃんと目線を合わせます

あかり : 「？ なぁに？」

小波 絵本 : 「………君は、自分の両親の事が好きか？」

あかり : 「？ 急にどうしたの、好きよ？」

小波 絵本 : 「いや、何となく聞いただけだ。…………あのな、」

小波 絵本 : 「…………きっと君の両親も、君と同じ気持ちでいる。その事を忘れないでいてくれ」

あかり : 「……………」

あかり : 「うん、そうね」

あかり : 「ほら、それよりもお客様！ 早く部屋に戻っておかないと変な目で見られるわよ！ 深夜に書斎に行く
んでしょ！」 ぐいぐい

小波 絵本 : 「…………ああ、そうだな。引き留めて悪かった」

小波 絵本 : 「じゃあ、部屋に戻るか。…………おやすみ」あかりちゃんに挨拶して部屋に戻ります

あかり : 「うん、おやすみ！」 ではあかりはあなたをぐいぐいと部屋に押し込み、去っていきます。

DL : (他に何もなければ深夜まで！)

熊埜御堂 亜聡 : (OK です！)

小波 絵本 : (OK です！)

DL : では

DL : ……………

▼ 2 日目 深夜 ——急転

DL : 時刻は深夜、あなた達はあかりに教えてもらった書斎の前にいます。

扉に手をかければ、呆気なく開きます。

DL : 中に入れば天井まで届くほどの大きな本棚があり、確かに貴重な資料がたくさんありそうですね。

熊埜御堂 亜聡 : 「うっわ……」 げっそり

小波 絵本 : 「……思っていたよりも数が多いな…。これは骨が折れそうだ」

DL : 〈*調査〉で判定が可能です

熊埜御堂 亜聡 : …ちなみに〈洞察〉ではいかがでしょう？

DL : 〈洞察〉も OK ですよ！

熊埜御堂 亜聡 : わーいありがとうございます！ クリケ使って振りたいです！

小波 絵本 : あ、ではこちらも〈洞察〉で！

DL : どうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます！

熊埜御堂 亜聡 : 3DM<=8 〈洞察〉 (3DM<=8) > [6, 7, 9] > 2 > 成功数 2 ダブル！

小波 絵本 : 2DM<=7 〈洞察〉 (2DM<=7) > [3, 2] > 2 > 成功数 2 ダブル！

system : [熊埜御堂 亜聡] クリケ : 1 → 2

system : [小波 絵本] クリケ : 1 → 2

DL : では本棚を漁っていれば、……部屋の隅の本棚に他の書物とは違う雰囲気のものを見つかる。

どうやらそれは日記…それもかなりの年代物、大体明治時代辺りのもののようです。

DL : …大体は他愛無い内容、というよりは愚痴に近いものですが…その中にいくつか気になる記述がありました。

[情報] **DL** : ***

娘と一緒にいたい、と男を連れてきた。聞けば貧民の漁師だという。

誰がそんな男と夫婦になることを認めるものか、既にとある資産家へ輿入れの話が来ているというのに。

*

ようやく葬式が終わった。

忌々しい、衆目や家の評判さえ気にしなければあんな娘を男と共に盛大に葬る必要などなかったというのに。

一緒になれないから海に身投げするなど、最後まで恩を仇で返す娘だった。

*

山から鉱石が出土するようになった。詳しい人間に見せれば希少なものと声をあげられた。
何故急に？ しかしこれは好機だ、本土では今宝石が持て囃されている。この鉱石ならば…

*

読みが当たった、鉱石は「ルサルカナイト」「海涙石」などと呼ばれ人気も高い。
島も豊かになり始めた、順風満帆だな。

*

何故だ…！ 鉱石が枯渇しはじめた、まだ希少性を高めることで価値を吊り上げることはできるがこのままでは…！

*

屋敷の子供の声がうるさい、耳障りだ。
この間里帰りした妹が生んだ子供だ、男女の双子など縁起でもない。忌々しい。
…まさか娘と男が帰ってきたとでもいうのか？ だめだ、焦りで頭がおかしくなりそうだ。夜も眠れない。

*

あまりにも声が耳障りなので子供を乳母ごと海に突き落とした。
これで夜も眠れるだろう。

*

何故だ、また鉱石が出土するようになった。
苦悩からは解放されたが謎が残る、どうして、何故、…まさかまた枯渇するかもしれないのか？

*

仕組みがわかった、全てわかった。
いや、全て神が教えてくださった。
まさか本当に生まれ変わりとは、そしてそれが海涙石を生み出す引き金となっているとは。
全て書き記さなくては、この先巨海家が繁栄する為に必要な事だ。
…

男女の双子は心中をした男女と見做して海に帰せ。
その死が海之石神の嘆きとなり、涙となり、涙は石となる。
石は財になり、島の繁栄となる。
繁栄は信仰となり、信仰は古き神が新たな名を得るための礎となる。
巨海の一族はその為に全てを差し出せ、我らが古き神の為。

熊埜御堂 亜聡：「……………」めちゃくちゃしかめっ面
小波 絵本：「……………」

熊埜御堂 亜聡：「…何から何まで自分勝手すぎるだろ。はた迷惑だ、こんな話。」

小波 絵本：「…………真名子さんが因習にあれほど執着していたのは、こういう事だったか…」

熊埜御堂 亜聡：「今この島では、海涙石が取れなくなっている。その上であのばあさんが経営してる老舗の宝石メーカーも、傾き始めてるって話だったな。……そこで分かったんだろうな、娘の妊娠が」

小波 絵本：「…………狂喜している姿が目に見えようだ…」

熊埜御堂 亜聡：「そりゃ娘夫婦も、付き合わされて堪るかって話になるだろうよ。……生まれた子どもだって、そうだ」

熊埜御堂 亜聡：「付き合ってもらえない」

DL：（あ、情報は以上です）

熊埜御堂 亜聡：（はーい！）（亜聡はとても胸くそ悪くなってます）

小波 絵本：（あ、日記のその記述の部分だけ写真撮れますか？）

DL：（いいですよ！）

小波 絵本：（ありがとうございます！）（あとでパパに見せよう…）

熊埜御堂 亜聡：「くそ、とっとと潰れるそんな家…。…先輩、もういいすか」 はっきりイライラしつつ

小波 絵本：「…………ああ、待たせたな。」 では日記を元の位置に戻して出ますか

DL：はーい、では日記を元の位置に戻して書斎を出ようとした…その時だ。

DL：——亜聡くんのスマホがけたたましく鳴り響く。

DL：画面を見れば、そこには「明香」と表示されていた。

熊埜御堂 亜聡：「うおっ。…………、…………明香？」 …嫌な予感がしつつも電話に出ますね

DL：電話に出る、…しかし聞こえるのはノイズばかりで明香やアリスの声は聞こえない。

DL：それから少し遅れて、書斎の外がにわかに騒がしくなる。

ドロシー：『明香…？アリス…？返事して…！』

熊埜御堂 亜聡：「…………おい、明香どうした。明香、聞こえねーぞ！」

小波 絵本：「…………？待て、外が騒がしい」

DL：声をかけても返事はない、…そのうち通話すらも切れてしまう。

かけ直そうとしても無情にもスマホの画面には「圏外」の文字が表示された。

熊埜御堂 亜聡：「っ、！ …くそ、切れた」

熊埜御堂 亜聡：「外がなんだってんだよ。俺は今すぐ明香の部屋に行きてーんだが」

小波 絵本：＜聞き耳＞で外の様子を探れますか？

DL：いいですよ、どうぞ！

小波 絵本 : 2DM<=7〈聞き耳〉(2DM<=7) > [3, 6] > 2 > 成功数 2 ダブル!

[茶番] system : [小波 絵本] クリケ : 2 → 3

DL : では外の騒がしさは何かしらの言い争いであること、そしてそれが草間と……久永の声であることがわかります。

小波 絵本 : 「………! この声は…」

小波 絵本 : 内容については聴き取れますか?

DL : そうですね、とりあえず「落ち着いてください」と「いいからあいつらを出せ、返せ」という繰り返しが聞こえます。

小波 絵本 : (了解です!)

小波 絵本 : 「……行くぞ。見つかったも問題ない相手だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「は? 話が読めねーんだが、…おい先輩!」 追いかける感じで外に出たいです!

小波 絵本 : では戸惑ってる亜聡君をほっといてさっさと出ます

DL : では外を出ると言い争いはよりハッキリと聞こえますね

草間 : 「落ち着いてください! 私にも一体何が起きているのか…!」

熊埜御堂 久永 : 「何がじゃないだろう! 巨海の目的はとつくのとうに割れてる! 早くあいつらを連れてここから脱出するぞ! 三人ともどこにいる!」

DL : 言い争っている草間と久永、そして二人に挟まれて戸惑った顔をしている爽太が見えます。

熊埜御堂 亜聡 : 「……は、」

小波 絵本 : 「……はあ…、やっぱり…」(頭を抱えながら)

熊埜御堂 亜聡 : 「…おいどうなってんだあれ…、親父!」 声掛けて近づきますね

熊埜御堂 久永 : 「! 亜聡、無事だったか! 小波くんも!」

熊埜御堂 亜聡 : 「それはこっちのセリフだ!」

熊埜御堂 久永 : 「明香はどうした、早くこの島から出るぞ! 巨海 真名子…あの女は危険だ!」

小波 絵本 : 「久永さん、落ち着いて下さい…。……そんなに大きな声を出したら、それこそ真名子さんに見つかってしまいます」

熊埜御堂 亜聡 : 「今までどこほつき歩いてたんだよ…! あのばあさんの話なら一から説明しなくていい。明香はさっきまでは部屋にいたはずだ」

熊埜御堂 久永 : 「なら今は!? 一緒じゃないのか!」

熊埜御堂 亜聡 : 「あいつ今朝から体調崩してて、今日はずっと部屋で寝てた。今も同じだ。だけどさっき、あいつから変な電話がかかってきて……すぐ切れた」

ドロシー : 『アリスも返事しないの…。一体、何が起きているの…?』

熊埜御堂 久永：「っ、まさか一足遅かったか…？ 亜聡、来い！ 見に行くぞ！」

DL：久永はそう言うと明香が泊まっていた部屋へと向かっていきます。

熊埜御堂 亜聡：「あ、おい待って、親父！」 走って追いかけますね！

小波 絵本：「っ、草間さん！ すみませんが一緒に来て下さい！」

草間：「っ、はい！」

DL：ではあなた達は連れだって明香の部屋へ向かい、そこに飛び込んだ。

……しかし、そこに明香の姿はなかった。

熊埜御堂 亜聡：「っ、…な、…明香…！？」

熊埜御堂 久永：「くっ、遅かったか……」

小波 絵本：「っ……！」 辺りに何か痕跡が残っていないか確認します！

熊埜御堂 亜聡：「おい……一体何が起こってんだ。親父は何か知ってんのか」こちらはめちゃくちゃ低い声でパパに聞きますね

DL：〈*調査〉〈洞察〉等が振れます、どうぞ！

小波 絵本：では〈洞察〉で！

小波 絵本：2DM≤7〈洞察〉(2DM≤7) > [4, 8] > 1 > 成功数 1 成功！

DL：では、小波先輩は明香が寝ていたベッドの下に錠剤が一つ転がっているのに気づきますね。

小波 絵本：「……？ この錠剤は…？」拾い上げます

DL：〈*知識〉〈鑑定〉〈専門知識：医療 or 薬学〉で何の薬か分かります

小波 絵本：ではクリチケ使用で〈知識〉を…！

DL：どうぞ！

[茶番] system：[小波 絵本] クリチケ：3 → 2

小波 絵本：2DM≤5〈*知識〉(2DM≤5) > [6, 1] > 2 > 成功数 2 ダブル！

[茶番] system：[小波 絵本] クリチケ：2 → 3

DL：では小波先輩はその薬が「利尿剤」である事に気づき、…それにプラスして利尿剤の副作用に「発熱」がある事を思い出します。

小波 絵本：「これは…、確か利尿剤、だったか…？ 副作用に発熱の症状が出ると聞いた事が…」

熊埜御堂 亜聡：「、…は…？ 風邪薬じゃないのか？ …薬は、草間さんが持ってくるって明香が…」では思わず草間さんの方を

草間 : では草間は顔を青くしてその薬を見えています。

草間 : 「……私が用意した薬とは違うものです。……私が用意して、あかりに持って行くようお願いを……」

熊埜御堂 亜聡 : 「……あかり？」

小波 絵本 : 「……どこかですり替えられたのか……」

草間 : 「……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「…。草間さん、あかりは今どこにいるか分かってんのか。嫌な予感しかない」

草間 : 「……見当たりません」

熊埜御堂 亜聡 : 「、……！」

小波 絵本 : ちなみに爽太君は今 近くに居ますか？

DL : 部屋の外から様子を伺っていますね

小波 絵本 : 「爽太、あかりを最後に見たのはいつだ？」 声を掛けます

爽太 : 「……ね、寝る前…です」

爽太 : 「一回起きてから、…今までは、見てない…です」

小波 絵本 : 「……………これは、かなりまずい状況なのは…？」

熊埜御堂 久永 : 「……ああ、小波くんの言う通りだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「一体何が起きてる。説明しろ親父」

熊埜御堂 久永 : 「ああ、…まずは俺が今まで何をしていたかを説明させてくれ」

熊埜御堂 久永 : 「昨日の深夜、俺は屋敷をこっそり出ていく白戸さんを追いかけて…鉾山に登ったんだ」

熊埜御堂 久永 : 「そして追いかけていたら鉾山の上の上まで行っちゃってな、…そこで白戸さんと巨海さんが口論をしているのを見ちゃってな」

熊埜御堂 亜聡 : 「白戸さんとあのばあさんが…？」

熊埜御堂 久永 : 「ああ、……その果てに」

熊埜御堂 久永 : 「巨海さんが白戸さんを崖から突き落とすのも、見たんだ」

熊埜御堂 亜聡 : 「っ、！」

小波 絵本 : 「……そんな事が…」

熊埜御堂 久永 : 「ああ、だから慌てて隠れながら山を下りて海岸まで行って……そこで爽太くんに来て、身を隠すために船を借りたんだ」

爽太 : 「は、はい…ごめんなさい、黙ってて…そんなことになってるなんて、知らなくて…」

小波 絵本 : 「いや、君は悪くないから気にするな」

熊埜御堂 久永 : 「それで深夜のうちにこっそりお前達を屋敷から逃がそうとしたんだが、……一足遅かったな」

小波 絵本 : 「それで草間さんと鉢合わせになって、あの口論になったんですね…」

熊埜御堂 久永 : 「ああ、…だが君達がそんな態度をとるってことは…草間さんは大丈夫そう、って事でいいか？」

熊埜御堂 亜聡 : 「…ああ。草間さんと、あと土産屋のおっさんは味方らしい」

熊埜御堂 久永 : 「おう、了解」

熊埜御堂 亜聡：「だいたいの事情はわかった。…が、それなら明香はどこに連れて行かれた？ あいつ、今は立ってまっすぐ歩けるかもわからないような状態だったんだぞ」

熊埜御堂 久永：「……恐らくだが、あの鉱山の上だ。…そうだろう、草間さん」

草間：「……はい、恐らくは…ですが」

小波 絵本：「……まさか…、あの儀式を実行しようと…？」

熊埜御堂 亜聡：「…！ ……ふざけんな、させるわけねーだろそんな事」

熊埜御堂 久永：「ああ、その通りだ。出遅れちまったがまだ急げば間に合う」

熊埜御堂 久永：「草間さん、俺はこれから鉱山に向かう。良かったらアンタもついて来てほしい、…子供達は……」

草間：「承知いたしました。……亜聡様と爽太には待機をしてほしいのですが、……そういうワケにも行かないでしょう」

熊埜御堂 亜聡：「ふざけんな行くに決まってるだろ。爽太、お前も来い」

爽太：「は、はい！」

熊埜御堂 亜聡：「お前の姉ちゃんも関係してんだ。…放っておけるわけがねえだろ」

小波 絵本：「僕も行きます。亜聡に「協力してやる」と約束しましたから」

草間：「……わかりました」

草間：「鉱山内部は危険です、決して単独行動はしないようお願い致します。…最短ルートで頂上へ向かいます、決してはぐれないように」

熊埜御堂 亜聡：「ああ、わかった」

小波 絵本：「わかりました。……爽太、行けるか？」

爽太：「っ、…だいじょうぶです！」

熊埜御堂 久永：「…そうだ、その土産屋の兄ちゃんも連れていけねえか？ 頭数、特に大人は多い方がいい」

小波 絵本：「そうですね。ついでに武器になりそうな物があればお借り出来ないかと」

熊埜御堂 亜聡：「俺はいらないから先輩らに任せる。両手はあけておきたいからな」

DL：ではあなた達は鉱山へ向かう前に土産屋へ…でよろしいでしょうか？

熊埜御堂 亜聡：OK です…！

小波 絵本：はい…！

DL：……

DL：みやげ屋「なみだめ」、表には「閉店中」の看板が出ていた……が、店先には押火が立っていた。その手には布に来るんだ長物が抱えられている。

押火：「お、来たな」

熊埜御堂 亜聡：「何が「来たな」だよ状況わかってんのか」

押火：「見慣れない坊さんが爽太と一緒に走ってるのを見かけてな、…何かあったんだろうと」

小波 絵本：「察しがいいと言うかなんと言うか…。助かりますが…」

熊埜御堂 亜聡：「明香が、巨海のはあさんと草間さんの娘と一緒に消えた。今から鉱山の方に迎えに行く。あとは察してくれ」

押火：「おう」そう答えると押火は腕の中の長物を……小波先輩へと押し付けます。

押火：「覚えあるんだろ、使いな」

小波 絵本：「これは…、」長物をしげしげと見つめます

DL：布を取れば、そこには立派な……はじめて店を訪れた時、押火が砥いでいた刀がありました。

小波 絵本：「……こんな大事なモノをホイホイと…、と言いたい所ですが…ありがとうございます」

押火：「おっさんだからな、戦うとしても動けねえ。そういうのは健康的な若者に頼むに限る」

小波 絵本：「では遠慮なく使わせて貰います」刀をしっかりと装備します

熊埜御堂 亜聡：「…助かる。先輩。」

熊埜御堂 亜聡：「…それじゃあおっさん。あんたも来てくれるな」

押火：「おう、それはもちろん。……草間」

草間：「……押火」

押火：「ま、いずれはこんな日も来てたさ。……今日で終わらせられるんだ、別に良いだろ」

草間：「……。皆さん、行きましょう。時間に余裕はありません」

小波 絵本：「はい…！」

熊埜御堂 亜聡：「おう」

DL：ではあなた達は草間の案内で鉱山へ向かう。

………

DL：あなた達は鉱山の入り口に立っている、草間の先導でこれから山の上へと向かう。

草間：「注意事項としてこの山に立ち入らないよう繰り返していたのは、亜聡様と明香様に危険が及ばないよ
うという目的がありましたが…普段この山が立ち入り禁止となっているのは本当です。落石の危険性があるのも」

草間：「ですので、なるべく私から離れないようにお願いします。そして万が一はぐれてしまった場合は、無理に
合流しようとはしないでください」

熊埜御堂 亜聡：「…はぐれた時は、各自で進めばいいのか？」

草間：「出来ればその場から動かないでいただきたいですが、この状況ではそう言い含めても聞いてはいただけ
ないでしょうから」

熊埜御堂 亜聡：「おー、わかってんじゃねえすか。じゃあもしはぐれたら勝手に進むんで」

小波 絵本：「わかりました。出来る限りはぐれないようには努力します」

爽太：「き、きをつけます…っ！」

DL：では、このまま鉱山の中に入りますか？

熊埜御堂 亜聡：亜聡は OK です…！入ります！

小波 絵本：入ります！

DL：ではあなた達は一塊になって鉱山へ踏み入っていく。

DL：………

▼ 2 日目 深夜 —— 相対

DL : 中に入れば薄暗く、湿った空気と土の匂いがあなた達を出迎える。

どことなく嫌なものが纏わりつき、あまり長居をしたいとは思わないでしょう。

DL : 草間の先導で入り組んだ鉱山内部を進んで行く、しかし徐々に道が細くなっていきあなた達は自然と一列になって進んで行く。

DL : 特に希望がなければ前の方に草間、久永、押火、後ろの方にあなた達と爽太…の順で進んで行くことになります

小波 絵本 : あ、小波は武器持ってるのでしんがりを務めます

DL : なるほど、なら他に変更がなければ草間、久永、押火、亜聡くん、爽太、小波先輩の順になるかな？

熊埜御堂 亜聡 : じゃあ細かいこだわりですが、亜聡は爽太君より一步後ろを歩きますね。爽太君真ん中。

小波 絵本 : こちらはそれで OK です！

DL : 了解です！

DL : ではあなた達はそんな順番で進んで行く、……道中気を紛らわせる為に話をしているかもしれないし、そんな場合じゃないと黙り込んでるかもしれません

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」 亜聡は黙って前を向いて進んでますね。ときどき、すぐ前を歩く爽太君をチラ見するぐらい

爽太 : 「……？」 ではそれに気づきつつ何も言わない(言えない)…

DL : では重苦しい雰囲気の中なるべく速足で進んで行く中……〈*知覚〉〈聞き耳〉〈危機察知〉をどうぞ

熊埜御堂 亜聡 : …〈危機察知〉で！

小波 絵本 : では〈聞き耳〉で

DL : どうぞ！

小波 絵本 : 2DM<=7 〈聞き耳〉 (2DM<=7) > [2, 7] > 2 > 成功数 2 ダブル！

熊埜御堂 亜聡 : 1DM<=5 〈危機察知〉 (1DM<=5) > [5] > 1 > 成功数 1 成功！

system : [小波 絵本] クリケ : 3 → 4

DL : では亜聡くんは何やら嫌な予感が過ぎると同時に、小波先輩の耳に「ズズ…」という、何かしらが動く…？ 這う？ ような音が聞こえます。

熊埜御堂 亜聡 : 「…っ、…………？」 ぞくとした腕を一瞬かかえて、周囲を見回す

小波 絵本 : 「……待て、何か聞こえる」 身構えます

DL : どちらにせよ、あなた達はその場で足を止めてしまうでしょう。

爽太 : 「…？ お二人とも、どうされたんですか？」

熊埜御堂 亜聡：「いや…今、なんか気配が」

小波 絵本：「何かが動くような、這うような音が聞こえた」音はどこから聞こえるかわかりますか？

DL：二人の様子に気づいた爽太が駆け寄ってくる。

そして小波先輩が音の出处を探ろうとした、…とほぼ同時に。

熊埜御堂 久永：「おおっ！？」

DL：という久永の叫び声と共に、目の前から轟音が響く。

何事かとそこに目を向ければ……前を行っていた筈の三人の姿が消えています。

熊埜御堂 亜聡：「……、…っ親父？」

小波 絵本：「……っ！？久永さん…？草間さん、押火さん！」

熊埜御堂 亜聡：一瞬ぼかんとして、慌てて周囲を見回します！

DL：周囲を見回せば、先ほどまで三人がいた場所に大きな穴が空いているのが見えます。

慌てて穴を覗けば、そう深くはない…がすぐには上がってこれない程度の深さの穴に三人が倒れているのが見えます。

DL：すぐ起き上がってくるので、大事には至っていないようです。

熊埜御堂 亜聡：「…な、」

熊埜御堂 亜聡：「何やってんだよ親父」

熊埜御堂 久永：「いってて……いや心配しろお前！」

小波 絵本：「地盤が沈下したのか…？……3人とも、大丈夫ですか？」

草間：「う……ええ、どうやらそのようです。……この高さだとすぐには上がれなさそうですね」

爽太：「お、お父さん…！」

草間：「大丈夫ですよ、……ですがそのまま先を進むのは危険です。先ほどの道を戻って、分かれ道があった箇所から別の道へ行ってくださいますか」

熊埜御堂 亜聡：「……。それはいいが、3人はどうするんすか」

草間：「……また別の道を行くしかないでしょうね」

小波 絵本：「……心配ではありますが、今は時間がない。そうするしかなさそうですね」

熊埜御堂 亜聡：「よし来た。じゃあここから親父たちとは別行動だな」

熊埜御堂 久永：「まあ、そうなるな……無理はするなよ」

熊埜御堂 亜聡：「……おう。わかった」

熊埜御堂 亜聡：「だから、あとからゆっくり肩車で上がってこい親父。行くぞ先輩」来た道くろり

押火：「その場合誰が下なんだ…」

熊埜御堂 亜聡：「おっさん3人でじゃんけんで決めろ」

小波 絵本：「……爽太、君はどうする？僕達と一緒に進むか、この場に残るか」

爽太：「え、えと……一緒に行きます…お姉ちゃんも、お客様も心配ですから…っ」

小波 絵本：「わかった。足元には気を付けるんだぞ」

爽太 : 「はい…！」

DL : では、あなた達は草間に指示されたルートを再び進む為、落ちた三人と別れてまた別のルートを進んで行きます。

DL : ここで〈*調査〉もしくは〈マッピング〉をお一人 3 回ずつ振ってくださいませ！

熊埜御堂 亜聡 : うおお…！では〈マッピング〉でいきます！

小波 絵本 : 〈マッピング〉無いので〈調査〉で…！

DL : どうぞ！

小波 絵本 : あ、クリチケも使えますか…？

熊埜御堂 亜聡 : あ、こちらも念のため使いたいです…！

DL : 使えますよ！ただし一回につき一枚だけです

小波 絵本 : 4 枚あるし 3 回全部使ってきます…！

熊埜御堂 亜聡 : こちらも 3 枚あるし 3 回全部使おう…

system : [小波 絵本] クリチケ : 4 → 1

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 3 → 0

DL : 了解です、ではどうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=5 〈マッピング〉 (2DM<=5) > [3, 5] > 2 > 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=5 〈マッピング〉 (2DM<=5) > [7, 10] > -1 > 成功数-1 ファンブル!

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=5 〈マッピング〉 (2DM<=5) > [5, 3] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 0 → 2

熊埜御堂 亜聡 : 草

DL : お、おお…とりあえずクリチケ 2 枚どうぞ

小波 絵本 : 女神、ステイ

小波 絵本 : 2DM<=4 〈*調査〉 (2DM<=4) > [8, 10] > -1 > 成功数-1 ファンブル!

小波 絵本 : 2DM<=4 〈*調査〉 (2DM<=4) > [2, 6] > 1 > 成功数 1 成功!

小波 絵本 : 2DM<=4 〈*調査〉 (2DM<=4) > [9, 8] > 0 > 成功数 0 失敗!

小波 絵本 : おい

熊埜御堂 亜聡 : 女神 ???

DL : ではあなた達は盛大に道に迷うこともなく、しかし近道や隠れ道等を見つけるワケでもないままに進んで行く。

DL : ……そうして鉾山を登り続け、足場も悪くなってきた頃。どこからか話し声が聞こえてくる。

あかり : 「…ね、ねえ…当主様…お客様、本当にここに置いていていいの…？ 本当に来るの…？」

DL : ——あかりの声だった。

DL : このまま進めば、彼女のいるところへ間違いなくたどり着けるでしょう。…進みますか？

熊埜御堂 亜聡 : そうですね…、あかりちゃんの声が聞こえるところは、今亜聡たちがいる場所から直線上の位置ですか？ それとも、道は多少入り組んでいそうでしょうか。

熊埜御堂 亜聡 : もし道が入り組んでいて、道を曲がった先にあかりちゃんがいそうなのであれば、少し立ち止まって影から様子を伺い見てみたいのですが…

DL : 多少足場は悪いでしょうがほぼ直線上ですね。そのまま進んでしまえば恐らく間違いなく見つかってしまいそうだな、と思います

小波 絵本 : そうですね…、小波は＜隠匿＞を持っていますので、成功すれば身を隠しながら様子を伺えませんか？

DL : そうですね…＜幸運＞に成功すれば身を潜めるのにちょうどいい岩場を見つけられたことにしましょう更に＜隠匿＞に成功すれば完全に隠れて安全に様子を伺うことができます。いかがでしょう？

小波 絵本 : やるだけやってみましょう…。ではまず＜幸運＞で！

DL : どうぞ！

小波 絵本 : 1DM<=4（＊幸運）(1DM<=4) > [4] > 1 > 成功数 1 成功！

DL : えら…

小波 絵本 : イチタタ！

DL : ありました三人揃って身を隠せそうな岩場が！

小波 絵本 : ではクリチケ使って＜隠匿＞振りたいです！

DL : どうぞ！

system : [小波 絵本] クリチケ : 1 → 0

小波 絵本 : 2DM<=5（隠匿）(2DM<=5) > [5, 3] > 2 > 成功数 2 ダブル！

system : [小波 絵本] クリチケ : 0 → 1

小波 絵本 : 「……！……亜聡、爽太…」 小声で 2 人を手招きします

熊埜御堂 亜聡 : 「、……。…目ざといすね、先輩」 素直に先輩の方へ

爽太 : 「わ、わ……」 とてつと

小波 絵本 : では 3 人でぎゅうぎゅうになりながら隠れます

熊埜御堂 亜聡 : 「せま」

爽太 : 「ぎゅう…」

小波 絵本 : 「うるさい」

熊埜御堂 亜聡 : 「文句すら言わせてくれねーこの先輩」

DL : ではあなた達は岩陰に潜んで声のする方の様子を伺う。

そこからは詳しい光景は見えません。

しかし何かしらの光に照らされた三つの影があり、その中で一番小柄な影だけが大きく動く様子が見えました。

DL : その影が動くのに合わせて「本当にだいじょうぶ…?」「ねえ、当主様!」というあかりの焦った声が聞こえます。

あかり : 「わたし、当主様の言う通りにしたでしょ! お客様を山に入れなかったし、お薬もちゃんと言われた通りのやつ出したし! それに二人に本のある場所を教えてこの人の部屋から引き離れたし…!」

あかり : 「これでお父さんは自由になれるんですよ! 爽太も外の学校に行けるんですよ! ねえ、なんで何にも答えてくれないの? どうしてこの人はずっと眠ったままなの?」

DL : 矢継ぎ早に投げられる言葉、しかしそれに返事はなく「なんで」「教えて」という困惑した声が聞こえます。……これ以上は目立った動きはないようです。

熊埜御堂 亜聡 : 「……………」

小波 絵本 : 「…………だ、そうだ。……どうする? 行くか?」

熊埜御堂 亜聡 : 「…当たり前だ。」

熊埜御堂 亜聡 : 「爽太も行くだろう」

爽太 : 「……………」

爽太 : 「はい…!」ぎゅつ、と拳を握りしめて

熊埜御堂 亜聡 : 「ん。…お前の姉ちゃんだ、お前が何とかしろ」

爽太 : 「が、がんばります…!」

熊埜御堂 亜聡 : では、亜聡は岩の影から出て、声のする方へと進んでいきます!

小波 絵本 : 小波もその後に続いて出ていきます!

熊埜御堂 亜聡 : 「—— よお、あんた等。待ち人は来たか?」

DL : ではあなた達が岩影を飛び出し、声のする方へと向かえばそこには異様な光景が広がっていた。

巨海 真名子 : 大きな祠と小さな祠が並び、その周囲を無数の蠟燭が取り囲んでおり、その前に真名子が無表情で立ち尽くしている。

あかり : そこから少し離れた場所にあかりが座り込み、あなた達の姿を見て驚いた表情のまま固まっていた。そしてその傍らに

熊埜御堂 明香 : 固く目を閉じた明香が地面に横たわっている。

意識はないようだが、息はあり顔は赤く呼吸は荒い。その手には電源が落ちたスマホが握られていた。

熊埜御堂 亜聡 : 「……やっぱりここにいたか。明香。」

あかり : 「っ、ち、近寄らないで!!」

DL : あなた達の姿を認めるとあかりが前に出て静止する。

そこには普段の底抜けの明るさはなく、あなた達に対する強い敵意と警戒心が剥き出しになっている。

熊埜御堂 亜聡 : 「…」では一旦、足を止めて

熊埜御堂 亜聡 : 「……あかり。…お前は一体、何をやってんだ？ 今お前がやってることがどんなことか、わかってんのか」

あかり : 「わわわわわわ！！」

あかり : 「だって、だってこうしなきゃずっとお父さんはこの島にいなさいいけない！」

あかり : 「ずっと当主様の傍にいて、お母さんの墓参りにも行けなくて、わたし達のお父さんだってことすら言えなくて！」

あかり : 「そんなのおかしいでしょ！ だからわたし、どうしてって当主様に聞いたの！ そうしたら——」

あかり : 「——「双子がいけないせいだ」って、「みんなが双子を連れて行ったせいだ」って」

あかり : 「…「双子がこの島に戻ってくれば、ここに永遠にいてくれれば、お父さんは自由になれる」って…だから、だから」

熊埜御堂 亜聡 : 「馬鹿かお前は」

熊埜御堂 亜聡 : 「お前ら親子の話は聞いた。……お前はこの問題をはき違えさせられてる。お前が父さんと島を出られないのは、俺等が原因じゃない。お前が加担した、そのばあさんが原因だ」

熊埜御堂 亜聡 : 「それにだ。…黙ってこんなことして、お前は自分の父さんのこと信用してねーのか。」

あかり : 「っ……だって何にも話してくれない！！」

あかり : 「何にも教えてくれない、何にも話してくれない、わたしにいろいろ教えてくれたのは当主様だけだった！」

あかり : 「っこどもだからってバカにして！ 理由もなんも言ってくれないのにしんじるなんてできっこないじゃん！」

あかり : 「でも大好きだから、大事だから、わたしがなんとかしたくて……」

小波 絵本 : 「……………」

熊埜御堂 亜聡 : 「……はあ。なんでこうも…疑わねーんだ。お前らは。」

熊埜御堂 亜聡 : 「ぶつけたかその言葉。お前の父さんに。力になりたい、なれないのが苦しいって、ちゃんと伝えたかお前。」

熊埜御堂 亜聡 : 「いや、そんなことは、この際俺はどうだっていい。…お前の父さんが今まで慎重に積み上げてきたものを、たった今、お前が崩してんだ。自覚しろ」

爽太 : 「……お姉ちゃん……」

小波 絵本 : 「……………僕からも一つ、言わせてもらおう」

小波 絵本 : 「……相手の事が大事だから、その人を縛るものを取り払いたい、自由にしてやりたいという想いはわかる。だがな……」

小波 絵本 : 「……お父さんは本当に君にそうして欲しいと望んでいるのか？ 君にこんな、誰かを傷つけて、踏みにじるような真似をして欲しいと望んでいるのか？」

小波 絵本 : 「はっきり言おう。それは君のエゴでしかない。……自分自身のエゴを、相手の望みにすり替えるんじゃない。」

あかり : 「っ、うるさ、」

そうあかりが声を張り上げようとした瞬間、

巨海 真名子 : 「——いいのよ」

巨海 真名子：「いいの、あかりちゃん。あなたは間違っていないわ」

巨海 真名子：「だって、あなたはこうして——」

巨海 真名子：『——贅の双子をここまで連れて来てくれたのだからな』

DL：真名子の声が変わる。

まるで地の底から響き渡るほどに恐ろしく低い。

熊埜御堂 亜聡：「、……………！？」 声が変わったことに驚いて、真名子さんの方へ視線を向けます

小波 絵本：「な…、声が…？」

DL：真名子へ目を向ければ、そこにいるのは普段の真名子——でなかった。

口元には歪んだ笑みを浮かべ、まるで獲物を見るような目であなた達…亜聡くんを見つめています。

熊埜御堂 亜聡：「——っ！……」 …じっと睨み返します。できれば明香ちゃんは視界にとらえたままで…

小波 絵本：「——！！」刀を抜いて身構えます

DL：と、ここで共鳴判定（強度 4／上昇 1）共鳴感情は支配(関係)です

小波 絵本：2 人ともルーツの属性一致してますね…

熊埜御堂 亜聡：ルーツ属性一致してる… ハイ…

熊埜御堂 亜聡：…振ります！

小波 絵本：振ります！

熊埜御堂 亜聡：(2+1)DM≤4 共鳴判定（ルーツ属性一致）(3DM≤4) > [2, 5, 6] > 1 > 成功数 1 成功!

小波 絵本：(2+1)DM≤4 共鳴判定（ルーツ属性一致）(3DM≤4) > [5, 1, 7] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：2 → 3

system：[小波 絵本] 共鳴：2 → 3

DL：では、あなた達は真名子の目を見ていると言い知れぬ不安を覚えます。

それと同時に確信する——こいつは真名子ではない、と。

巨海 真名子：『ふん、忌々しい刀まで持ち出してきたか……まあいい、ただの童にかつての英雄の真似事などできようはずもない』

熊埜御堂 亜聡：「、…お前は…」

小波 絵本：「真名子さん…、じゃないな。お前は誰だ？」

巨海 真名子：『我が名は古々神』

巨海 真名子：『かつてこの島を支配した、お前達など足元にも及ばぬ神よ』

巨海 真名子：『まあ、とうの昔に元の名と姿は失っているがな…故にこのような老婆に憑りつかざるを得なくなっている…』

巨海 真名子：『だがそれも今日まで…再び贅を殺し、海淚石と共に我が信仰をこの世に広め…』

巨海 真名子：『そして再び名と姿を得て返り咲く……！』

DL：真名子——否、古々神がそう言うと同時に倒れ伏した明香の体が不可思議な力で動き出し、古々神の近くへと放り投げられる。

熊埜御堂 亜聡：「、…！？ 明香！！」

小波 絵本：「っ、おい、一体何をする気だ！？」

巨海 真名子：『さあ、早くお前もこちらへ来い…新たな犠牲となり、その死で海之石神を嘆かせるのだ…』

DL：そう言って暗い瞳でじっと亜聡くんを見つめる古々神、…その瞳を見ていると自然と体が動き出しそうになる。

このままでは…！

熊埜御堂 亜聡：「、…………！？」ぐぐぐ、

小波 絵本：「……古々神、と言ったか？」

小波 絵本：「さっきのお前の話についてだが……一つ、面白い話を聞かせてやる。」

小波 絵本：「僕の知り合いにお前とは少し違うが…、要は自分の望むように世界を作り変えたいと望んだ奴がいた。そいつは今、どうなったと思う？」

巨海 真名子：『なんだ？ 急に…今は矮小な人間のこぼを聞いてやる暇などないというのに』

小波 絵本：「そいつは今……、スマホに封印されて、変態に囲われて暮らしている。……どうだ？ 面白い話だろう？」

巨海 真名子：『くだらん話だ…そのような話をする暇があるなら、早くその人間を私に寄越せ…っ』

小波 絵本：「……つまり、僕が言いたいのは…」

小波 絵本：「そういう目に遭いたくなければ、大人しくこの島に留まっているという事だ…！」

言いながら、古々神に斬りかかります！

DL：では、あなたは迷いなく古々神へと斬りかかる——〈日本刀〉どうぞ！

小波 絵本：はい！ クリチケ使います！

DL：どうぞ！

system：[小波 絵本] クリチケ：1 → 0

小波 絵本：2DM<=6〈武術（日本刀）〉(2DM<=6)> [10, 5]> 0> 成功数0 失敗!

小波 絵本：おい

DL：では日本刀を振るうが切っ先は古々神にかすりもしない——が、しかし。

DL : そちらに気が逸れた古々神が亜聡くんから目を離れた瞬間にあなたの体は自由に動くようになり、また古々神の一瞬の隙が生まれます。
何か一つ行動ができそうです、どうしますか？

熊埜御堂 亜聡 : 「、…！」 体が動くようになったことで、はっと決意を固める

熊埜御堂 亜聡 : …明香ちゃんって遠いですか！

DL : そんなに距離は離れていません

熊埜御堂 亜聡 : ならば、先輩が作ってくれた隙に気付いた途端、亜聡は真っ先に明香ちゃんに向かって走り出します！奪還したいです！

DL : 〈*運動〉〈危機察知〉などで無事に奪還することができますでしょう！どうぞ！

熊埜御堂 亜聡 : ここは〈危機察知〉で…！クリチケ使います！

DL : どうぞ！

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 2 → 1

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=5 〈危機察知〉 (2DM<=5) > [1, 3] > 3 > 成功数 3 トリプル！

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 1 → 2

熊埜御堂 亜聡 : よっしゃあ！！！！

DL : ふあつ

小波 絵本 : ひゅー！

DL : ではあなたは弾かれたように走り出し、そのまま古々神の隙をついて気絶した明香を奪還します…！

熊埜御堂 亜聡 : 「っ、！……明香！！」 明香ちゃんをすくい上げるように抱き上げて、そのまま走り抜けるようにして先輩のもとへと戻ります！

巨海 真名子 : 『っ、貴様…！』

DL : ではそれを追うようにして古々神が手を伸ばす——そのまま襲い掛かってくる！

DL : 戦闘開始です！

熊埜御堂 亜聡 : 「、…………ふざけるな…………ふざけるな、何が神だ。何が信仰だ。」

熊埜御堂 亜聡 : 「付き合ってもらえるか、そんな話。…………俺たちの命と引き換えに得られる宝石なんか、なくなってもいい。…俺たちの命と引き換えに得られる神なんか、死んでもいい。」

熊埜御堂 亜聡 : 「——ここにいるのは、俺の命より大事な俺の片割れだ。絶対に、死なせない。」 じろりと睨んで、…戦闘態勢！

DL : 敵側は真名子…もとい古々神、あかりが参加します。あかりは古々神を庇うようにして前に出ます

DL : 爽太を忘れてました…爽太も参加します！

DL : 爽太は自分の手番で 1DM<=6 〈説得(社交術)〉をあかりに向かって行い、説得しようとする

もし成功すればあかりは戦闘から離脱します

小波 絵本 : ちなみにですが、爽太君の〈説得〉を PC 達でサポートする事は出来ますか？

熊埜御堂 亜聡 : 同じことを確認させていただきたいです！ > 爽太君の〈説得〉を PC 達でサポート

DL : どのような方法でのサポートを想定されておいででしょうか？

熊埜御堂 亜聡 : そうですね……亜聡なら、例えば〈心理〉を使用してあかりちゃん & 爽太くんの気持ちを感じ取った上で、腹を割って話させるために適切な煽りができればいいな、とか…

小波 絵本 : 例えばですが〈心理〉であかりちゃんの心理状態を爽太君に詳しく伝えるとか、〈ディベート〉で爽太君に「こういうことを言った方がいいんじゃないか」という風にアドバイスするとか…

DL : 了解致しました、可能です！

DL : ちなみに刀…海鳴切に対しても〈洞察〉や〈直観〉を振る事が可能です

小波 絵本 : お、了解です！

DL : 他は大丈夫そうでしょうか？ OK でしたら 1 ラウンド目、小波先輩からどうぞ！

小波 絵本 : では海鳴切に対して〈洞察〉で！

DL : どうぞ！

小波 絵本 : 2DM<=7 〈洞察〉 (2DM<=7) > [6, 2] > 2 > 成功数 2 ダブル！

system : [小波 絵本] クリケ : 0 → 1

DL : では小波先輩は海鳴切を観察する。

聞けばこの島に伝わる、かつて古々神を切り伏せた神刀だという。

DL : ——ならば、悪しきもの…悪しき神だけを切り伏せる事が可能なのではないだろうか？

例え少女が、人が神を庇ったとしても神だけを斬ることが……

DL : …この刀が「そうだ」と教えてくれているような気がする。

ふと、そんな突拍子もないことが頭に浮かびますね。以上です。

小波 絵本 : 「……”あの刀”と同じ感じがする…。ひょっとして、これなら…」

巨海 真名子(古々神) : では次、古々神。

巨海 真名子(古々神) : 古々神は懐から何かを取り出し、あなた達に突き付ける——それは手に収まるほどの小さな凶器、拳銃。

巨海 真名子(古々神) : choice[亜聡くん,小波先輩] (choice[亜聡くん,小波先輩]) > 亜聡くん

巨海 真名子(古々神) : 『まずは双子から無力化させてもらおうか…』

熊埜御堂 亜聡 : 「っ！」 狙いをつけられたことに気付いて睨みつける！

巨海 真名子(古々神) : 1DM<=3 〈拳銃〉 (1DM<=3) > [9] > 0 > 成功数 0 失敗！

巨海 真名子(古々神) : だが細身の真名子では狙いが定まらず、銃弾はあらぬ方向へ

熊埜御堂 亜聡：「っ、……くそ、やばいもん持ってやがるぞあの神。」

爽太：「はわわ…」

小波 絵本：「本当に手段を選ばないな…」

あかり：次はあかりですが、何もせずにあなた達を睨みつけています。

DL：お次、亜聡くん！

熊埜御堂 亜聡：では、先ほどお伝えしたような感じで、＜心理＞を利用して爽太君の説得をサポートしたいです！

DL：どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：2DM≤8〈心理〉(2DM≤8)＞[10, 6]＞0＞成功数0 失敗！

熊埜御堂 亜聡：こら女神！！

DL：なんか今日はよく10を見るな…

熊埜御堂 亜聡：「おい爽太、わかってるな？ お前の姉ちゃんだ。お前だけが説得できる。しっかりやれ」

爽太：「う、うん…！」ではこのまま爽太の手番、あかりへ説得を試みます…！

爽太：1DM≤6〈説得(社交術)〉(1DM≤6)＞[9]＞0＞成功数0 失敗！

爽太：「お、おねえちゃ、……！」と説得しようとするものの、体が震えて上手く声が出なかった…

DL：2ラウンド目、再び小波先輩の手番

小波 絵本：では古々神に＜日本刀＞で！

DL：どうぞ！

小波 絵本：あ、クリケも使います！

DL：了解です！

system：[小波 絵本] クリケ：1→0

小波 絵本：DM≤6〈武術(日本刀)〉(1DM≤6)＞[1]＞2＞成功数2 ダブル！

system：[小波 絵本] クリケ：0→1

小波 絵本：1d6 ダメージ (1D6)＞6

DL：わお

小波 絵本：よっしゃ

小波 絵本：「——もう一度言うぞ」

小波 絵本：「死ぬほど嫌な目に遭いたくなければ、この島で大人しくしている。その方が身の為だ」

巨海 真名子(古々神) : シークレットダイス ???

巨海 真名子(古々神) : 『ぐっ……この小童があ…!』

DL : ではだいふらついていますね、尚立ってますね

巨海 真名子(古々神) : そのまま拳銃を…

巨海 真名子(古々神) : choice[亜聡くん,小波先輩] (choice[亜聡くん,小波先輩]) > 亜聡くん

巨海 真名子(古々神) : 亜聡くんへ!

熊埜御堂 亜聡 : バ神とか(裏で)言うから…

巨海 真名子(古々神) : 『だが貴様はどうでもいい…! まずは双子を…!』

巨海 真名子(古々神) : 1DM<=3 拳銃 (1DM<=3) > [1] > 2 > 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 亜聡 : えええええええええ! ?

熊埜御堂 亜聡 : …リアクション取りたいです! 回避判定できますか! ?

DL : OK です、〈*運動〉〈アクロバット〉〈危機察知〉などで対抗判定になります!

熊埜御堂 亜聡 : ありがとうございます! ダブルに勝たないといけないのか…とりあえずクリチケ使います…

DL : どうぞ!

熊埜御堂 亜聡 : 〈危機察知〉でいきます…!

system : [熊埜御堂 亜聡] クリチケ : 2 → 1

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=5 〈危機察知〉 (2DM<=5) > [1, 6] > 2 > 成功数 2 ダブル!

DL : 避けました!

DL : では苦し紛れに撃った弾は真っ直ぐ亜聡くんへ向かうが——それをあなたはギリギリで避けた!

熊埜御堂 亜聡 : 「っ、! つぶね!!」

熊埜御堂 亜聡 : 「死ぬだろいい加減にしろ!」

巨海 真名子(古々神) : 『我が復活の為に死ぬ!』

熊埜御堂 亜聡 : 「嫌だっつてんだろ!」

あかり : 次はあかり…ですが動かないので亜聡くんですね

熊埜御堂 亜聡 : もう一度〈心理〉チャレンジを…!

DL : どうぞ!

熊埜御堂 亜聡 : 2DM<=8 〈心理〉 (2DM<=8) > [4, 10] > 0 > 成功数 0 失敗!

DL : はい

熊埜御堂 亜聡 : 女神ー??

熊埜御堂 亜聡 : 「爽太、ちゃんと声出せ」 雑応援

爽太 : 「え、ええー! ?」

爽太 : このまま説得を…

爽太 : 1DM<=6 (説得(社交術) (1DM<=6) > [1] > 2 > 成功数 2 ダブル!

爽太 : 「……お、お姉ちゃん!」

爽太 : 「も、もうやめよう! ? こんなこと、きっとお父さんだって嬉しくないよ!」

あかり : 「っ、爽太……」

爽太 : 「お父さんが僕たちに色々教えてくれなかったのは、お父さんが僕たちを守りたかったからなんだって思うんだ…」

爽太 : 「確かに放っておかれるみたいで寂しいし、悲しいけど…だいすきなお父さんの力になれないのは悲しいけど…」

爽太 : 「でも、こんなことしちゃう方が…きっと、お父さんだって僕らの何倍も悲しんじゃうよ…」

あかり : 「……でも」

あかり : 「でも、わたし、もうこんなことしちゃって、…もどれない…お父さん、きっと怒る…」

爽太 : 「怒ってくれるのは、その分心配してくれたからだよ」

爽太 : 「ね、だいじょうぶ。僕も一緒に謝ってあげるから!」

あかり : 「……………」

DL : あかりは手で顔を覆い、その場に力なく座り込んでしまいます。

戦闘離脱です。

DL : ではこのまま 3 ラウンド目、小波先輩どうぞ!

小波 絵本 : ではクリチケ使用で、古々神に<日本刀>!

system : [小波 絵本] クリチケ : 1 → 0

小波 絵本 : 2DM<=6 (武術(日本刀)) (2DM<=6) > [2, 4] > 2 > 成功数 2 ダブル!

system : [小波 絵本] クリチケ : 0 → 1

DL : ウワーツ、強い! クリチケとダメージどうぞ!

小波 絵本 : ありがとうございます!

小波 絵本 : 1d6 ダメージ (1D6) > 4

DL : では、海鳴切は迷いなく古々神を捉える。

DL : そしてそのまま力を入れずとも——悪しき神を断ち切れてしまう。

巨海 真名子(古々神) : 『ぐっ、お、おのれ…！ またしても…！』

巨海 真名子(古々神) : 『またしても、余所者に……！ 我が野心を阻まれるとは…！』

小波 絵本 : 「……良かったな。どこかの誰かさんと違って、生き恥を晒すような事にならなくて。」

DL : そのまま古々神は膝を付き、憎々し気にあなた達を見上げた……戦闘終了です、お疲れさまでした！

熊埜御堂 亜聡 : お疲れ様でしたー！先輩最高！

小波 絵本 : お疲れ様でしたー！

DL : …辺りに静寂が戻る。

古々神は肩を押さえ、苦しい顔であなた達を睨みつけている。

DL : 爽太はあかりに駆け寄り、ぎゅっと抱きしめて背中を優しく叩き労わっていた。

……あなた達が来た道から声が聞こえる。どうやらはぐれた三人が追いついたようだ。

熊埜御堂 久永 : 「……亜聡！ 明香！ 小波くん！」

熊埜御堂 亜聡 : 「、…親父」

熊埜御堂 久永 : 「おお、無事か！ よかった！」

小波 絵本 : 「久永さん…。出てこられて良かったです」 刀を納めます

熊埜御堂 久永 : 「ああ、ファイト一発なんて久しぶりにしたな」

熊埜御堂 亜聡 : 「何してんだよ」

押火 : 「なんで坊さんがこんなパワフルなんだ…」

小波 絵本 : 「押火さん。これ、ありがとうございます」 刀を返します

押火 : 「おう。……やれたか」

小波 絵本 : 「おかげ様で」

押火 : 「そうか。これであいつも浮かばれるってもんだ」

草間 : 「……すみません。爽太と、…あかりは…」

熊埜御堂 亜聡 : 「…あかりならそこに爽太と一緒にいる」 明香ちゃんを抱きかかえたまま、あごで軽く示す

草間 : 「……ありがとうございます」

DL : そう言って草間は二人に近づき、いくつか言葉をかけた後に二人をぎゅっと抱きしめる光景が見える。

熊埜御堂 久永 : 「……で、だ」

熊埜御堂 久永 : 「こいつは…このまま警察にでも突き出せばいいのか？」

DL : そう言った久永の視線の先には、苦しそうな真名子…もとい古々神がいる。

熊埜御堂 久永 : 「……本当に巨海さんか？ それにしちゃ妙な気配を纏ってるが」

熊埜御堂 亜聡 : 「あー……。…どう説明すりゃいいんだろうな」

熊埜御堂 亜聡：「…体に乗っ取られてる？みたいつか、なんつか…」

熊埜御堂 久永：「ははあ、つまり憑りつかれてるんだな」

小波 絵本：「……お前…、まだそこに居たのか…」（呆れ顔）

巨海 真名子(古々神)：『当然よ…矮小な人間の力では、私を完全に殺すことなどかなわぬ…』

巨海 真名子(古々神)：『例え今企みが防がれても、再びこの地に舞い戻りその時こそは……っ、！？』

DL：古々神がそう叫んだ瞬間——地面が大きく揺れ動く。

DL：しかし不思議なことあなた達の周辺は小さな揺れで収まり、古々神を中心とした狭い範囲のみが大きく揺れ出した。

巨海 真名子(古々神)：『なんだっ、これは、……まさか！』

巨海 真名子(古々神)：『みのいしかつ、』

DL：——そう言い終わる前に古々神が立っていた場所には大きく陥没し、そのまま古々神を……巨海 真名子の体ごと飲み込んだ。

DL：気付けばそこにはもう誰もおらず、ただただぽっかりと開いた深い深い、とても深い穴がそこにあるだけだった。

熊埜御堂 亜聡：「うわっ！…、………あ」残された穴を見て

小波 絵本：「………！……これは…、……駄目、だろうな…」

熊埜御堂 久永：「……あー」

熊埜御堂 久永：「本物の神の怒りに触れた、ってところか？」

押火：「………」

押火：「遅いわ」

熊埜御堂 亜聡：「本当だよ」

DL：…ふと、亜聡くんの腕の中でもぞもぞと動く気配がする。

熊埜御堂 明香：「……う……」

熊埜御堂 亜聡：「、…！」抱きかかえたまま視線を向けます

熊埜御堂 亜聡：「…、起きたか、明香。おはよう」

熊埜御堂 明香：「……おにいちゃん…？」

熊埜御堂 亜聡：「おう。…体の調子はどうだ？」

熊埜御堂 明香：「……あたま、ぼーっとする…」

熊埜御堂 明香：「……あのね」

熊埜御堂 亜聡：「ん？」

熊埜御堂 明香：「ゆめ、みてた…おとうさんと、おかあさんのゆめ」

熊埜御堂 明香：「…「まだダメだよ」って」

熊埜御堂 明香：「…「おじいちゃんおばあちゃんになってからおいで」って」

熊埜御堂 明香：「……言われちゃった…」

熊埜御堂 亜聡：「……………そうか」

熊埜御堂 亜聡：「…大丈夫だ。全部、終わった。……帰ったら、墓参りにでも行くか。」抱きかかえたまま、少しぎゅっします

熊埜御堂 明香：「……………うん」

DL：…あなた達は誰からともなく「下りようか」と言い出す。

そしてそのまま鉾山を下り、巨海邸へと戻り身を休める事だろう。

DL：——嵐はもう、過ぎ去っていた。

DL：…

DL：……

DL：…………

▼帰船 ——約束

DL : ——それから二日ほど経って。

DL : あなた達は今、港で帰りの船を待っているところだ。

港にはあなた達を見送りに押火が来ている。

押火 : 「悪いな、俺だけでよ。草間も誘ったんだが娘のことと、…あと巨海家の資産整理で忙しいらしい」

熊埜御堂 亜聡 : 「ん、俺等は別に。今はあかり爽太の方が優先だろうしな」

小波 絵本 : 「はい、僕もそれで充分です」

押火 : 「ならいいが」

DL : ——あれから。

DL : 山を下りてからすぐ、港に巨海 真名子の遺体が上がったと聞かされた。

この数日で遺体が二体も上がったことで小さな島が大騒ぎになった。

DL : 無論警察もすぐさまやって来て、巨海邸の周囲はまだ騒がしい。

あなた達も事情聴取などで拘束されそうになったが、それを庇って矢面に立ったのは真名子の秘書である草間であった。

DL : 彼は明香の体調がもどったのを確認すると、すぐさま帰りの船を手配しまるで追い出すようにしてあなた達をこの島から離れさそうとしてくれた。

押火 : 「脅威は去ったんだからもうちょっとゆっくりさせてやってもいいとは思ってたんだがな」

熊埜御堂 明香 : 「あ、あはは…でも、いろいろありすぎたから…」

小波 絵本 : 「僕はともかく、この 2 人はのんびり観光なんてやる気はもう起きないでしょう」

熊埜御堂 亜聡 : 「そうすね。そもそも、草間さんに面向かって「帰りたい」つつたのは俺だし」

熊埜御堂 明香 : 「ううん、わたしほとんど寝てたから全然自覚が…」

熊埜御堂 亜聡 : 「観光してえなら別の場所に連れてくから、この島は諦めろ」

熊埜御堂 久永 : 「そうだぞ明香！ なんならこの四人で○イズニーランドでも行くか！」

熊埜御堂 亜聡 : 「○イズニーランド」

熊埜御堂 久永 : 「ん？ シーがよかったか？ それともリゾート？ ……あつ、○SJ 派か！？」

小波 絵本 : 「……………」(すっ…) (そつと距離を置こうとする)

熊埜御堂 亜聡 : 「おい先輩これ見よがしに存在感を消すな。巻き込まれる」

小波 絵本 : 「断る」

アリス : 「良いわね～！ 私 賑やかな場所好きだし大賛成よ！！」

熊埜御堂 明香 : 「わたしも！ 遊園地いきたーい！」

熊埜御堂 亜聡 : 「明香、先輩が（○ツキーの）"耳"つけるの見たいだろ？」

小波 絵本 : 「おい」

熊埜御堂 明香 : 「…ちょっと見たい…」

熊埜御堂 亜聡 : 「よし」

ドロシー : 『遊園地かあ…。私、行くの初めて…。楽しみ…』(そわそわ)

熊埜御堂 亜聡：「……アリスもドロシーも行く気満々ってことはつまり、まず俺が逃れる道はない。それならいっそ先輩も道連れだ。以上。」

熊埜御堂 久永：「はっはっは、安心しろ小波くん！ 全部奢るから！」

小波 絵本：「……………はい……………」(諦めの顔)

押火：「かわいそ」(笑)

小波 絵本：「……………久永さん、押火さんも来たいそうですよ」

熊埜御堂 久永：「あ、押火さんもですか？ いいですよ！！！」

押火：「え」

熊埜御堂 亜聡：「よし、財布が増えたな」

押火：「おい」

小波 絵本：「道連れ……………、いえ、仲間は多い方が楽しいですからね」(にやり…)

押火：「道連れっていったな」

熊埜御堂 亜聡：「おっさんあの時、『俺等が出るとき一緒に来るか』って言ったら『考えとく』つつてただろ。それが今だ。」

押火：「くっだらねえ事ばっか覚えてやがる。そういうとこほんとあいつにそっくりだ」

熊埜御堂 亜聡：「親子二代揃っておっさんに面倒事を持ち込むのが趣味らしいんで。」

押火：「そうかい」

DL：押火はそう言って笑うと、エプロンのポケットに手を突っ込む。

そしてそこから……………指輪を二つ取り出した。指輪の先端には、淡い水色の宝石がついている。

押火：「ほらよ」

熊埜御堂 亜聡：「ん？」

熊埜御堂 明香：「？ これ…」

押火：「形見分け」

熊埜御堂 亜聡：「かた、…………つまり？」

押火：「あいつらのなんだ。…結婚指輪」

押火：「頼まれて、作って、渡して、…………返された」

押火：「先端の石はアクアマリン、…………意味は「聡明」。知ってるよな」

熊埜御堂 亜聡：「、……………」

水野 香吾：『僕は、石の中でアクアマリンが一等好きでね。子供が生まれたらそれにちなんだ名前をつけたいと思う』

押火：「だとよ。それ踏まえてもお前達を持ってた方がいいだろ」

熊埜御堂 亜聡：「……………はは」

熊埜御堂 亜聡：「わかった。…もらっておく」

熊埜御堂 明香：「…………ありがとうございます、…大事にします！」

熊埜御堂 亜聡：「…。おっさん」

押火：「ん？」

熊埜御堂 亜聡：「ありがとな。…いろいろ」

押火：「……気にすんな、俺がやりたいようにやっただけだ」

押火：「ま、どっちにしろこの島出るまでにはもうちょっと時間かかりそうだな。ジジババ共が全員出て行かない限り、島唯一の店をたたむワケにやいかないしよ」

押火：「だから来いよ、とは言われたがすぐには付いていけん。その詫びみたいなモンも含んでる」

熊埜御堂 亜聡：「そうか。まあ、おっさんがそれでいいならそれで。」

熊埜御堂 亜聡：「じゃあ次会うのは○イズニーランドだな」

押火：「揺るがねえな○イズニーランド」

押火：「あと俺シーがいい。酒 OK らしいし」

熊埜御堂 久永：「亜聡、シーで」

熊埜御堂 明香：「パパ」

熊埜御堂 亜聡：「このおっさんども」

小波 絵本：「そんな事を言ったら久永さんが…、言ってる傍から…」

DL：……そんな会話を交わしているうちに、船がやってくるのが見える。
もうこの島ともお別れの時間だ。

熊埜御堂 亜聡：「…ん、船来たな。」

小波 絵本：「押火さん、色々とお世話になりました。」（お辞儀しながら）

押火：「気にすんな、じゃあな。元気でやれよ」

DL：押火に見送られ、あなた達は船に乗り込む。

……

DL：船はすぐに出発するだろう、徐々に港から離れて島から離れていく。

爽太：「……っ皆さ——ん！！！」

熊埜御堂 亜聡：「、…ん？」

小波 絵本：「………あ、」

DL：爽太が港に向かって走ってくるのが見えた。
あなた達に向かって大きく手を振り、声を張り上げる。

爽太：「つぎつ、……次に会えたときは！」

爽太：「今度こそ！ 釣りしましょうね————！！！」

熊埜御堂 亜聡：「、………はははっ」 船から、爽太君に向かって片手をあげる

小波 絵本：「——ああ、そうだな。」 肯定の意味で手を振り返します

熊埜御堂 明香：「うん、いろいろとありがと———！」

DL : ——それに構わず船は進む、島は段々小さくなっていく。

DL : あなた達は島で起きた事を思い返しながらも、再び日常へと帰っていくのだろう。

DL : ……エモクロア TRPG「双命」 END

DL : という事でセッション終了となります、お疲れさまでした！！！！

DL : 時間大幅オーバーすみません…！

熊埜御堂 亜聡 : お疲れ様でしたー！！楽しかったです！！うわーーーー！！

小波 絵本 : お疲れ様でした！双子ちゃん無事に帰れてよかった——！！

熊埜御堂 亜聡 : みんな無傷で帰ってこられて本当によかった…… シナリオもめちゃくちゃおもしろかったです……

小波 絵本 : ね…。小波も色んな意味で自分を見つめ直して吹っ切れた感じします…！

DL : わ～～最後まで本当にありがとうございました…不慣れな DL で大変申し訳ない…

熊埜御堂 亜聡 : いえいえ、めちゃくちゃ楽しかったです…！ 最後までありがとうございました！

熊埜御堂 亜聡 : 先輩の RP もいろんなところで刺さってましたし、最後の戦闘も大活躍でしたね… 亜聡も明香ちゃんを守れて大満足です

小波 絵本 : 亜聡君も古々神に向かって吼える RP すごい良かったですよ…。怒りはごもっともだし、何より明香ちゃんの事 必死で守ろうとしてるの伝わったし

DL : めっちゃかつよかったですお兄ちゃん…お兄ちゃん好き…

DL : あと小波先輩もほんともうかつよかった…刀を振るう小波先輩を見たくて刀用意したところあるので…

小波 絵本 : ありがとうございます！おかげで＜日本刀＞技能活かしました…！シナリオも色々と考えさせられて楽しかったです…！

system : [熊埜御堂 亜聡] 残響 : 『両親との思い出』を取得

system : [小波 絵本] 残響 : 『さよなら』を取得

▼NPC 紹介 2

熊埜御堂 明香(くまのみどう めいか)

熊埜御堂 亜聡の双子の妹、ミス研及びオカ研所属。
明るく社交的な性格の女子高生、ちょっと甘えん坊。
少し鈍感で自分に向く他人の好意や悪意には気づきにくい。

*

基本的に立場は共鳴者達と同じ。
鈍感故、周囲の悪意に気づけなかった被害者枠。

熊埜御堂 久永(くまのみどう きゅうえい)

熊埜御堂兄妹の養父。天築市にある寺「華栄寺」の住職。
豪快な性格で細かい事は気にしない、長男に嫌われているらしい。

*

基本的に立場は共鳴者達と同じ…だが、白戸や巨海家を疑っている。

白戸(しらと)

熊埜御堂 明香が世話になっていた児童養護施設の所長。
小心者でいつもおどおどしている。

*

多額の謝礼金目当てで久永や押火が伏せていた双子の情報を巨海に流した張本人。
口封じのため、二日目の早朝に真名子に殺害される。

草間(くさま)

大手宝石メーカー「OMI」の社長秘書。
常時表情が変わらず、少し不気味。

*

元々は双子の母・亜希の幼馴染で、水野夫妻が島を出る手助けをした。
しかし自身にも子供が出来、更に妻が亡くなってしまった為にいろいろとがんじがらめになってしまった。

あかり

海古島の富豪「巨海家」で使用人見習いをしている女の子、7 歳。

明るく活発、少々強引で押しが強い。爽太の双子の姉。

*

本名は「草間 あかり」、真名子から父親の助けになりたいなら明香を陥れるようにと言われていた。

爽太

海古島の富豪「巨海家」で使用人見習いをしている男の子、7 歳。

おとなしく物静か、島外の世界に憧れている。あかりの双子の弟。

*

本名は「草間 爽太」、父や姉と違って巨海家が何をしているかは知らない。

味方枠。

巨海 真名子(おおみ まなこ)

宝石メーカー「OMI」の取締役であり、海古島にて大きな発言力を持つ富豪「巨海家」の現当主。

穏やかで物静かな老婦人、熊埜御堂兄妹の実祖母であるらしい。

*

今回の事件の黒幕であり、【古々神】が憑りつき精神が汚染されている。

草間やあかりを使い、双子を生贄にしようとした。

押火(おしび)

海古島にて宝石工房 兼 みやげ屋「なみだめ」を経営している男性。

不愛想でものぐさだが、腕は確か。

*

元々は双子の父・香吾の大学の同期で、海古島には鉱石調査の為長期滞在していた。

そこから一連の事件が起き、草間と協力して夫妻を島外へと逃がす。

その後は巨海家の監視も含め、島に在住するようになる。

水野 香吾(みずの きょうご)

熊埜御堂兄妹の実父、鉱物学者だったらしい。

8 年前に自殺している。

*

元々は海古島には鉱石調査の為長期滞在していたところを亜希と出会い結ばれる。

その後双子を授かるが、その時に島の因習を知りお腹の子供達と妻の為に海古島からの脱出を計る。

だが巨海家の追跡を躲しきれなくなり、せめて子供達の所在だけでもほかそうと自殺をしようという妻の主張を受け入れてしまう。

水野 亜希

熊埜御堂兄妹の実母、旧姓は「巨海」。

8 年前に自殺している。

*

鉱石調査の為にやってきた香吾と出会い結ばれ双子を授かるが、因習の事を知っていたためにお腹の子供達の為に海古島からの脱出を計った。

巨海家の血筋の為、【古々神】の影響を多少なりとも受けており島から脱出した後は精神的に不安定であり、いつ島に連れ戻されるか影で怯えていた。

▼怪異

【海之石神】

ミノイシカミ。とある海域を住处とする巨大な人魚のような姿をした怪異。

古来より人に対しては友好的であり、人の身に不幸があった時は涙を流し哀しむという慈悲深き土地神。

この怪異が流した涙は鉱石となり、不思議な事にその土地から出土するようになるという。

その鉱石は「海涙石(ルサルカナイト)」と呼ばれ、高値で取引されている。

【古々神】

かつて存在したとある悪神が名と身体を奪われ貶められた末の姿。元の名前と姿は既に失われている。

自身を貶めた人間達に強い恨みを持っており、今現在とはある一族に憑りついており、自身を信仰するように向けつつ復讐の機会を伺っている。

▼シナリオ背景

その昔、「■■■■」という悪神がとある島に暮らす人々を支配、蹂躪し、悪逆の限りを尽くしていた。

人々は悪神に対抗する術を持たず、その支配を受け入れていたがある時「海之石神」と呼ばれる土地神の加護を受けた島外の人間が神刀を携えて島にやってくる。

その神刀で「■■■■」を斬り伏せた上でその名を奪い捨て、古い神——「古々神」と新たに名付け、その存在を矮小なものに貶めて島を悪逆から救い出した。

その人間は「海之石神」と共に英雄として祭り上げられ、人間もまた島の長として島に留まる事を選ぶ。

島には関わった二柱の神から名が取られ、新たに「海古島(みこじま)」と呼ばれるようになる。

それから時間が経ち、海古島はかつての島の長の末裔——「巨海(おおみ)家」の統治の元、平和な時が流れていた。

ある時、巨海家の一人娘と漁師の青年が恋に落ちるも当主である父親にその仲を反対され、引き離されそうになる。

その事を嘆いた二人は島の崖から身を投げ、心中を図る。

当主はその事実が家の名を傷つけることを恐れ、二人を弔うために壮大な葬式を上げる。

その葬式を眺める事で心中を知った「海之石神」は強く嘆き、涙を流す。その涙は鉱石となり、島の土地から出土するようになった。

その事に目をつけたのが、退治されながらも島に潜伏していた「古々神」であった。

「古々神」は巨海家当主と感情が共鳴した事を利用して当主に憑りつき、島の土地を掘り起こすことで「海之石神」の涙が鉱石になったものを掘り起こす。

時は明治時代、本土で起こるジュエリーブームにも乗り、鉱石を加工した宝石——「海涙石(ルサルカナイト)」は幻の宝石として持て囃されるようになり、それに伴い島も裕福になっていった。

「古々神」は島に繁栄をもたらすことで自身への信仰を集め、持っていたかつての力を取り戻して返り咲く事を企んだのだ。

しかし徐々に掘り出せる鉱石の数が減っていき、遂には全く出て来なくなる。これは「海之石神」の嘆きが癒え、涙を流すことがなくなったためだった。

「古々神」は再び鉱石を出土させる為、男女の双子をかつて死んだ男女に見立て殺害することを「儀式」として定着させた。

▼おまけ ——茶番

・亜聡と押火さんの後日談

(Lily : かつての友人と同じ宝石を選んで大事な人に渡す亜聡、押火さんどう思って見てたんだろ)

押火「内心すげえウケてた」

亜聡「なんでそこでウケるんだよ」

押火「似ててウケる、って」

亜聡「おっさんのには笑ってる場合じゃなかったくせにこいつ」

押火「別にいいだろ、内心でウケるくらい。…あとまあ」

押火「捻くれてはいるが変に育ってなくて安心はした」

亜聡「……………」

亜聡「親かよ」

押火「親ではねえよ」

亜聡「知ってるっつもの。考えてることがおっさんくさいっつてんだよおっさん」

押火「そらおっさんだから」

亜聡「開き直りやがって。……ああもう、そんなことはどうでもいい。で、話の続きは。」(実の父親の話を聞きに来た感)

押火「主に何が聞きたいんだよ」

choice[性格や人格,同期時代の思い出話,母親とのこと,黒歴史]

DiceBot : (choice[性格や人格,同期時代の思い出話,母親とのこと,黒歴史]) → 性格や人格

亜聡「…父さんが、そもそもどういう人間だったかが聞きたい。」

押火「あんまり性格は良くなかったな、排他的というか」

亜聡「いい性格じゃなかったのは知ってる。排他的？」

押火「日頃から「人間より石が好きだ、静かだから」とか言ってるような奴だったからな」

亜聡「ああ…（捻くれてんな）」

押火「まあ俺は幼馴染だったからギリ許容範囲だったらしい」

押火「そんな奴だから幼小中高大と俺以外の友達いなかったな」

亜聡「社交性ゼロだな」(※社会1の息子)

亜聡「おっさんよく付き合ってたな。そんな奴に。」

押火「おもしれーなーって思いながら付き合ってた」

亜聡「どこが??」

押火「中学の頃皆勤賞逃した理由が「石探しに夢中になってた」ところとか…」

亜聡「アホすぎんだろ父さんマジか」

押火「な、だからまあ」

押火「結婚する、とか言い出した時は寝ぼけてんのかなとか思った」

亜聡「……。まあ、そうなるわな。…母さんは何が良かったんだ、あれの。」

choice[好きになったのは父から,母から]

DiceBot : (choice[好きになったのは父から,母から]) → 好きになったのは父から

押火「さあなあ。そもそも惚れたのは水野の方が先だし」

亜聡「、げほっ。……ええ…石しか興味なかったくせに…？」（めちゃくちゃ怪訝そうな顔）

押火「おう、目に惚れたんだと」

押火「『アクアマリンに似てた』だったかな」

亜聡「…うわ」(うわ)

亜聡「よく母さんそれで頷いたな」

押火「箱入りだったしなあ…」

押火「あと、彼女はそれなりに鈍感なところあったし直球な方は色々と言いたんだろ。……お前も似たやつの心当たりがないか？」(にや)

亜聡「……………すげーあるわ。」心当たりが。

押火「やっぱ似てるよ」

亜聡「似てんのかあ…。……………そっか。」

押火「……………俺は悪い事じゃないと思うけどね」

亜聡「…。俺は今まで、…少なくとも今の家に引き取られてからは、前の両親のことや家のことは考えねーようにしてたし。明香にも思い出させねーようにしてたから」

亜聡「『似てる』だなんて言われて、腹が立たずに『ああ似てるのか』って言える日が来るとは欠片も思ってたなかった」

押火「……………あいつの選択は間違っていない、なんて口が裂けても言うつもりはない」

押火「でも、少なくともお前らの為ではあった。極端であっても、間違っただけで、……………ちゃんと愛されていただろうと、俺の目からはそう見える」

亜聡「…。愛…ね。」

亜聡「愛があったなら全てを許せる、とは、言わねーけどな。少なくとも俺は。……………でもま、あの人が何を考えてたのかは、今回のことでやっと分かった。」(ふいつ)

押火「ん」

亜聡「生きてる内は何も分かんなかったのに、皮肉だな」

押火「そんなもんさ」

亜聡「……………。…そんなもんなら、しゃーねえな。」

・双子と先輩の後日談

(ごまゆきみ：(回りに気にかけてくれる人が居る小波は本当に恵まれてるなあ…))

(pokoya：(夏休み明けたら小波先輩の表情が少しでも明るくなったらいいな…))

亜聡「少なくとも引きこもりは脱却しただろ先輩。」

小波「お前が他人の事を言える立場か」

亜聡「俺はいいんすよ。健全な引きこもりだから。」(?)

ドロシー「中身は健全かもしれないけど、外には出かけようね…」

明香「あの部屋は健全じゃないと思うよお兄ちゃん…」

亜聡「いいかドロシー。日光を浴びなくても人は死なない。」

亜聡「あと部屋が汚くても人は死なない。」

明香「お兄ちゃん」

小波「お前 どうしようもないな…」

亜聡「いいんすよ俺に無いところは明香が持っていったっただけっすから」

明香「もー！」

小波「やっぱりお前は怠惰で生意気なモヤシで合っているな」

明香「…あっ、そうだ！」

明香「お兄ちゃん、今度先輩を部屋に招いてみたら？ お客様が来るってわかってたらお掃除するでしょ？」

亜聡「は？」

明香「どうですか先輩！ わたしもその時にお菓子作って持って行きますし！」

亜聡「おいメイ、勝手に話を」

小波「……はあ…、わかった。ついでに海古島で集めた資料のスクラップ作りを手伝ってくれるなら」

明香「もちろんです！」

亜聡「おい先輩」

亜聡「いやマジか」

明香「もうお兄ちゃん、ここまで決まったんだからじたばたしないよ！」

亜聡「肝心の俺が了承してねーのに決まってんのなんでだよ」

ドロシー『亜聡、諦めてお部屋片づけよう』

亜聡「……………」

1d10<=3 <生存>亜聡の今日のお部屋は…？

DiceBot：(1D10<=3) → 4 → 失敗

明香「……」

明香「お兄ちゃん」

亜聡「…やっぱり後日ってことには」

亜聡「いや、いっそ1年後とかで」

小波「僕が卒業するまで待つつもりか？」

亜聡「卒業したら忘れるかなって」

明香「お兄ちゃん」 圧

亜聡「…わーった、わーったから圧やめろ」 降参

明香「…もー、しょうがないから手伝ってあげるから早く片付けよ！」

ドロシー『がんばれ…』（ぐっ…）

亜聡「めんどくせー…」

明香「お兄ちゃん！」

明香「真面目にやらないとプリン抜きだからね！」

亜聡「俺は別に抜かれても…」

明香「…せっかく作ったのに食べてくれないの？」

亜聡「(うぐ、) ……、…あー。あーあー、お前のせいでプリンの口になった。どうしてくれんだお前」
 アリス「冷たいわね～」
 明香「食べたいならちゃんとお掃除しようね！ ごめんなさい先輩、もうちょっとだけ待っててくださいね！」
 小波「いや、急ぎじゃないから構わないが」
 亜聡「(一番はりきってんの明香なんだよなあ…)」片付けの算段を立てながら

・双子と先輩と古々神の後日談

pokoya: (まあもう恐らく復活はないので…)(かわいい女の子にもならないし)
 Lily: (かわいい女の子にならない怪異なんて…) (…いや、ワンチャン変態先輩に今回の事件について聞かせたら、なんとなくのイメージで美少女化イラストを仕上げてくれる可能性は)
 ごまゆきみ: (wwwwww) (『CS』がラビットホール使える状態のままだったらワンチャンかわいい女の子になってたかもですねw)
 pokoya: (それはそれで貶める感じになるのでいい対策かもしれない)> 美少女化
 ごまゆきみ: (そしてカグヤ同様 住吉にパスしましょう)

住吉「うはああああああああ！！！！！！この子もかんわいいいいいい！！！！！！」
 古々神「なっ、この不敬者が！ 言うに事欠いて「かわいい」だと！？」
 亜聡「うわ」(うわ)
 住吉「おお！ 神サマ系のタカビー女子かぁ！！いいねえ！ 今までの魔女とは違うタイプでかわいいいいいい！！！！！！」(ハハハ…)
 古々神「ぐっ…海之石神に放り出され漂っていたところを強い念に引っ張られたと思ったら何故このような体に…！」
 小波「だから言っただろう？『大人しく島に留まっている』と」
 古々神「黙れ！！！」
 亜聡「可哀想に」(笑)
 住吉「古々神……。じゃあココちゃんだね！！！！！！」(ハハハ…) (画面にべったり顔寄せる)
 古々神「汚い顔を寄せるな阿呆！！」
 住吉「ごめんごめん！ 怒った顔もかんわいいいいい～～～～！！」(デレデレ)

choice[最初どこにいたの亜聡くんの cs, 明香の cs, 小波先輩の cs]
 DiceBot: (choice[最初どこにいたの亜聡くんの CS, 明香の CS, 小波先輩の CS]) → 小波先輩の CS

小波「なぜか僕の『CS』に入っていたからとりあえず住吉に見せたらこうなった」
 明香「そんなこともあるんだ…」
 亜聡「なんかいろいろあった結果、全員の CS に魔女(?)が一人ずついる感じになったな」(今回の茶番時空では)
 明香「そうだね、すごく賑やかになった！」
 ココ「おい！ おい貴様！ 海鳴の新たな成り手！ この気色の悪い人間をどうにかしろ！ おい！」
 小波「僕としては住吉に譲ってもいいんだが」

住吉「ホントに！？！？」（がばっ）

亜聡「どうにかするどころか売られそうになってんぞ」

ココ「いいワケあるがたわけがー！」

カグヤ「来ていいよ！盾……いや、住吉の話相手が増えるのは私も嬉し〜から！」（にっこにこ）

住吉「カグヤちゃんもこう言ってるから！是非！！！！」（ハハハ…）

ココ「嫌だ！！！！！！」

……

小波「しかしお前、それだと僕と共同生活を送る事になるがそれで良いのか？まだ優しくしてくれるだけ住吉の方がマシとも言えるんじゃないのか？」

ココ「ふん、馬鹿め。そもそもお前と私は離れられんのだ。海之石神がそうしやがったからなあ！」

小波「はあ……、また厄介なのが増えた…」

亜聡「マジか。おもしろいことするんだな、海之石神」

明香「言い直してないよお兄ちゃん」

小波「これをおもしろいというならお前は十分トチ狂った頭してるぞ」

亜聡「逆にこれがおもしろくねーなら俺は十分とち狂った頭してるだろ」

亜聡「何がどうなったら先輩のスマホに繋ぎ留められてその上で女子化するんだ y ぶっは」

ココ「黙れ！」

ココ「そもそも元が男神だと言った覚えはないわ！」

亜聡「えっ」

小波「それを言うならワスレモノだって元の姿の原型留めてないだろう」

亜聡「ワスレモノは、もともとドロシーの顔が初対面だったからな。違和感もくそもねーが、……こっちはな」

ココ「(ふんっ)」

（ここでココちゃんのイメージ立ち絵公開）



住吉「やっぱココちゃん欲しいよおおおおお〜〜〜〜〜！！！！」（じたばた）
 ココ「怖い」
 亜聡「純粋に恐怖を感じてて笑う」
 ドロシー『わかる』
 アリス「すごいわこの人間…。曲がりなりにも神に恐怖心与えてる…」
 明香「やっぱり人間が一番こわいってこと…？」
 亜聡「その結論に至る理由がこのやり取りでいいのか？」
 明香「だって怖いって証言してたし…」
 小波「雀にも「怖い」だの「キモイ」だの散々言われてきたのに直らないな本当に…」
 住吉「しょうがないだろ！？かわいい二次元の女の子は国宝なんだから！！！！」（？）
 亜聡「良かったな。曲がりなりにも「宝」として扱ってくれるらしいぞ」
 ココ「(…もしやこいつみたいな奴に祀り上げられた方が早く地位を取り戻せるのでは…？ でもすごい嫌だな)」
 小波「……言っておくが、あの時にお前に話した「知り合い」がその兎耳の女子だ。見てわかると思うが、大分苦勞しているだろう？」
 ココ「捕まってる時点で私より格下」
 カグヤ「はあ？ ？ ？ ？」（#^ω^）ヒ°牝°キ
 アリス「おおっと、初っ端からストレートに喧嘩売ってきた」
 ドロシー『いい度胸してるね』
 亜聡「なんか始まった」（女同士の喧嘩が）
 ココ「言っておくが私は 100 年ほどずっと暗躍しておったからなあ…所詮お前はもともと人の身である？」
 カグヤ「だから何？ 私なんて別の世界から移ってきたんだもんね〜！」
 ココ「自分の世界を制することができなかったのか…哀れな…」
 カグヤ「アンタだって世界どころか島一つすら制してないじゃん」
 ココ「お前は人一人に振り回されておるな」
 カグヤ「そういう自分だって今コイツに恐怖してたじゃん！」
 アリス「突如として始まったマウントの取り合い…。もといどんぐりの背比べ！ 勝つのはどっちだ！ 解説のドロシーさん、コメントをお願いします！」
 ドロシー『正直どっちも同じくらいどうしようもないと思う』
 明香「同じ感じで同じ風になったんだから仲良くしてほしいなと思っていました」
 亜聡「五十歩百歩。閉廷。」

……

小波「海古島に返品を希望する。」
 ココ「海之石神に言え」
 亜聡「たぶん返品不可商品だろうな」
 小波「押火さん、もう一度 海鳴切を貸して下さい。スマホを叩き切れば成仏させられるかも…」
 押火「あの刀は神しか切れん。…スマホに入るくらいのサイズになったそいつは本当にまだ神でいられてるのか…」
 亜聡「あー…神っつか、魔女だな」
 押火「なら無理だろうな」

アリス「無理でしょうね。経緯は違えど、取り込まれたカグヤが魔術を使えないんだし」小波「はぁ……、諦めてここに置いておくしかないのか…」

ココ「ふん！ お前に私の世話をさせてやるんだ、光栄に思え！」

小波「何故上から目線なんだお前は…」（はぁ…）

シナリオ名 : 双命 (作者: pokoya 様)
 セッション日 : 2022/10/19 ~ 2023/1/11 (全9回)
 製本日 : 2023/1/12

KP (敬称略) : pokoya
 PL (敬称略) : ごまゆきみ
 Lily



NPC